

10 植物・動物・生態系

10.1 調査

(1) 植物

ア 植物相

ア) 調査事項

調査地域に生育する種子植物及びシダ植物の種名及び分布状況とした。

イ) 調査範囲

実施区域内及びその境界から500mの範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-1に示すとおりである。

ウ) 調査方法

既存資料調査及び現地調査により行った。

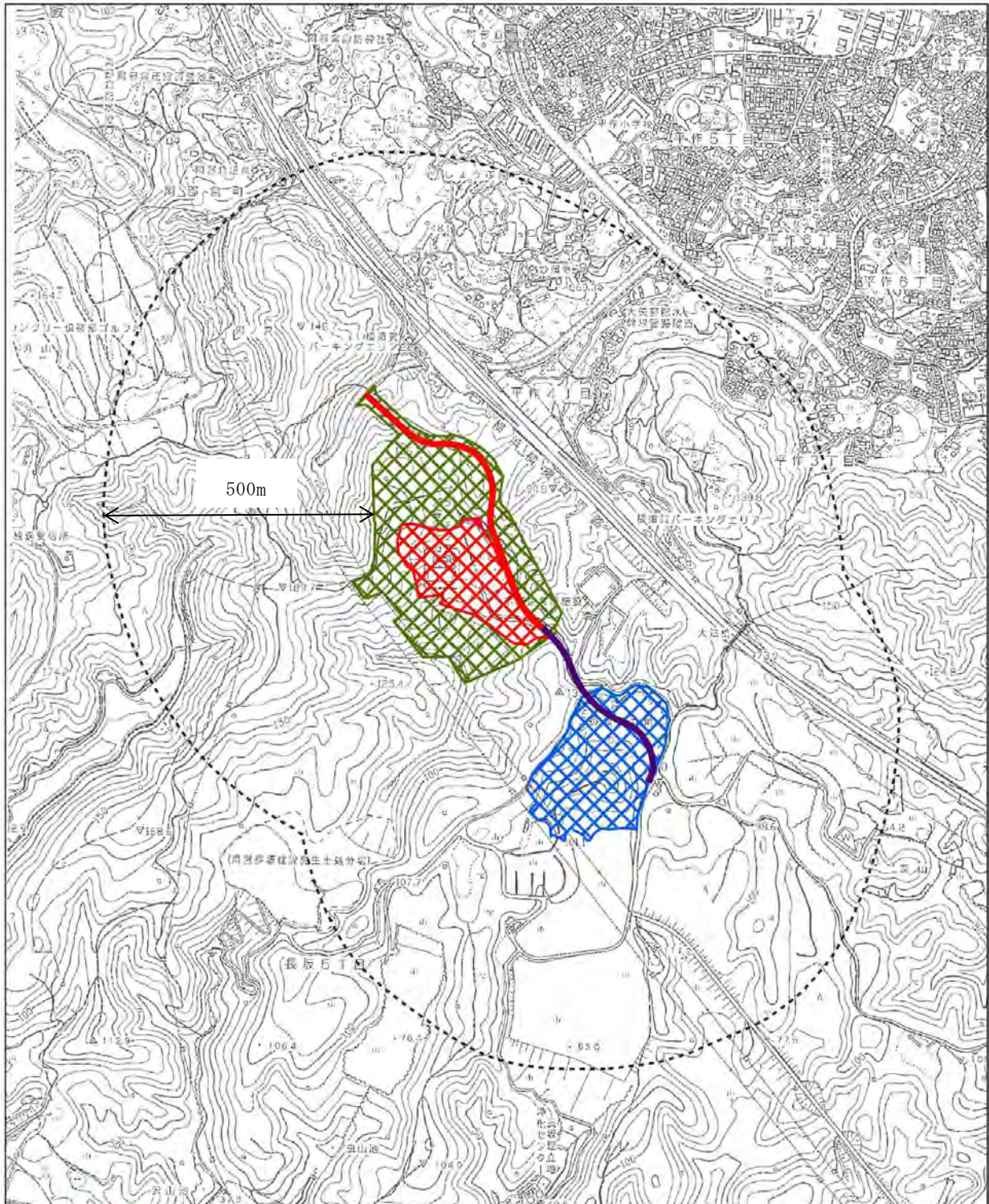
a 既存資料調査

横須賀市及びその周辺に生育する植物について既存資料の収集・整理を行い、記録のある生育確認種を整理し、あわせて表5-2-1-10-12 (P. 380) に基づき、重要な種について抽出した。

収集した既存資料は、表5-2-1-10-1に示すとおりである。

表 5-2-1-10-1 植物既存資料一覧

番号	資料名	発行者	発行年
①	「みどりのたより No.2」	環境庁自然保護局	昭和60年
②	「地域環境評価書 －三浦半島南部地域－」	神奈川県環境部	平成2年
③	「1990年身近な生き物調査 調査結果」	緑の国勢調査協力会	平成4年
④	「横須賀市芦名地区産業廃棄物 最終処分場建設事業 環境影響予測評価書 資料編」	神奈川県	平成12年
⑤	「Y-HEART計画基盤整備事業 環境影響予測評価書 資料編」	西武鉄道株式会社	平成14年
⑥	「神奈川県レッドデータ生物調査 報告書2006」	神奈川県立生命の星・地球博物館	平成18年
⑦	「平成23年度 かながわ環境整備 センター 環境保全対策（動物・植物）等 業務委託報告書」	神奈川県環境農政局 U-Landscaps Design株式会社	平成24年



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林(最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<p style="text-align: center;">N</p> <p style="text-align: center;">0 125 250 500 m</p>
<p>注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	

図 5-2-1-10-1 調査範囲(植物)

b) 現地調査

現地調査の調査内容は、表5-2-1-10-2に示すとおりである。

表5-2-1-10-2 植物現地調査内容

調査項目	調査時期・回数
植物相	夏、秋、早春、春：各1回

a) 調査方法

調査範囲を踏査して、目視により確認した植物を記録し、重要な植物が確認された場合には、種名、個体数、確認地点及び生育状況を記録した。踏査ルートは、調査範囲の植物相を把握できるように、多様な環境を含むようにした。現場で同定できない植物については、個体を採取して標本を作製した。

b) 調査地点

調査地点は、図5-2-1-10-2に示すとおりである。

c) 調査期間及び調査期日

調査時期及び調査期日は、表5-2-1-10-3に示すとおりである。

表5-2-1-10-3 調査時期及び調査期日

調査項目	調査時期	調査期日
植物相	夏季	平成24年 8月13日～15日
	秋季	平成24年10月15日～17日
		平成24年10月24日～25日 平成24年11月 8日～ 9日
	早春季	平成25年 4月 3日～ 5日
春季	平成25年 4月30日～ 5月2日	

エ) 調査結果

a 既存資料調査

既存資料調査により確認された分類群別の確認種の概要は、表5-2-1-10-4に示すとおりである。

横須賀市周辺において生育が確認された植物種は、133科811種であり、このうち表5-2-1-10-12 (P. 380) の選定基準に該当する重要な種は43科127種であった。

表5-2-1-10-4 既存資料調査等による植物分類群別の生育確認科・種数

分類群				合計		重要な種	
				科数	種数	種数	主な種名
シダ植物門				18	68	15	コヒロハハナヤスリ、キジノオシダ、タニイヌワラビ等
種子植物門	裸子植物亜門			7	10	3	イブキ、ハイネズ、ネズ
	被子植物亜門	双子葉植物綱	離弁花亜綱	64	319	23	ハクサンハタザオ、ウメバチソウ、イヌハギ等
			合弁花亜綱	26	200	43	シヤクジョウソウ、イヌノフグリ、ツルギキョウ等
		単子葉植物綱		18	214	43	ミズオオバコ、アマナ、キンラン、クマガイソウ等
合計				133科	811種	127種	—

b 現地調査

現地調査により確認された植物の分類群別科種数は、表5-2-1-10-5に示すとおりである。

現地調査の結果、合計113科534種の植物種が確認された。分類群別では、シダ植物15科45種、種子植物の裸子植物5科7種、被子植物93科482種であった。

調査範囲は、山地斜面を中心にカラスザンショウ、コナラ、植栽起源のオオシマザクラを中心とした夏緑広葉樹林が広がっており、ミズキ、イヌシデ等の高木も混生していた。また、スタジイやタブノキ、アラカシ等からなる常緑広葉樹林のほか、ケヤキやムクノキ等からなる渓谷林も小面積ながらみられた。林内には、シロダモ、カクレミノ、ヒサカキ、アオキ等の常緑樹や、キツタ、ナガバジャノヒゲ、ヒメカンスゲ等の耐陰性の草本がみられたほか、沢沿いでは、ヤマネコノメソウ、イワボタン、ウワバミソウ、ニリンソウ等の好湿性の草本がみられた。また、林道沿いや林縁などでは、ツクバトリカブト、ホタルカズラ、ヒメウズ等の明るい林内に生育する種もみられた。調査範囲北部には耕作地や緑の多い住宅地が広がるほか、調査範囲南部には造成跡地のススキやセイタカアワダチソウ等からなる草地が広がる。これらの人工的な環境では、路傍雑草などを中心としてアブラナ科、アカバナ科、キク科、イネ科などの外来種が多く確認されたほか、管理が放棄された場所ではアズマネザサやクズの繁茂がみられた。

表5-2-1-10-5 現地調査による分類群別の生育確認科・種数

分類群		調査時期				調査範囲			合計				
		夏季	秋季	早春季	春季	実施区域			周辺	科数	種数		
						廃棄物 処理施設	宅地の 造成	発生土 処分場					
シダ植物門		30	30	26	32	29	30	24	38	15	45		
種子 植物門	裸子植物亜門	4	6	2	3	5	2	2	6	5	7		
	被子植物 亜門	双子葉 植物綱	離弁花 亜綱	161	157	126	166	143	120	128	220	56	241
			合弁花 亜綱	72	88	62	77	83	63	66	106	25	125
		単子葉植物綱	63	72	41	60	75	49	52	96	12	116	
合計		330種	353種	257種	338種	335種	264種	272種	466種	113科	534種		

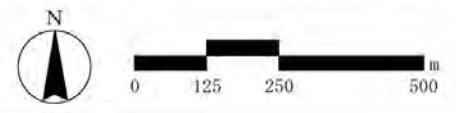
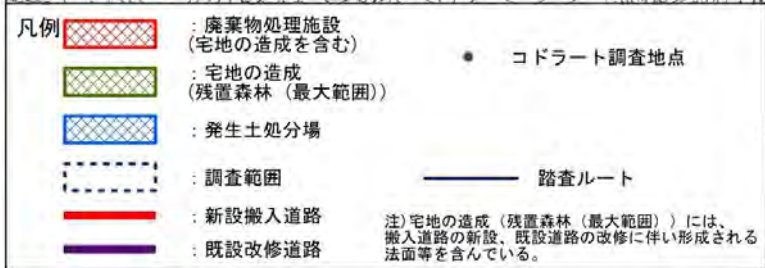
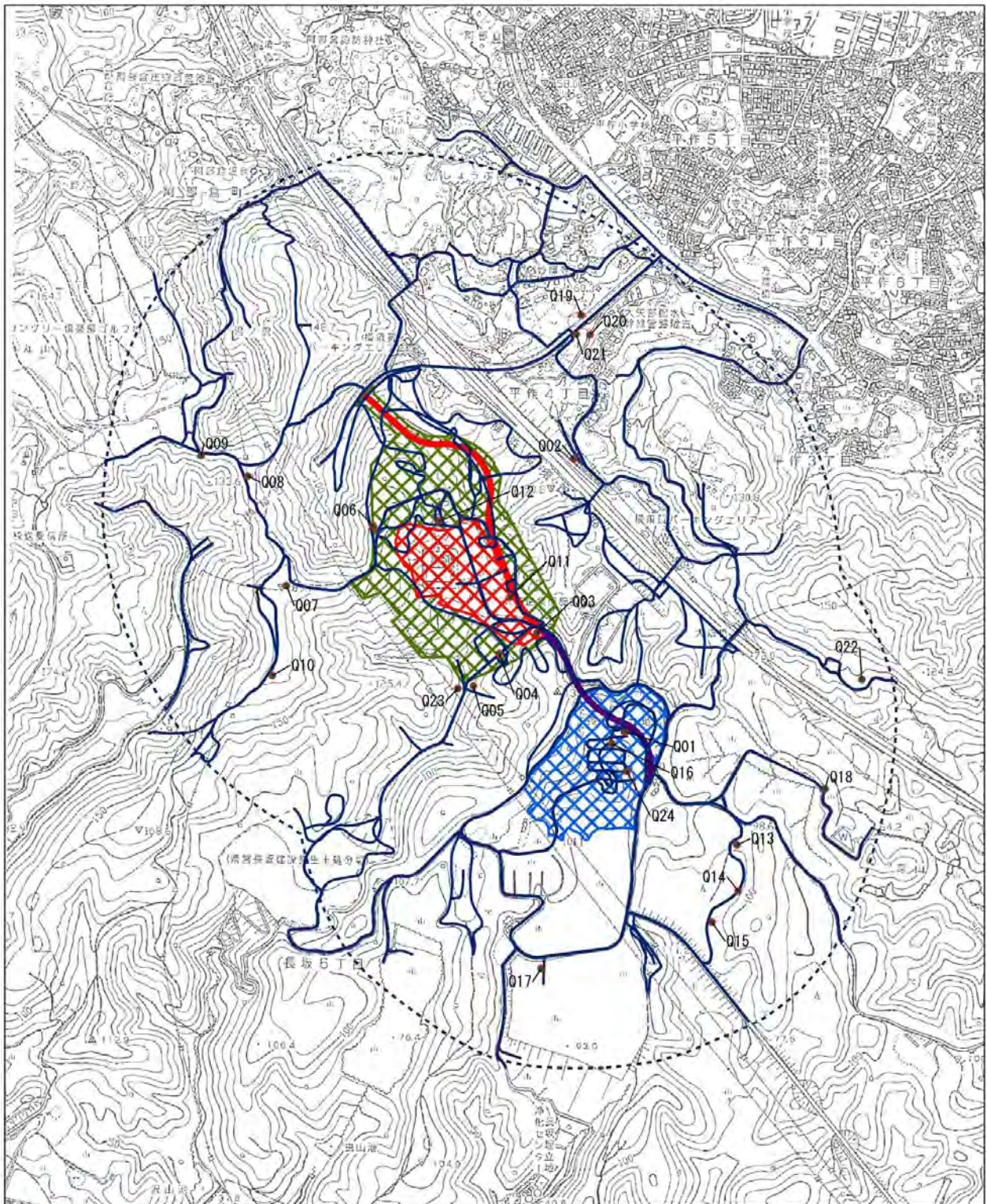


図 5-2-1-10-2 調査地点 (植物)

ア 植生

ア) 調査事項

調査事項は、以下に示すとおりとした。

- a 現存植生
- b 群落構造
- c 潜在自然植生

イ) 調査範囲及び地点

現地調査の範囲は、「イ 植物相」と同じ範囲とした。植生調査地点は、図5-2-1-10-2に示すとおりである。

ウ) 調査方法

a 調査期間及び調査期日

調査期間及び調査期日は、表5-2-1-10-6に示すとおりである。

表5-2-1-10-6 調査期間及び調査期日

調査事項	調査時期	調査期日
植生	夏季	平成24年 8月13日～15日
	秋季	平成24年10月15日～17日
		平成24年10月24日～25日 平成24年11月 8日～ 9日
	早春季	平成25年 4月 3日～ 5日
春季	平成25年 4月30日～ 5月2日	

b 調査方法

a) 現存植生

現存植生は、植物社会学的手法（ブラウーンブランケの全推定法）により、現地調査（コドラート調査）を行い、調査範囲の群落単位を決定して植物社会学的な位置づけを明らかにするとともに、航空写真等を参考として現存植生図を作成した。

b) 群落構造

群落構造は、代表的な植物群落ごとに調査区（コドラート）を設定し、調査区内の植物の種類、高さ、胸高直径等を調査し、種構成、階層構造を模式的に図化した群落構造図を作成することにより、植物群落の現況を把握した。

c) 潜在自然植生

潜在自然植生は、代償植生の中に局所的に残存している自然植生（二次林の林床に生育する自然構成種の芽生え・残存木等）の分布と立地条件を確認するものとした。また、既存文献により、調査範囲の潜在自然植生の概要を把握し、資料調査と現地調査の結果から、調査範囲の潜在自然植生図を作成した。

エ) 調査結果

a 現存植生

a) 現存植生の概況

現地調査結果をもとに、調査範囲の現存植生を19類型に区分し、図5-2-1-10-3に示した。各植生区分の概要は、表5-2-1-10-7に示すとおりである。また、群落別の占有面積は、表5-2-1-10-8に示すとおりである。

調査範囲は、三浦半島の中央に位置している。気候帯の区分からみると暖温帯に相当しているため、本来は、スダジイやアラカシ等の照葉樹林が成立する地域であると考えられる。しかし、現在は、人為的影響のある代償植生となっており、コナラやカラスザンショウが優占する二次林や、オオシマザクラやスギの植林、耕作地、住宅地が大部分を占めていた。

調査範囲の山地や丘陵部にみられる植生は、大部分がアカメガシワ-カラスザンショウ群落またはオオシマザクラ植林で占められており、パッチ状にオニシバリ-コナラ群集、スギ植林、シイ・カシ二次林、竹林、ケヤキ群落が分布していた。丘陵部の中でも傾斜が緩やかな場所は、畑雑草群落、水田雑草群落などの耕作地や公園としての利用がなされているほか、調査範囲南部では造成跡地などにススキ群団が成立していた。これらの場所で管理が放棄された箇所は、メダケ群落、アズマネザサ群落、クズ群落などの単調な植生となっていた。

平作川沿いの斜面には、比較的自然度の高いケヤキ群落が小面積で分布しているが、住宅地や耕作地に隣接し低木層にアズマネザサが多く生育することなどから、人為的な攪乱を強く受けている二次林と判断した。

表5-2-1-10-7 調査範囲の植生区分

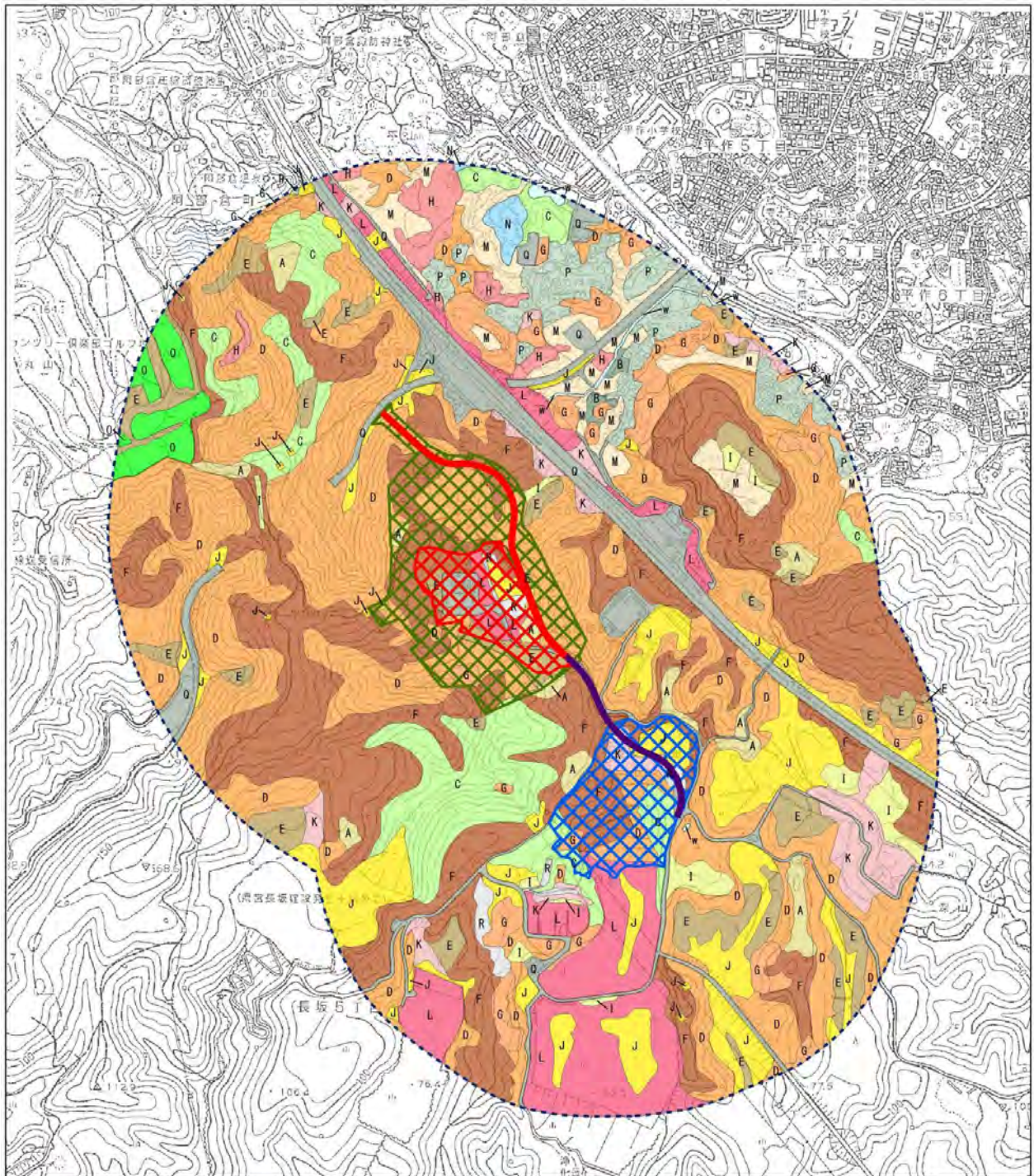
植生区分	概要
シイ・カシ二次林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面や尾根に、断片的に点在して分布する。 群落高9～12m程度の常緑広葉樹二次林である。低木層には、アオキ、ヤブツバキ、タブノキ等が、草本層には、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブコウジ等がみられる。また、テイカカズラ、キツタ等の常緑のつる植物が見られる。主に残存したスダジイやカシ類が萌芽再生したもので、自然植生に近い群落であると考えられる。
ケヤキ群落	実施区域の周辺の平作川に面した斜面に、小面積で分布する。 群落高12m程度の夏緑広葉樹林である。ムクノキ、ケンボナシ等が混生するほか、低木層にはアオキ、アズマネザサ等がみられる。草本層はヤブラン、リョウメンシダ、ヤマグワ等がみられる。人為的な影響を強く受けている二次林と判断したが、自然植生に近い群落であると考えられる。
オニシバリ-コナラ群集	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の尾根筋や緩斜面に、ややまとまって分布する。 群落高10～11m程度の夏緑広葉樹林である。コナラ、ミズキ、オオシマザクラ、シロダモ等が混生するほか、低木層にはアオキ、シロダモ等の常緑樹のほか、イヌビワ、ムラサキシキブ等の夏緑広葉樹が生育する。草本層はベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン等がみられる。薪炭林、農用林として利用されてきた二次林である。

植生区分	概要
アカメガシワ カラスザンショウ群落	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の急傾斜地に広範囲に分布する。 群落高7～8m程度の夏緑広葉樹林で、アカメガシワ、カラスザンショウ、ハゼノキ、ヤマグワなどの先駆性の夏緑広葉樹が混生する。林内は明るく、草本層はコチヂミザサ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ等多くの種がみられる。
スギ植林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面下部や谷部の平坦地に、パッチ状に点在して分布する。 群落高8.5～13m程度で、放置された林分においてはシラカシやアカメガシワなどが混生する。低木層にはアオキ、シロダモ等の常緑樹のほか、イヌビワが生育する。草本層はシダ類や常緑広葉樹等の耐陰性の種が生育している。 管理の状況により、林床植生の植被率に差がみられる。
オオシマザクラ植林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面上部から尾根にかけて、広範囲に分布する。 群落高10～11mでの夏緑広葉樹植林で、薪炭材として植栽されたオオシマザクラのほか、シロダモ、コナラ、カラスザンショウ等が混生する。薪炭林として維持管理されてきた人工林で、オニシバリーコナラ群集と種組成的に近似している。
竹林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面下部から中腹にかけて、広くパッチ状に分布している。 群落高10m程度で、低木層にはモウソウチクのほか、ヒサカキ、タブノキ、アオキ等の常緑広葉樹が散生する。草本層はコチヂミザサ、フモトシダ、ベニシダ等がみられるが、植被率は低い。
メダケ群落	実施区域の周辺の平作川近くの耕作放棄地などに、ややまとまって分布する。群落高6.5m程度でメダケが密生するため、林床は暗く林床植生は極めて乏しい。
アズマネザサ群落	実施区域の周辺の伐採跡地や造成地縁などに、ややまとまって分布する。群落高は3.5m程度でアズマネザサが密生するため、林床は暗く林床植生は極めて乏しい。
ススキ群団	実施区域内やその周辺の法面や造成地などに、ややまとまって分布する。草丈1.5m程度の高茎草地で、ススキが高被度で優占するほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本がみられる。
クズ群落	実施区域内やその周辺の法面や造成地、耕作放棄地などに、ややまとまって分布する。 草丈0.7～1.6m程度の高茎草地で、クズが高被度で優占するほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本がみられる。
その他植林	実施区域内やその周辺の法面や造成地などに、まとまって分布する。 植生高は5m程度の植林または植栽地で、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、モッコク、ネズミモチ等の在来の常緑広葉樹種が主に植栽されている。植栽地により生育種は異なる。
畑雑草群落	実施区域の周辺北側の平作川周辺にまとまって分布する。
水田雑草群落	実施区域の周辺北側の『横須賀しょうぶ園』内の湿性草地を、この群落として区分した。
ゴルフ場・芝地	実施区域の周辺北側の丘陵地にまとまって分布する。
緑の多い住宅地	実施区域の周辺の北側から北西部にかけて、まとまって分布する。
市街地	実施区域内やその周辺の道路や構造物をこの区分でまとめた。
造成地	実施区域内やその周辺の平坦地に、小面積で点在して分布する。
開放水域	実施区域の周辺北側の低地に分布する。『横須賀しょうぶ園』に隣接する池と、平作川をこの区分でまとめた。

表5-2-1-10-8 群落別の占有面積

群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発生土処分場)	
	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
シイ・カシ二次林	3.77	1.5	0.20	4.5	0.18	1.6	-	-
ケヤキ群落	0.37	0.1	-	-	-	-	-	-
オニシバリーコナラ群集	16.70	6.5	-	-	0.05	0.4	1.14	16.2
アカメガシワ-カラスザンショウ群落	72.10	28.2	0.24	5.5	6.36	54.1	1.29	18.2
スギ植林	12.16	4.8	0.83	19.0	0.42	3.6	-	-
オオシマザクラ植林	56.93	22.3	0.83	19.0	4.33	36.8	2.44	34.5
竹林	8.27	3.2	-	-	0.24	2.1	0.14	2.0
メダケ群落	3.13	1.2	-	-	-	-	-	-
アズマネザサ群落	3.00	1.2	-	-	-	-	-	-
ススキ群団	19.65	7.7	0.34	7.8	0.14	1.2	0.75	10.6
クズ群落	6.15	2.4	-	-	-	-	0.69	9.7
その他植林	15.97	6.2	0.73	16.8	0.00	0.0	0.28	4.0
畑雑草群落	7.88	3.1	-	-	-	-	-	-
水田雑草群落	0.78	0.3	-	-	-	-	-	-
ゴルフ場・芝地	2.86	1.1	-	-	-	-	-	-
緑の多い住宅地	7.42	2.9	-	-	-	-	-	-
市街地	16.98	6.6	0.89	20.4	0.03	0.3	0.18	2.5
造成地	1.26	0.5	0.31	7.2	0.00	0.0	0.16	2.3
開放水域	0.45	0.2	-	-	-	-	0.00	0.0
合計	255.83	100.0	4.36	100.0	11.77	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



凡例

- | | | | | | |
|--|-------------------------|--|---------------------------|--|-------------|
| | ： 廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む) | | A : シイ・カシニ次林 | | K : クズ 群落 |
| | ： 宅地の造成
(残置森林(最大範囲)) | | B : ケヤキ群落 | | L : その他植林 |
| | ： 発生土処分場 | | C : オシバリーコナラ群落 | | M : 畑雑草群落 |
| | ： 調査範囲 | | D : アカメガシワー
カラスザンショウ群落 | | N : 水田雑草群落 |
| | ： 新設搬入道路 | | E : スギ植林 | | O : ゴルフ場・芝地 |
| | ： 既設改修道路 | | F : オオシマザクラ植林 | | P : 緑の多い住宅地 |
| | | | G : 竹林 | | Q : 市街地 |
| | | | H : メダケ群落 | | R : 造成地 |
| | | | I : アズマネザサ群落 | | W : 開放水域 |
| | | | J : ススキ群団 | | |

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

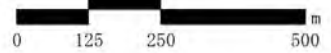


図 5-2-1-10-3 現存植生図

b) 植生自然度

「自然環境保全基礎調査植生調査」（昭和 57 年、環境庁）に準拠して、調査範囲の現存植生の自然度を区分した。各群落の自然度区分は表 5-2-1-10-9、植生自然度図は図 5-2-1-10-4 に示すとおりである。また、植生自然度別占有面積は、表 5-2-1-10-10 に示すとおりである。

調査範囲における面積の割合は、二次林を示す自然度 7 の 34.7% が最も高く、次いで造林地を示す自然度 6 が 30.2%、二次草原を示す自然度 5 が 10.1% であり、二次植生が大部分を占める状況が示されている。

シイ・カシ二次林とケヤキ群落は、自然林に近い二次林として自然度 8 に該当する。ケヤキ群落は平作川に面した斜面に 2 箇所のみ、シイ・カシ二次林は斜面や尾根に断片的に分布するが、いずれも小面積である。オニシバリーコナラ群集、アカメガシワーカラスザンショウ群落が該当する自然度 7 は、山地に広く分布しており、特に実施区域（宅地の造成）及び実施区域（発生土処分場）における比率も高い。同様に、スギ植林、オオシマザクラ植林、竹林が該当する自然度 6 も山地に広く分布しており、実施区域全体における比率も高い。このほか、自然度 5 に該当するメダケ群落、アズマネザサ群落、ススキ群団、自然度 4 に該当するクズ群落、自然度 3 に該当するその他植林は、道路の隣接地や造成跡地、耕作放棄地等を中心に広く点在している。自然度 2 に該当する畑雑草群落、水田雑草群落、ゴルフ場・芝地、緑の多い住宅地は、主に調査範囲北部にまとまって分布している。

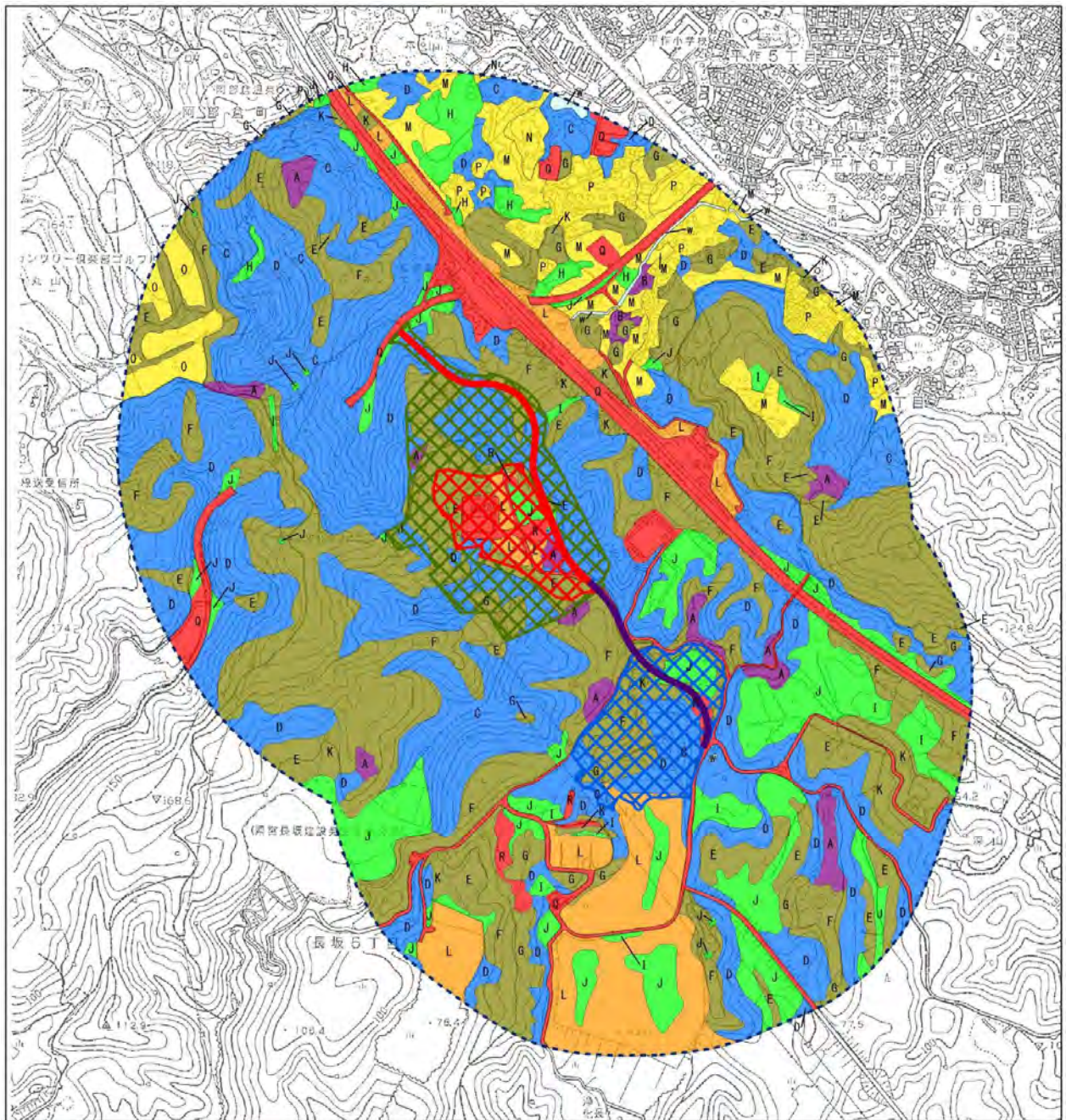
表5-2-1-10-9 各群落の植生自然度区分

群落名	植生自然度
シイ・カシ二次林	8
ケヤキ群落	
オニシバリーコナラ群集	7
アカメガシワーカラスザンショウ群落	
スギ植林	6
オオシマザクラ植林	
竹林	
メダケ群落	5
アズマネザサ群落	
ススキ群団	
クズ群落	4
その他植林	3
畑雑草群落	2
水田雑草群落	
ゴルフ場・芝地	
緑の多い住宅地	
市街地	1
造成地	
開放水域	—

表5-2-1-10-10 植生自然度別占有面積

植生自然度	群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発生土処分場)	
		面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
8	シイ・カシ二次林	4.14	1.6	0.20	4.5	0.18	1.6	-	-
	ケヤキ群落								
7	オニシバリーコナラ群集	88.80	34.7	0.24	5.5	6.41	54.5	2.43	34.4
	アカメガシワーカラスザンショウ群落								
6	スギ植林	77.35	30.2	1.65	38.0	5.00	42.5	2.58	36.5
	オオシマザクラ植林								
	竹林								
5	メダケ群落	25.78	10.1	0.34	7.8	0.14	1.2	0.75	10.6
	アズマネザサ群落								
	ススキ群団								
4	クズ群落	6.15	2.4	-	-	-	-	0.69	9.7
3	その他植林	15.97	6.2	0.73	16.8	0.00	0.0	0.28	4.0
2	畑雑草群落	18.93	7.4	-	-	-	-	-	-
	水田雑草群落								
	ゴルフ場・芝地								
	緑の多い住宅地								
1	市街地	18.25	7.1	1.20	27.5	0.03	0.3	0.34	4.8
	造成地								
-	開放水域	0.45	0.2	-	-	-	-	-	-
合計		255.83	100.0	4.36	100.0	11.77	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



凡例

: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)	自然度8	自然度4
: 宅地の造成 (残置森林(最大範囲))	A : シイ・カシニ次林	自然度3
: 発生土処分場	B : ケヤキ群落	L : その他植林
: 調査範囲	自然度7	自然度2
: 新設搬入道路	C : オニシバリ・コナラ群集	M : 畑雑草群落
: 既設改修道路	D : アカメガシワ カラスザンショウ群落	N : 水田雑草群落
	自然度6	O : ゴルフ場・芝地
	E : スギ植林	P : 緑の多い住宅地
	F : オオシマザクラ植林	自然度1
	G : 竹林	Q : 市街地
	自然度5	R : 造成地
	H : メダケ群落	その他
	I : アズマネザサ群落	w : 開放水域
	J : ススキ群落	

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

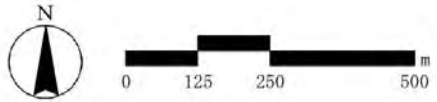


図 5-2-1-10-4 植生自然度図

b 群落構造

各群落の組成、外観、立地条件等の特徴は、以下に示すとおりである。また各群落の断面図は、図5-2-1-10-5(1/11)～(11/11)に示すとおりである。

a) シイ・カシ二次林

シイ・カシ二次林は、台地の肩部や急斜面等の乾燥しやすい立地に成立する常緑広葉樹二次林で、主に残存したスタジイやカシ類が萌芽再生して樹林を形成しているものと考えられる。

調査範囲内の群落は、群落高9～12m程度の高木林または亜高木林で、高木層や亜高木層にはスタジイ、タブノキ、アカガシ等の常緑広葉樹が優占しており、林内は薄暗い。低木層は、高さ3～3.5m、植被率7～60%であり、アオキ、ヤブツバキ、タブノキ等の常緑樹が主体となっている。草本層は、高さ0.3～0.7m、植被率45～100%であり、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブコウジ等の耐陰性の高い種が生育するほか、テイカカズラ、キヅタ等の常緑のつる植物が出現している。この群落は、主にやや土壌の厚い斜面や尾根に断片的に点在しているが、いずれも面積は小さい。

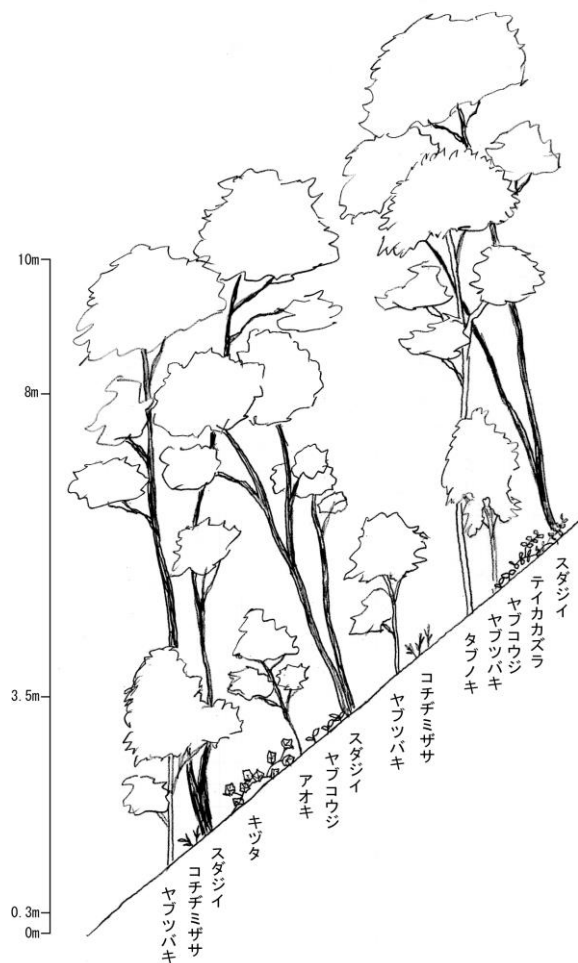


図 5-2-1-10-5(1/11) シイ・カシ二次林

b) ケヤキ群落

ケヤキ群落は、溪谷沿いの崖錐や岩角地に成立する夏緑広葉樹林である。

調査範囲内の群落は、群落高12m程度の高木林で、高木層にケヤキが優占するほか、亜高木層以上にはムクノキ、ケンポナシ等が混生する。低木層は、高さ8m程度、植被率20%であり、アオキ、アズマネザサ等が生育する。草本層は、高さ0.3m程度、植被率7%程度であり、ヤブラン、リョウメンシダ、ヤマグワ等が生育する。この群落は、平作川に面した斜面の2箇所分布している。自然植生に近い群落と考えられるが、小面積であることや、住宅地や耕作地に隣接し低木層にアズマネザサが多く生育することなどから、人為的な攪乱を強く受けている二次林として区分した。

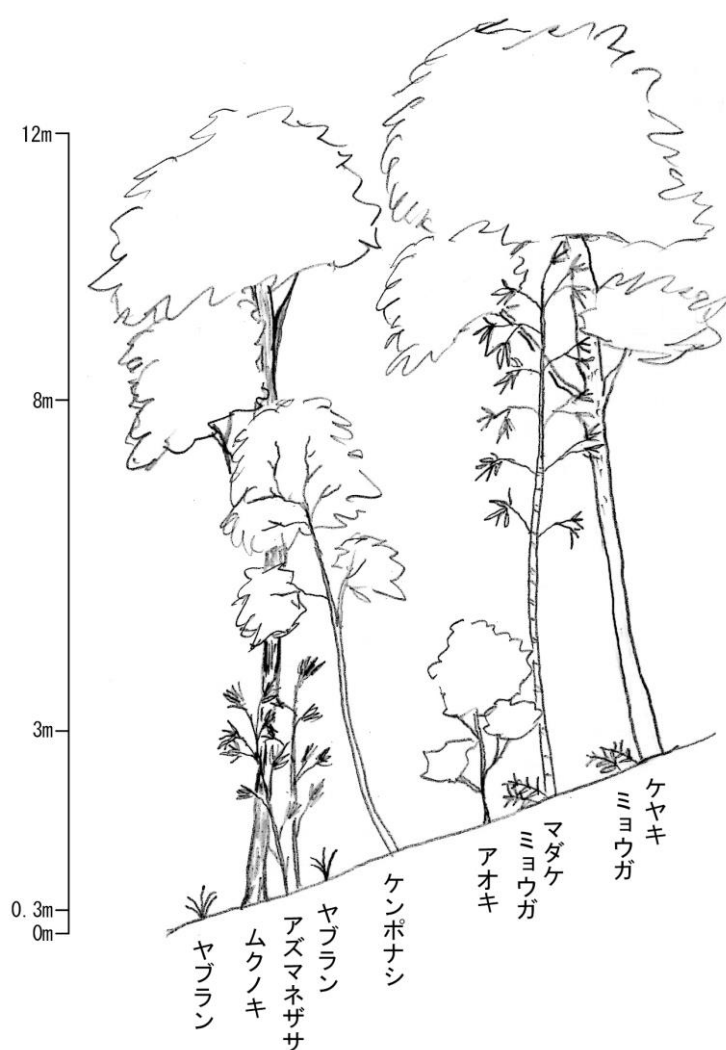


図5-2-1-10-5(2/11) ケヤキ群落

c) オニシバリーコナラ群集

オニシバリーコナラ群集は、低地丘陵地や斜面に成立する夏緑広葉樹林で、薪炭林、農用林として利用されてきた二次林である。

調査範囲内の群落は、群落高10～11m程度であり、コナラ、ミズキが優占し、亜高木層以上には、オオシマザクラ、シロダモ、エノキ等が混生する。低木層は、高さ2.5～3.5m、植被率80～90%であり、アオキ、シロダモ、ヒサカキ等の常緑広葉樹のほか、イヌビワ、ムラサキシキブ、ヤマウグイスカグラ等の夏緑広葉樹やアズマネザサが混生する。草本層は、高さ0.5～0.9m程度、植被率15～50%であり、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン等が生育する。この群落は、尾根筋や緩斜面等にややまとまって分布している。

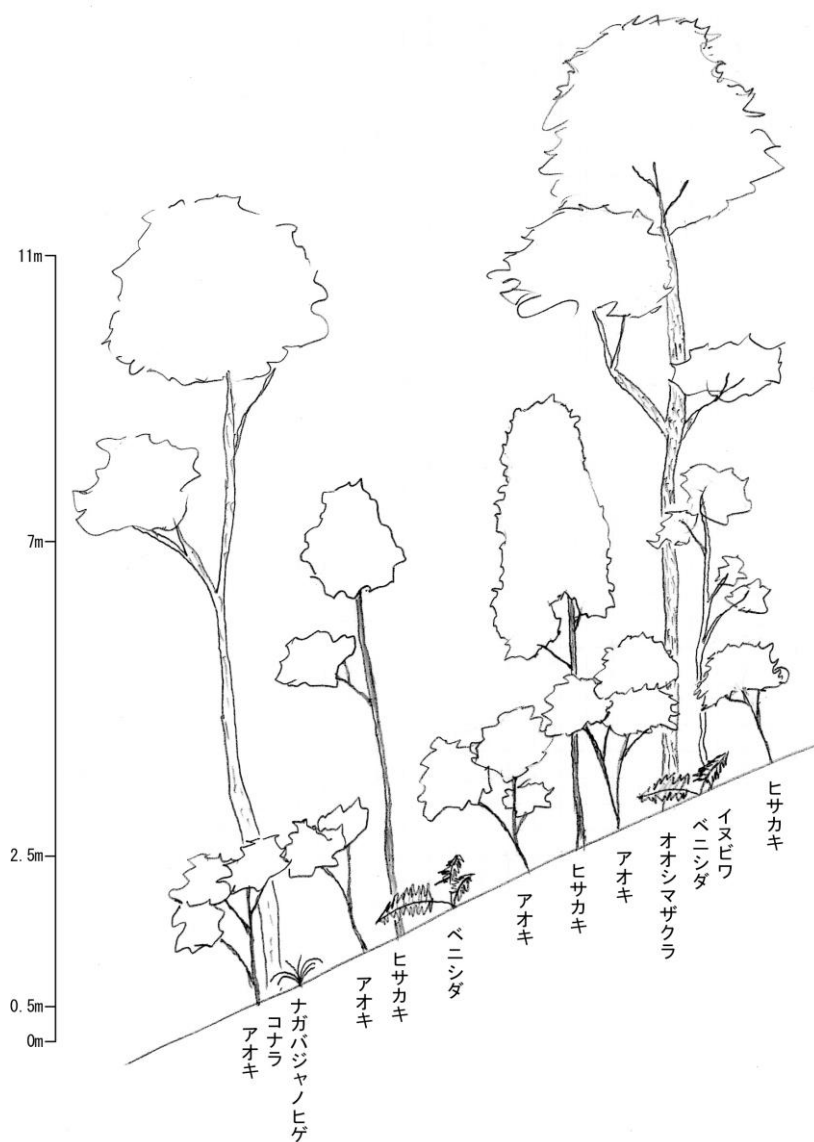


図5-2-1-10-5(3/11) オニシバリーコナラ群落

d) アカメガシワーカラスザンショウ群落

アカメガシワーカラスザンショウ群落は、森林伐採跡地や耕作放棄地、崩壊性法面等に成立する先駆性の夏緑広葉樹二次林である。

調査範囲の群落は、群落高7～8m程度の亜高木林であり、低木層以上にアカメガシワ、カラスザンショウ、ハゼノキ、ヤマグワ等の先駆性の夏緑広葉樹が混生する。林床は明るく、草本層は高さ0.5～1.2m程度、植被率90%でコチヂミザサ、キヅタ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ等多くの種が生育する。この群落は主に急傾斜地に分布しており、調査範囲の面積の3割近くを占めている。

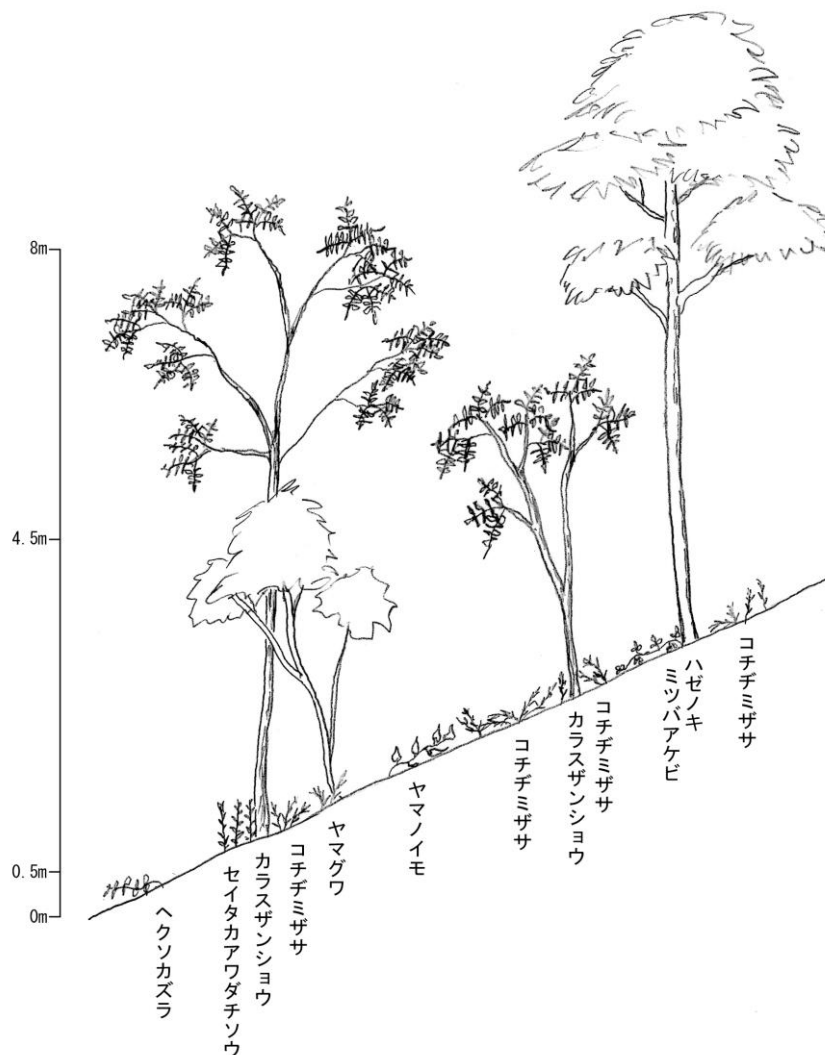


図5-2-1-10-5(4/11) アカメガシワーカラスザンショウ群落

e) スギ植林

スギ植林は、木材生産を目的として植林された常緑針葉樹林である。

調査範囲内のスギ植林は、群落高が8.5～13m程度でスギが高被度で植林されている。放置された林分においては、亜高木層にシラカシやアカメガシワが混生していた。低木層は、高さ2.5～3.5m、植被率は5～90%であり、アオキ、シロダモ等の常緑広葉樹のほか、イヌビワが生育している。草本層は、高さ0.4～1m、植被率10～80%であり、リョウメンシダ、ベニシダ、イノデ等のシダ類や、シロダモ、アオキ等の常緑広葉樹が生育していた。林床の管理状況により、低木層や草本層の植被率が大きく異なった。スギ植林は、斜面下部の緩傾斜地や谷部の平坦地などに、パッチ状に点在している。

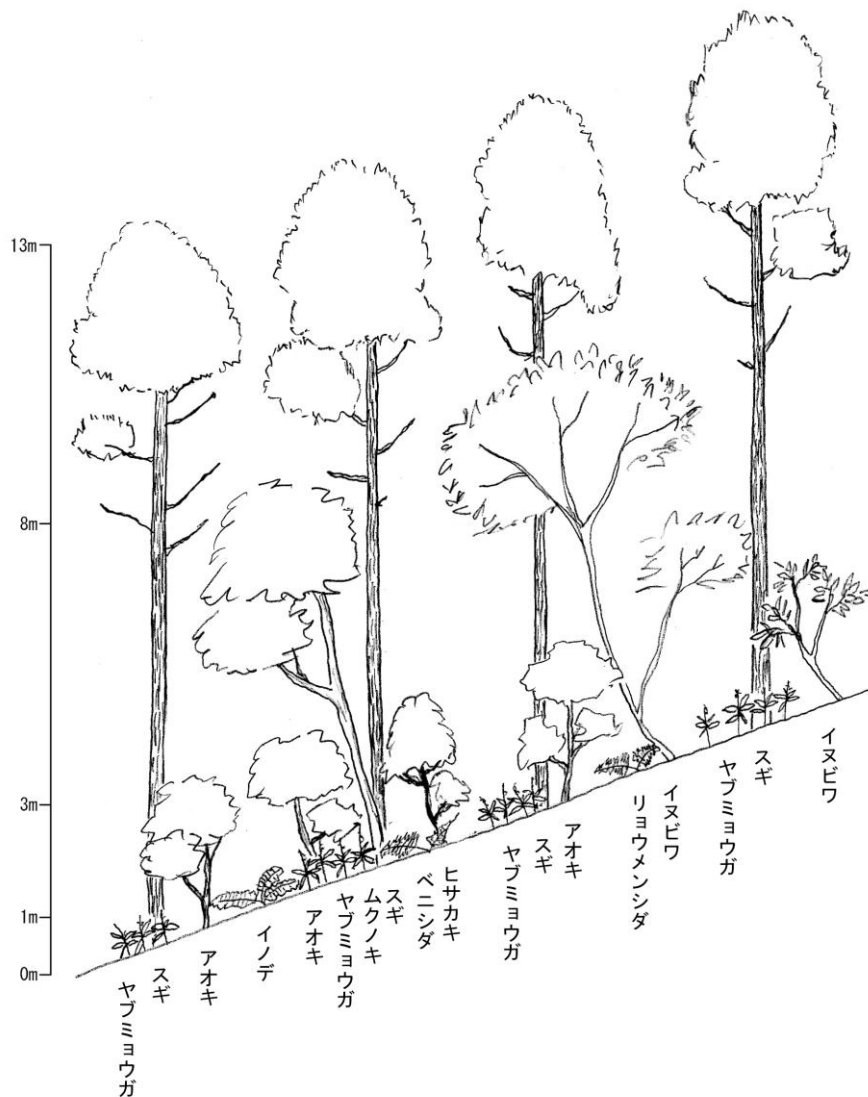


図5-2-1-10-5(5/11) スギ植林

f) オオシマザクラ植林

オオシマザクラ植林は、薪炭材として植栽されたオオシマザクラが優占する夏緑広葉樹林で、コナラ林と同じように維持管理されてきた人工林である。前述のオニシバリーコナラ群集と種组成的に近似しており、今回は高木層にオオシマザクラが優占する植分をオオシマザクラ植林として区分した。

調査範囲内のオオシマザクラ植林は、群落高10～11mでオオシマザクラが優占し、亜高木層以上にシロダモ、コナラ、カラスザンショウ等の夏緑広葉樹が混生している。低木層は、高さ2.5～3m、植被率70～90%であり、アオキ、シロダモ、ムラサキシキブ、アズマネザサ等が生育する。草本層は、高さ0.5～0.7m、植被率30～45%であり、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン、キツタ、キチジョウソウ等の耐陰性の草本が生育する。オオシマザクラ植林は、斜面上部から尾根にかけて広く分布しており、調査範囲の面積の2割以上を占めている。

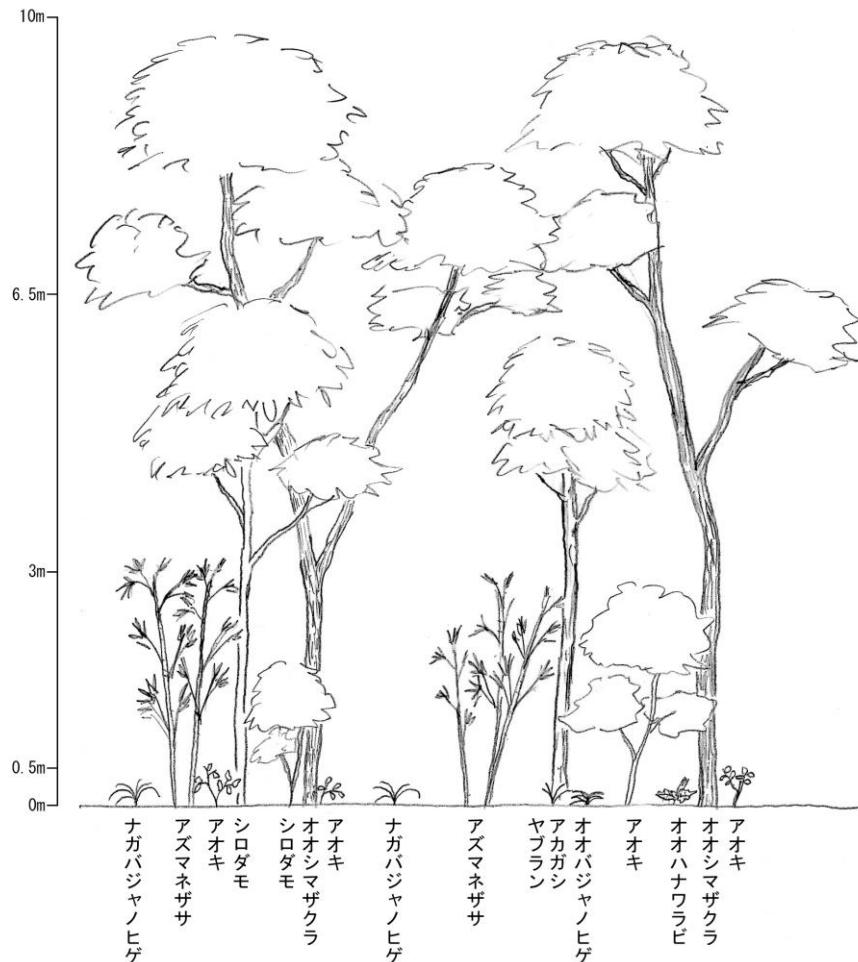


図 5-2-1-10-5 (6/11) オオシマザクラ植林

g) 竹林

竹林は、用材、工芸材料の利用、筍採取や護岸を目的に植栽されたものが起源で、近年は放置されて荒廃したものが増加している。

調査範囲内の竹林は、高さ10m程度のモウソウチクが高被度で優占している。亜高木層を欠き、低木層は高さ1.6~3.5m程度、植被率10%程度であり、モウソウチクのほか、ヒサカキ、タブノキ、アオキ等の常緑広葉樹が散生している。草本層は、高さ0.5~0.7m程度、植被率10%程度であり、コチヂミザサ、フモトシダ、ベニシダが生育している。竹林は、主に斜面下部から中腹にかけて、広くパッチ状に分布している。

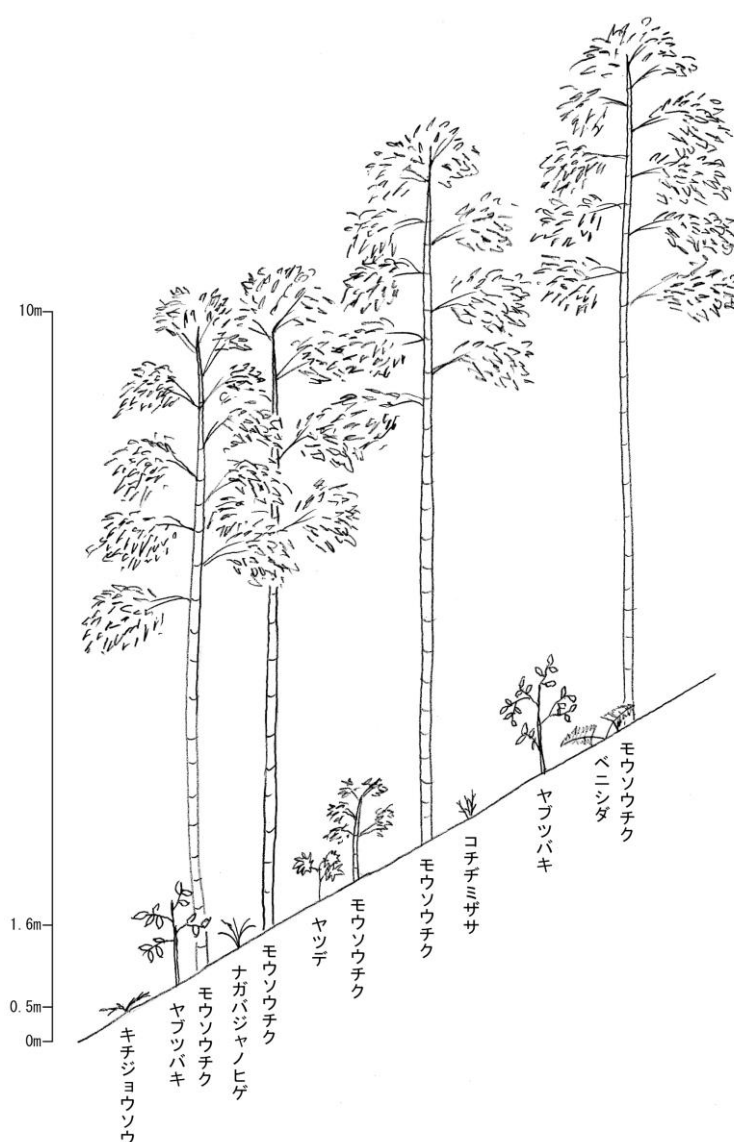


図 5-2-1-10-5(7/11) 竹林

h) メダケ群落

メダケ群落は、海岸風衝地や川岸付近に密生して成立するタケ群落である。

調査範囲内の群落は、高さ6.5m程度のメダケが高被度で優占している。林床は暗く、ヤマグワやムクノキの生育が確認されたものの、林床植生は極めて乏しい。この群落は、平作川近くの耕作放棄地などに、ややまとまって分布している。

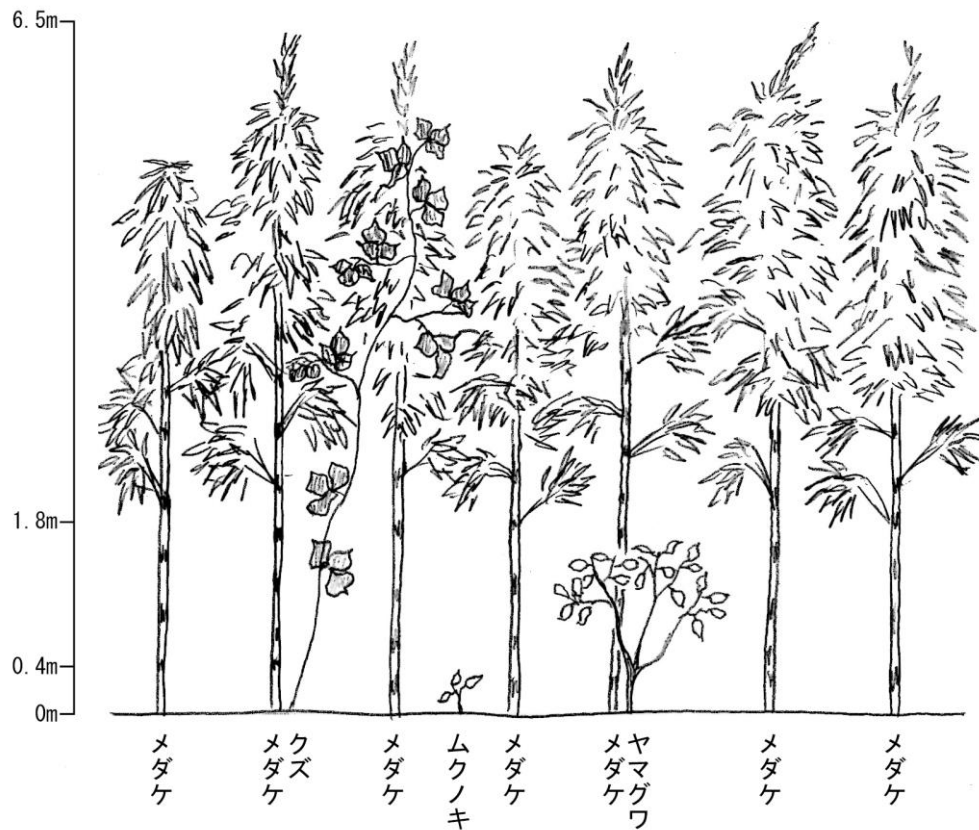


図5-2-1-10-5(8/11) メダケ群落

i) アズマネザサ群落

アズマネザサ群落は、伐採跡地や河川堤防などの陽地に成立するタケ群落である。調査範囲内の群落は、高さ3.5m程度のアズマネザサが高被度で優占している。そのほか、クサギ、カラスザンショウ等の先駆性樹種やカラスウリ、センニンソウ等のつる植物が混生している。林床は暗く、キチジョウソウやセンニンソウの生育が確認されたものの、林床植生は極めて乏しい。この群落は、伐採跡地や造成地などに、ややまとまって分布している。

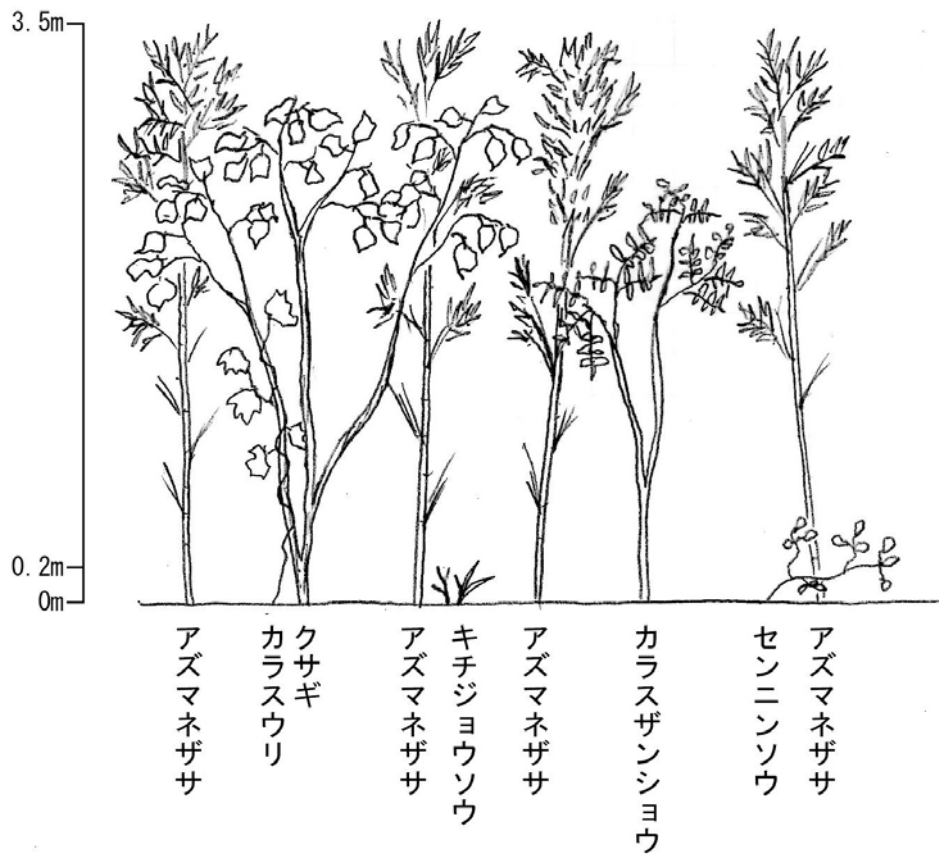


図 5-2-1-10-5(9/11) アズマネザサ群落

j) ススキ群団

ススキ群団は、放牧地、伐採跡地、耕作放棄地、河川敷等に成立する多年生の高茎草本群落で、ススキが優占する。

調査範囲内の群落は、草丈1.5m程度であり、ススキが高被度で優占しているほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本が出現している。この群落は、道路の法面や造成地などにややまとまって広く分布している。



図5-2-1-10-5(10/11) ススキ群団

k) クズ群落

クズ群落は、既存の森林の破壊や、人為的攪乱を受けた後に、先駆的に発達する群落である。

調査範囲内の群落は、草丈0.7～1.6m程度であり、クズが高被度で優占しているほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の草本類が出現している。この群落は、高速道路の法面、造成地、耕作放棄地などにややまとまって分布している。

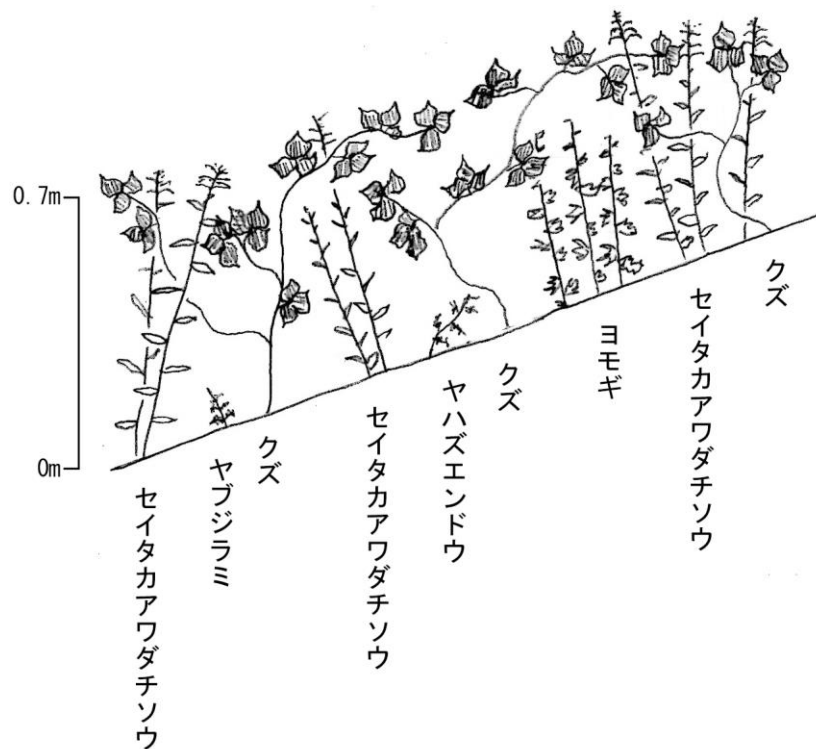


図5-2-1-10-5(11/11) クズ群落

l) その他植林

本調査では、造成地の修景等を目的として主に在来樹種を植林した植分を「その他植林」として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。

調査範囲内では、植生高は5m程度で生育種は植栽地により様々であるが、シラカシ、アラカシ、ウラジログシ、モッコク、ネズミモチ等の在来の常緑広葉樹種を主体に植栽されている。この植林は、高速道路の法面や造成地などに分布している。

m) 畑地雑草群落

畑地雑草群落は、畑地に成立する好窒素性の一年生草本を主体とする草本群落で

ある。本調査では、畑地をこの群落として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。また、対象地は私有地であるため、本調査では詳細な調査を実施していない。

調査範囲内の群落は、草丈0.35m程度と推察され、クワクサ、スベリヒユ、イヌビユ等の一年生草本が主体だと考えられる。この群落は、調査範囲北部にまとまって分布している。

n) 水田雑草群落

水田雑草群落は、水田耕作地に成立する好窒素性の湿性の一年生草本を中心とした草本群落である。本調査では、『横須賀しょうぶ園』の湿性草地（しょうぶ苑）をこの群落として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。また、公園であることから、本調査では詳細な調査を実施していない。

調査範囲内の群落は、草丈0.7m程度と推定されるが、生育種の詳細は不明である。

o) ゴルフ場・芝地

ゴルフ場・芝地は、主にイネ科の外来種を用いた、定期的な維持管理が行われている人工草地である。本調査では、調査範囲北西部のゴルフ場をこの区分とし、土地利用形態の一つとして扱っている。また、対象地は私有地であるため、本調査では詳細な調査を実施していない。

ゴルフ場の草地は、定期的な管理を実施していることから、草丈は0.05m程度と推定される。

c 潜在自然植生

「神奈川県潜在自然植生図」（昭和50年、神奈川県教育委員会）、「神奈川県の潜在自然植生」（昭和51年、神奈川県教育委員会）、「日本植生誌 関東」（昭和56年、宮脇）、「よこすかの植生」（平成13年、横須賀市）及び現地調査によって、調査範囲の潜在自然植生は、ヤブツバキクラス域に属する5群落単位で構成されると推測される。

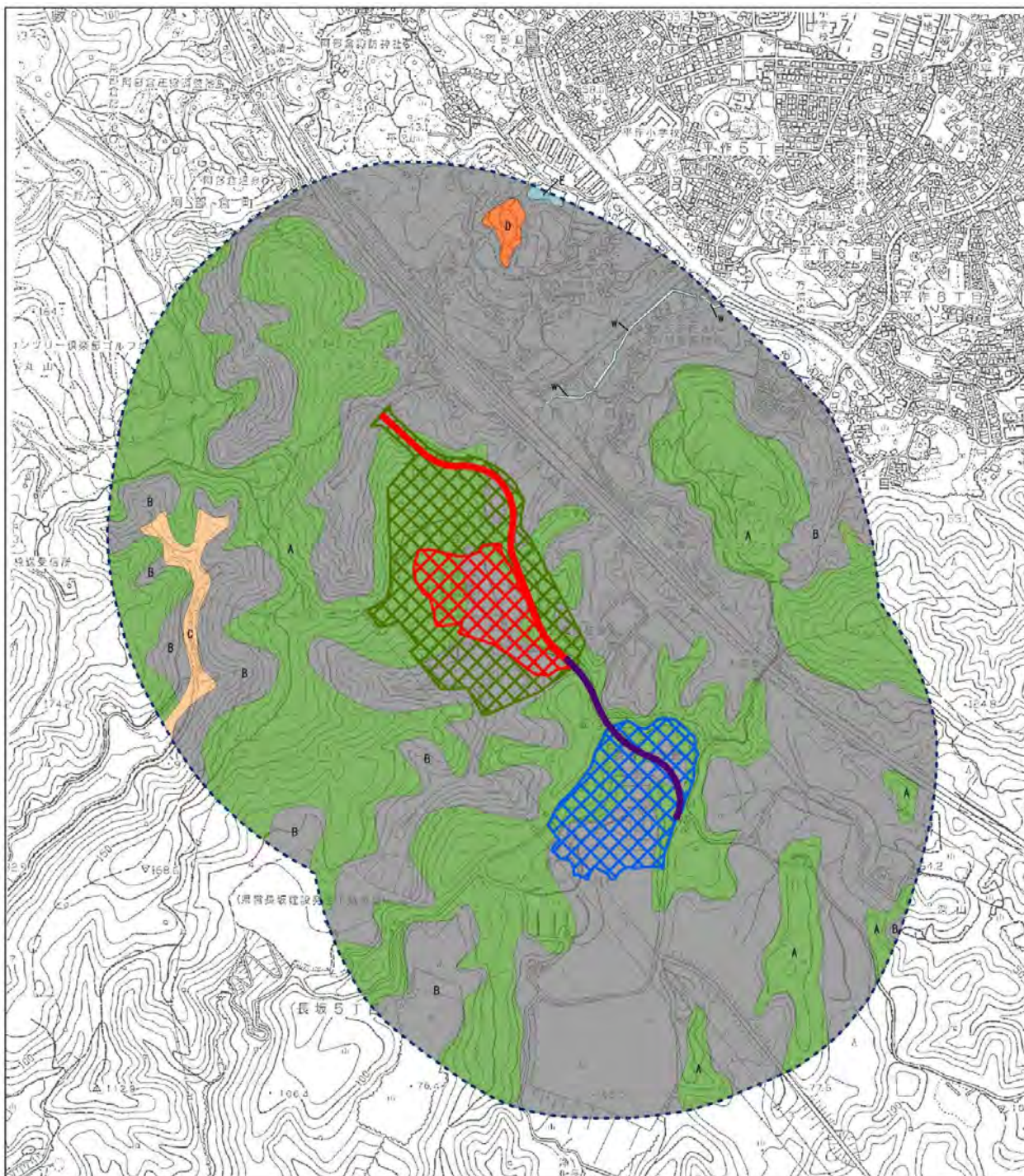
調査範囲の潜在自然植生の分布は、山地においては尾根から斜面の大部分がヤブコウジースダジイ群集、谷筋に沿って斜面下部はイノデータブノキ群集、松越川沿いの谷はコクサギーケヤキ群集が成立するものと推定される。特に表層土が失われている造成地や、造成跡で現在ススキ群団となっている立地についても、客土により本来の立地が回復できることから、上記の潜在自然植生が成立するものと推定される。また、調査範囲北東部の『横須賀しょうぶ園』における湿性草地はオニスゲーハンノキ群集、『横須賀しょうぶ園』に隣接した開放水域は浮葉沈水草本植物群落の潜在自然植生域と推察される。

潜在自然植生の群落別占有面積は表5-2-1-10-11、潜在自然植生図は図5-2-1-10-6に示すとおりである。

表5-2-1-10-11 潜在自然植生群落別占有面積

群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発土処分場)	
	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
ヤブコウジースダジイ群集	104.00	40.7	1.92	44.1	8.04	68.8	3.45	48.8
イノデータブ群集	148.63	58.1	2.44	55.9	3.65	31.2	3.62	51.2
コクサギーケヤキ群集	2.12	0.8	-	-	-	-	-	-
オニスゲーハンノキ群集	0.69	0.3	-	-	-	-	-	-
浮葉沈水草本植物群落 (ヒルムシロクラス)	0.15	0.1	-	-	-	-	-	-
開放水域	0.23	0.1	-	-	-	-	-	-
合計	255.83	100.0	4.36	100.0	11.69	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



凡例

- | | | | |
|---|------------------------|---|--------------|
|  | ：廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む) |  | ：ヤブコウジスダジイ群集 |
|  | ：宅地の造成
(残置森林(最大範囲)) |  | ：イノデタブノキ群集 |
|  | ：発生日処分場 |  | ：コクサギケヤキ群集 |
|  | ：調査範囲 |  | ：オノスゲハンノキ群集 |
|  | ：新設搬入道路 |  | ：浮葉沈水草本植物群落 |
|  | ：既設改修道路 |  | ：開放水域 |

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。



図 5-2-1-10-6 潜在自然植生図

イ 重要な植物種・植物群落

ア) 調査事項

調査地域に生育する重要な植物種・植物群落の生育状況等とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果を踏まえ、学術上または希少性の観点から、表5-2-1-10-12に示す選定基準に該当するものを、重要な植物として抽出した。

エ) 調査結果

重要な植物の抽出結果は表5-2-1-10-13、各種の確認状況及び一般生態は表5-2-1-10-14に示すとおりである。ウバメガシは下表の④に該当する種であるが、現地での確認は明らかな植栽個体であったことから重要な植物の対象外とした。なお、確認位置は、盗掘防止の観点から図示していない。

表5-2-1-10-12 重要な植物の選定基準

番号	選定基準	カテゴリー
①	「文化財保護法」(昭和25年、法律第214号)に基づく天然記念物及び特別天然記念物に指定されている種	天然記念物 特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年、法律第75号)に基づく国内希少野生動植物種、国際希少野生動植物種及び緊急指定種に指定されている種	国内希少野生動植物種 国際希少野生動植物種 緊急指定種
③	「環境省レッドリスト(維管束植物)」(平成24年、環境省)に記載されている種	絶滅(EX) 野生絶滅(EW) 絶滅危惧種ⅠA類(CR) 絶滅危惧種ⅠB類(EN) 絶滅危惧種Ⅱ類(VU) 準絶滅危惧(NT) 情報不足(DD) 絶滅のおそれのある地域 個体群(LP)
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)に記載されている種	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足 不明種 絶滅のおそれのある地域 個体群

表5-2-1-10-13 重要な植物一覧

番号	科名	和名	選定基準			
			①	②	③	④
1	キキョウ	ツルギキョウ			VU	絶滅危惧 I A類
2	ラン	エビネ			NT	絶滅危惧 II 類
3		キンラン			VU	絶滅危惧 II 類
4		シュスラン				絶滅危惧 I A類
合計	2科	4種	0種	0種	3種	4種

注) 表中の①～④の選定基準は、表5-2-1-10-12に示すとおりである。

表5-2-1-10-14 重要な植物の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ツルギキョウ	確認状況	<p><秋季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の谷筋で1個体を確認。</p> <p><早春季> 実施区域内(宅地の造成・新規搬入道路)の林道脇の明るい草地2箇所、それぞれ2個体と6個体を確認。また、実施区域の周辺のアスファルト路上の堆積物上で2個体を確認。いずれも開花が確認された。</p> <p><春季> 実施区域内(宅地の造成)の明るい落葉広葉樹林で1個体を確認。</p>
	一般生態	山地～丘陵地に生えるつる性の多年草。国内では、本州（関東以西）～九州に分布する。
エビネ	確認状況	<p><夏季> 実施区域内（宅地の造成）の落葉広葉樹林で5個体、実施区域の周辺の落葉広葉樹林で3個体を確認。</p> <p><春季> 実施区域内(宅地の造成)の落葉広葉樹林の3箇所、それぞれ9個体、23個体、30個体を確認。また、実施区域の周辺の落葉広葉樹林の4箇所、それぞれ2個体、2個体、3個体、45個体を確認。いずれの地点においても開花が確認された。</p>
	一般生態	山野の樹林内に生える常緑性の多年草。国内では、北海道（西南部以南）、本州、四国、九州、琉球に分布する。
キンラン	確認状況	<p><春季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の4箇所、それぞれ1個体、3個体、3個体、15個体を確認。また、常緑広葉樹の植林地においても5個体を確認。いずれの地点においても開花が確認された。</p>
	一般生態	山地や丘陵の疎林内や林縁に生える夏緑生の多年草。国内では、本州、四国、九州に分布する。
シュスラン	確認状況	<p><秋季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の林道脇で7個体を確認。</p>
	一般生態	常緑広葉樹林の林床に生える常緑性多年草。国内では、本州（千葉県以西）、四国、九州、琉球に分布する。

注) 重要な植物種は、盗掘防止の観点から図示していない。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）

「神奈川県植物誌2001」（平成13年、神奈川県植物誌調査会編）

ウ 緑の量

ア) 調査事項

緑被率と緑の体積の状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果をもとに、緑被率は植物群落の被覆面積を、緑の体積は各群落の平均高さに被覆面積を乗じることにより算出した。

エ) 調査結果

調査結果は、表5-2-1-10-15に示すとおりである。

緑被率及び緑の体積は、調査範囲で89.8%、17,209,094m³、実施区域（廃棄物処理施設）で72.5%、251,800m³、実施区域（宅地の造成）で99.7%、1,018,285m³、実施区域（発生土処分場）で95.2%、517,992m³であった。

表5-2-1-10-15 緑の量調査結果

群落名	平均 群落 高 (m)	調査範囲			実施区域 (廃棄物処理施設)			実施区域 (宅地の造成)			実施区域 (発生土処分場)		
		面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)
シイ・カシ二次林	10.33	3.77	1.5	389,914	0.20	4.5	20,262	0.18	1.6	18,600	0.00	-	-
ケヤキ群落	12.00	0.37	0.1	44,518	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オニシバリーコナラ群集	10.50	16.70	6.5	1,753,438	-	-	-	0.05	0.4	5,250	1.14	16.2	120,175
アカメガシワー カラスザンショウ群落	7.50	72.10	28.2	5,407,832	0.24	5.5	17,931	6.36	54.1	477,000	1.29	18.2	96,548
スギ植林	10.38	12.16	4.8	1,261,530	0.83	19.0	85,899	0.42	3.6	43,575	-	-	-
オオシマザクラ植林	10.33	56.93	22.3	5,882,736	0.83	19.0	85,361	4.33	36.8	447,433	2.44	34.5	252,307
竹林	10.00	8.27	3.2	826,545	-	-	-	0.24	2.1	24,000	0.14	2.0	13,895
メダケ群落	6.50	3.13	1.2	203,759	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アズマネザサ群落	6.50	3.00	1.2	194,768	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ススキ群団	1.73	19.65	7.7	340,584	0.34	7.8	5,854	0.14	1.2	2,427	0.75	10.6	12,937
クズ群落	1.15	6.15	2.4	70,736	-	-	-	-	-	-	0.69	9.7	7,910
その他植林	5.00	15.97	6.2	798,288	0.73	16.8	36,493	0.00	0.0	0	0.28	4.0	14,220
畑雑草群落	0.35	7.88	3.1	27,564	-	-	-	-	-	-	-	-	-
水田雑草群落	0.70	0.78	0.3	5,456	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴルフ場・芝地	0.05	2.86	1.1	1,428	-	-	-	-	-	-	-	-	-
緑の多い住宅地	-	7.42	0.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
市街地	-	16.98	0.0	0	0.89	0.0	0	0.03	0.0	0	0.18	0.0	0
造成地	-	1.26	0.0	0	0.31	0.0	0	0.00	0.0	0	0.16	0.0	0
開放水域	-	0.45	0.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	-	255.83	89.8	17,209,094	4.36	72.5	251,800	11.77	99.7	1,018,285	7.07	95.2	517,992

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。

エ 生育環境との関わり

ア) 調査事項

気象、水象、地象、動物等の生育環境と植物との関わり及び植物相互の関わり
の状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

生育環境との関わりを明らかにするために、既存資料により気象、地象及び水象の概要を把握した。また、調査範囲において確認された代表的な群落であるシイ・カシ二次林、スギ植林、オオシマザクラ植林、オニシバリーコナラ群集の4地点において、深さ1mの土壌断面調査を行い、生息環境としての土壌の状況を明らかにした。調査方法は、「自然環境アセスメント技術マニュアル」(平成7年、(財)自然環境研究センター)に準じた。調査期日は表5-2-1-10-16に、調査地点は図5-2-1-10-7に示すとおりである。

表5-2-1-10-16 土壌調査期日

調査事項	調査時期	調査期日
生育環境との関わり	秋季	平成24年11月8日～9日

エ) 調査結果

気象、地象、水象の概況及び土壌断面調査結果は、以下に示すとおりである。なお、動物等の生育環境と植物の関わり及び植物相互のかかわりの状況については、生態系の観点から「別添5-2-5 4 植物・動物・生態系」(P.967)で詳述する。

a 気象、地象、水象の概況

「平成24年度版横須賀市統計書」(平成24年、横須賀市)によれば、平成23年の横須賀市年平均気温は16.6℃で、年間の降水量は約1,466.7mmである。

横須賀市は、西部の大楠山と武山を中心とする山地と、衣笠から野比に至る丘陵地、宮田台地を骨格とし、その間に平作川流域の平地が広がっている。調査範囲は大楠山の南東部に位置し、山地及び丘陵が主体となって、大部分が三浦層群に相当する砂泥互層から成っている。

b 分布土壌とその性質

「土地分類図（神奈川県）」（昭和50年、国土庁）によれば、調査範囲の土壌は、褐色森林土（乾性褐色森林土、褐色森林土、細粒褐色森林土）、黒ボク土、グライ土（細粒強グライ土）の分布が示されている。褐色森林土は山地の森林下に広く分布している褐色の土壌で、有機物が蓄積した黒色の表層と褐色の下層からなる。黒ボク土は、火山噴出物及びその含有率が比較的高い母材に由来する土壌で、主に台地から丘陵地などに分布している。グライ土は、地下水に浸されて酸素が欠乏することで鉄分が還元されて生じた青灰色の土壌で、低湿地などにみられる。

現地調査を実施した4地点の土壌調査では、いずれも褐色森林土が確認された。各地点の断面調査結果は、表5-2-1-10-17に示すとおりである。

a) S1（シイ・カシ二次林：植生調査地点Q11）

A₀*層のうちL層が1cm、FH層が5cmであった。

A*層は土厚15～25cmであり、黒褐色で腐食を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎があり、特に中根に富んでいた。また細礫も含んでいた。A層とB層の境界は明瞭であった。

B*層はにぶい黄橙色で、土厚75～85cm、A層よりはやや堅密度の値は大きいと比較的柔らかい土壌であった。土質は半湿で細～大の根茎を含んでいた。

b) S2（スギ植林：植生調査地点Q23）

A₀層のうちL層が5cm、FH層が2cmであった。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は判然であった。A₁層は土厚20～25cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎を含んでいた。A₂層は土厚22～25cm、暗褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で小根を含んでいた。A層とB層の境界は漸変であった。

B層は2層に分かれており、B₁層とB₂層の境界は明瞭であった。B₁層は褐色で土厚40cm、A層よりはやや堅密度の値は大きいと比較的柔らかい土壌であった。土性は埴質壤土で、土湿は半湿で細～中の根茎を含んでいた。B₂層は灰黄褐色で土厚10cm、堅密度の値が大きく、絞め固まった土壌であり、構造は壁状となっていた。土性は壤土で、土湿は半湿であった。

c) S3（オオシマザクラ植林：植生調査地点Q12）

A₀層のうちL層が6cm、FH層が3cmであった。

* 「A₀層、A層、B層」：森林土壌の表層付近の断面は、以下に示す層に大別される。
・A₀層：最も表層の、落葉落枝などの未分解また分解された植物遺体からなる有機質層。
・A層：表層またはA₀層の下に生成された無機質層。腐植化した有機物が集積する。
・B層：風化の進んだ無機質層で腐植に乏しい。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は漸変であった。A₁層は土厚10～25cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～小の根茎を含んでいた。A₂層は土厚5～31cm、暗褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、A₁層よりはやや堅密度の値は大きいと比較的柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細根と太い根茎を含んでいた。A層とB層の境界は判然であった。

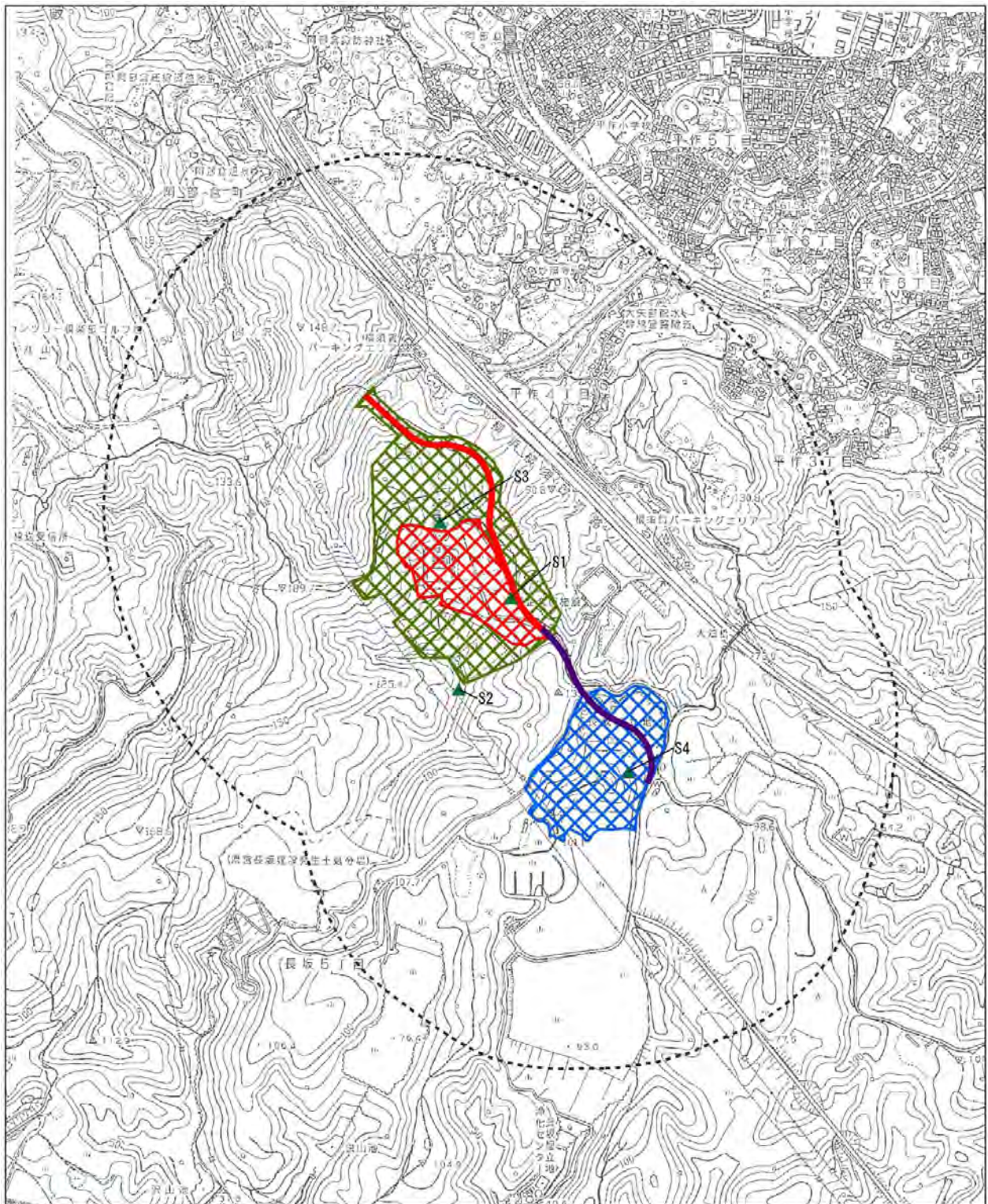
B層はにぶい褐色で、土厚59～70cm、堅密度の値が大きく、絞め固まった土壌であり、構造は堅果状となっていた。土質は半湿で細～小の根茎を含んでいた。

d) S4 (オニシバリーコナラ群集：植生調査地点Q24)

A₀層のうちL層が4cm、FH層が3cmであった。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は漸変であった。A₁層は土厚15～25cm、極暗色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細根及び中根を含んでいた。A₂層は土厚17～33cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、A₁層よりはやや堅密度の値は大きい柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎を含んでいた。A層とB層の境界は明瞭であった。

B層は黄褐色で、土厚52～58cm、堅密度の値がやや大きく、絞め固まった土壌であり、構造は塊状となっていた。土質は半湿で細～大の根茎を含んでいた。



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<p> 調査位置</p> <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
---	---

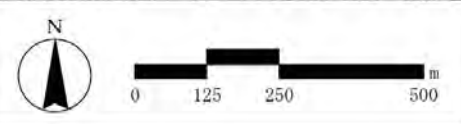


図 5-2-1-10-7 調査地点 (土壌断面調査)

表5-2-1-10-17 土壌断面調査結果

No.	土壌型	層位	厚さ (cm)	下層と の層界	土色	腐植	土性	構造	水湿	緊密度	根系	石礫
S1	褐色 森林土	A ₀	6	L層:1cm、F層+H層:5cm								
		A	15-25	明	黒褐 10YR3/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	大あり/中富む/ 細含む	細礫 含む
		B	75-85+	—	にぶい黄橙 10YR6/4	なし	埴土	壁状	半湿	疎	大含む/小含む/ 細含む	なし
S2	褐色 森林土	A ₀	7	L層:5cm、F層+H層:2cm								
		A ₁	20-25	判	黒褐 10YR2/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし
		A ₂	22-25	漸	暗褐 7.5YR3/3	含む	埴質壤土	塊状	半湿	極疎	小含む	なし
		B ₁	40	明	褐 10YR4/4	なし	埴質壤土	塊状	半湿	疎	中含む/小含む/ 細含む	なし
		B ₂	10+	—	灰黄褐 10YR6/2	なし	壤土	壁状	半湿	中	なし	なし
S3	褐色 森林土	A ₀	9	L層:6cm、F層+H層:3cm								
		A ₁	10-25	漸	黒褐 7.5YR2/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	小含む/細含む	なし
		A ₂	5-31	判	暗褐 7.5YR3/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	疎	大含む/細含む	なし
		B	59-70+	—	褐 7.5YR4/4	なし	埴質壤土	堅果状	半湿	中	小含む/細含む	なし
S4	褐色 森林土	A ₀	7	L層:4cm、F層+H層:3cm								
		A ₁	15-25	漸	極暗褐 7.5YR2/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	中含む/細含む	なし
		A ₂	17-33	明	黒褐 7.5YR3/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎～ 疎	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし
		B	52-58+	画	黄褐 10YR5/6	なし	埴質壤土	塊状	半湿	疎～中	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし

オ 対象事業の計画の状況

ア) 調査事項

造成工事の範囲及び施工方法とした。

イ) 調査範囲

実施区域とした。

ウ) 調査方法

工事計画及び事業計画等の把握により行った。

エ) 調査結果

対象事業の工事計画等の内容は、「別添4-2 2 建設工事等」(P.111)に示すとおりである。

実施区域の敷地面積は、発生土処分場の建設(約7.0ha)、宅地の造成(約18ha、このうち廃棄物処理施設区域 約4.4ha、残置森林 約13.6ha)、関連事業の新設搬入道路(約700m)及び既設改修道路(約450m)である。

なお、新設搬入道路の計画策定は、自然環境の影響を低減するため、一部トンネル化することにより、既存の樹林環境を多く確保し、可能な限り自然環境への影響を低減する。造成に伴う法面については、既存の樹林環境を確保するため傾斜を大きくとる。発生土処分場の跡地については、既設道路等の改修計画以外の場所は森林法に基づき自然林となるよう管理する。

(2) 動物

ア 動物相

ア) 調査事項

調査地域に生息する哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類の種名及び分布状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、実施区域内及びその周辺500m程度の範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-8に示すとおりである。

ウ) 調査方法

既存資料調査及び現地調査により行った。

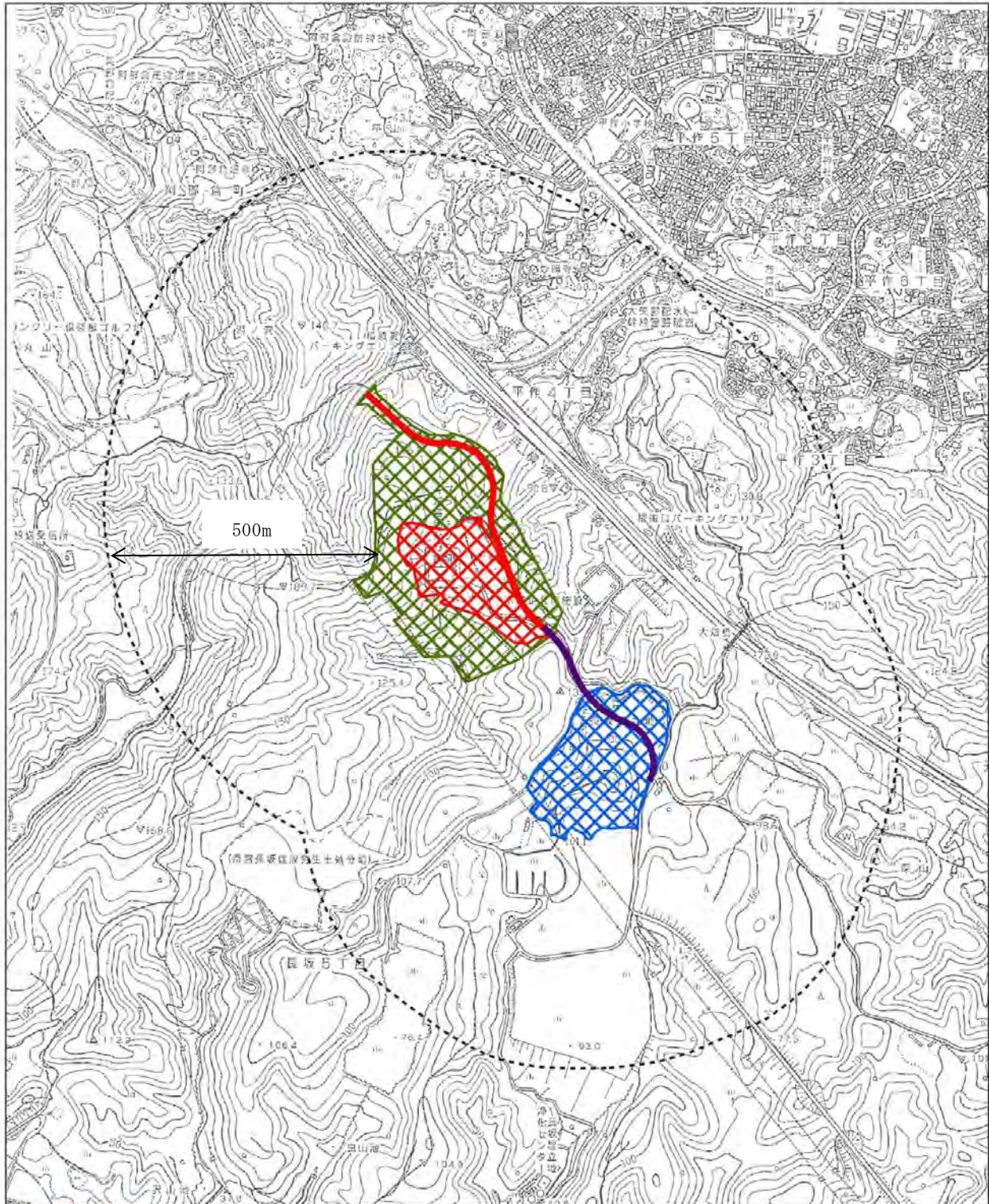
a 既存資料調査







横須賀市に生息する動物について、既存資料の収集を行い、記録種を整理し、あわせて表5-2-1-10-37 (P. 428) に基づき、重要な種等について抽出した。

収集した既存資料は、表5-2-1-10-18に示すとおりである。

表5-2-1-10-18 動物既存資料一覧

番号	資料名	発行者	発行年
①	「第2回自然環境保全基礎調査 神奈川県動植物調査分布図 神奈川県」	環境庁	昭和56年
②	「第3回自然環境保全基礎調査 動植物分布調査報告書 両生類・爬虫類」	環境庁	昭和63年
③	「地域環境評価書 －三浦半島南部地域－」	神奈川県環境部	平成2年
④	「第4回自然環境保全基礎調査 動植物分布調査報告書 (両生類・爬虫類)」	環境庁自然保護局	平成5年
⑤	「生物多様性調査 動物分布調査 報告書 (両生類・爬虫類)」	環境省自然環境局 生物多様性セ ンター	平成13年
⑥	「横須賀市芦名地区産業廃棄物 最終処分場建設事業 環境影響予測評価書」	神奈川県	平成12年
⑦	「Y-HEART計画基盤整備事業 環境影響予測評価書案」	西武鉄道株式会社	平成12年
⑧	「第6回自然環境保全基礎調査」	環境省	平成15年～ 17年
⑨	「平成23年度 かながわ環境整備 センター 環境保全対策（動物・植物）等 業務委託報告書」	神奈川県環境農政局 U-Landscaps Design株式会社	平成24年



- 凡例
-  : 廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む)
 -  : 宅地の造成
(残置森林 (最大範囲))
 -  : 発生土処分場
 -  : 調査範囲
 -  : 新設搬入道路
 -  : 既設改修道路

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

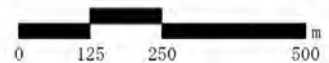


図 5-2-1-10-8 調査範囲(動物)

b 現地調査

現地調査の調査内容は、表5-2-1-10-19に示すとおりである。

表5-2-1-10-19 動物現地調査内容

調査項目		調査時期・回数	調査方法
動物相	哺乳類	春、夏、秋、冬：各1回	直接観察法（生体、フィールドサイン、鳴き声他）、トラップ法（シャーマン式）、無人撮影法、バット・ディテクターによるコウモリ調査
	鳥類	12～2月及び5～7月：各2回 8～11月及び3～4月：各1回	直接観察法（定点センサス法、ルートセンサス法、夜行性鳥類の調査他）
	爬虫類	春、夏、秋、早春：各1回	直接観察法
	両生類	春、夏、秋、早春：各1回	直接観察法、卵塊・幼生調査、鳴き声調査
	昆虫類	4～5月及び6月：各2回 7～8月及び9～10月：各1回	直接観察法、ビーティング法、スウィーピング法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法

a) 哺乳類

i 直接観察法

調査範囲は、図5-2-1-10-9（P. 398）に示すとおりである。

調査範囲内の水際、小径、土壌の柔らかい場所、草むら、樹林地内等の生息、出没の予想される場所を任意に踏査し、生体、鳴き声及び足跡、糞、食痕、巣、爪跡、抜け毛、掘り起こし等のフィールドサインを確認した。フィールドサインを確認した場合は、写真撮影を行い、大きさ等を記録した。

夜間に、コウモリ類が発する超音波をバット・ディテクターによって検知する生息確認調査を実施した。

ii トラップ法

トラップを設置した地点の環境の概要は、表5-2-1-10-20に示すとおりである。また、調査地点は、図5-2-1-10-9に示すとおりである。

フィールドサインによる確認が困難なネズミ類やモグラ類等の小型哺乳類を対象としてトラップ（罠）による捕獲調査を実施した。調査地点は3地点（T-1～T-3）設定し、1地点あたりトラップ（シャーマントラップ）20個を設置した。トラップは、一晩設置し、翌朝捕獲状況を確認した。誘引餌にはピーナッツと魚肉ソーセージの2種類を使用した。

表 5-2-1-10-20 トラップ設置地点の環境概要

調査地点	環境概要
T-1	実施区域内の樹林環境を代表する地点として、実施区域内（宅地の造成）に設定した。主にコナラ、オオシマザクラが多く、林床にはアオキ等が生育する。
T-2	実施区域内の樹林環境を代表する地点として、実施区域内（宅地の造成・新規搬入道路）に設定した。主にオオシマザクラ、エノキが多く、林床にはチヂミザサ、セイタカアワダチソウ等が密生する。
T-3	実施区域内の草地環境を代表する地点として、実施区域内（発生土処分場）に設定した。ススキ等が繁茂する。

iii 無人撮影法

夜行性や警戒性の強い種の確認のため、赤外線センサーを備えた自動撮影装置（センサーカメラ）を設置した。カメラは哺乳類が頻繁に往来する「けもの道」などに設置し、撮影範囲内にソーセージなどの誘引餌を置いた。設置箇所は、トラップ3地点（T-1～3）付近とした。

b) 鳥類

i 直接観察法

調査範囲を任意に踏査し、鳥類を記録した。

また、フクロウ類等の夜行性鳥類を対象とした夜間調査も実施した。

ii ルートセンサス法

調査ルートは、図5-2-1-10-10 (P. 399) に示すとおりである。

設定した3ルート (R-1~3) を時速約2kmで歩き、ルートの片側25m、計50m幅の範囲に出現する鳥類を記録した。調査は、鳥類が活発な早朝に実施した。

iii 定点センサス法

調査地点は、図5-2-1-10-10 (P. 399) に示すとおりである。

見通しの良い場所に設定した2地点 (P-1~2) において、種の識別ができる範囲内に出現する鳥類を記録した。

また、ルート及び定点の環境の概要は、表5-2-1-10-21に示すとおりである。

表5-2-1-10-21 鳥類調査地点の環境の概要

調査ルート 調査地点	延長距離 (km)	環境概要
R-1	約1.7	実施区域内 (宅地の造成) を通過するルートである。広葉樹林内のハイキングコースを通過する。
R-2	約1.9	実施区域内 (発生土処分場) に隣接するルートである。施設内の道路を通過する。
R-3	約1.0	実施区域の周辺を通過するルートである。麓にある道路を通過する。
P-1	—	実施区域内 (宅地の造成) の裸地に設置された地点。実施区域北側の上空を見渡せる。
P-2	—	実施区域内 (発生土処分場) の草地に設置された地点。実施区域南側の上空を見渡せる。

c) 爬虫類

i 直接観察法

調査範囲は、図5-2-1-10-11 (P. 400) に示すとおりである。

調査範囲において、草むら、林床の落ち葉の堆積した場所、道路の側溝、ガレ場の石の下、朽木の下等、爬虫類の生息場所を踏査して、生体、幼体、死骸等により生息の確認を行った。

d) 両生類

i 直接観察法 (卵塊・幼生・鳴き声他)

調査範囲は、図5-2-1-10-11 (P. 400) に示すとおりである。

調査範囲において、水たまり、草むら、林床の落ち葉の堆積した場所、道路の側溝、ガレ場の石の下、朽木の下等、両生類の生息場所を踏査して、卵塊、幼生、幼体、成体、鳴き声、死骸等により生息の確認を行った。

e) 昆虫類

i 直接観察法（ビーティング法・スウィーピング法他）

調査範囲は、図5-2-1-10-12（P. 401）に示すとおりである。

昆虫類は種数が多く生活様式が多様なため、さまざまな採集方法を併用することが必要であることから、調査範囲を任意に踏査し、各種採集方法を用いて調査した。本調査においては、主にスウィーピング法（歩きながら捕虫網を左右に振って採集する）、ビーティング法（木の枝等をたたいて落下させて採取する）、見つけ採り法を用いた。採集した昆虫類のうち、現地での同定が困難な種については持ち帰って同定した。また、初夏にホタル類を対象とした夜間調査を水生生物調査地点（図5-2-1-10-18参照）で実施した。

ii ライトトラップ法

調査地点の環境の概要は、表5-2-1-10-20（P. 394）に示すとおりである。また、調査地点は、図5-2-1-10-12（P. 401）に示す。

ライトトラップ法は、夜間、灯火に昆虫類を誘引し採集するもので、走光性をもつ昆虫類に有効である。本調査ではボックス法により行った。光源には6Wのブラックライト1本を使用し、単一乾電池6本で約8時間点灯させた。2地点（T-1～2）に、夕方設置し、翌朝回収した。採集した昆虫類は持ち帰って同定した。

iii ベイトトラップ法

調査地点の環境の概要は、表5-2-1-10-20（P. 394）に示すとおりである。また、調査地点は、図5-2-1-10-12に示す。

ベイトトラップ法は、地面に落とし穴を設けて落下した昆虫類を採集する方法で、特に地表性昆虫類に有効である。トラップとしてプラスチックカップ（口径6.4cm、高さ9cm程度）を用い、誘引餌はビールと乳酸菌飲料を混ぜたものを、3地点（T-1～3）毎に20個を設置、一晩放置した。採集した昆虫類は持ち帰って同定した。

エ) 調査期日

各調査項目の調査期日は、表5-2-1-10-22に示すとおりである。

表5-2-1-10-22 動物調査期日

調査項目	調査時期	調査期日	調査方法
哺乳類	夏季	平成24年8月14日～15日	直接観察法、トラップ法、無人撮影法、バット・ディテクターによるコウモリ調査
	秋季	平成24年10月4日～5日	同上
	冬季	平成24年12月10日～12日	同上
	春季	平成25年4月30日～5月2日	同上
鳥類 (鳥類相)	6月	平成24年6月25日～27日	直接観察法(ルートセンサス法、定点センサス法)、夜間調査
	10月	平成24年10月17日～18日	同上
	12月	平成24年12月10日～12日	同上
	2月	平成25年2月4日～5日・8日	同上
	4月	平成25年4月3日～5日	同上
	5月	平成25年5月1日～2日	同上
爬虫類	夏季	平成24年6月25日～27日	直接観察法
	秋季	平成24年10月4日～5日	同上
	早春季	平成25年3月7日～8日	同上
	春季	平成25年4月30日～5月2日	同上
両生類	夏季	平成24年6月25日～27日	直接観察法、鳴き声調査
	秋季	平成24年10月4日～5日	同上
	早春季	平成25年3月7～8日	同上
	春季	平成25年4月30日～5月2日	同上
昆虫類	6月	平成24年6月13日	直接観察法(ホタル調査)
		平成24年6月25日～27日	直接観察法(ビーティング法、スウィーピング法、見つけ採り法)
	8月	平成24年8月14日～15日	直接観察法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法
	10月	平成24年10月4日～5日	同上
	4月	平成25年4月3日～5日	直接観察法(ビーティング法、スウィーピング法、見つけ採り法)
	5月	平成25年5月1日～2日	直接観察法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法
	6月	平成25年6月1日	直接観察法(ビーティング法、スウィーピング法、見つけ採り法)

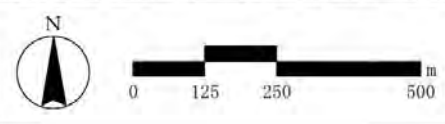
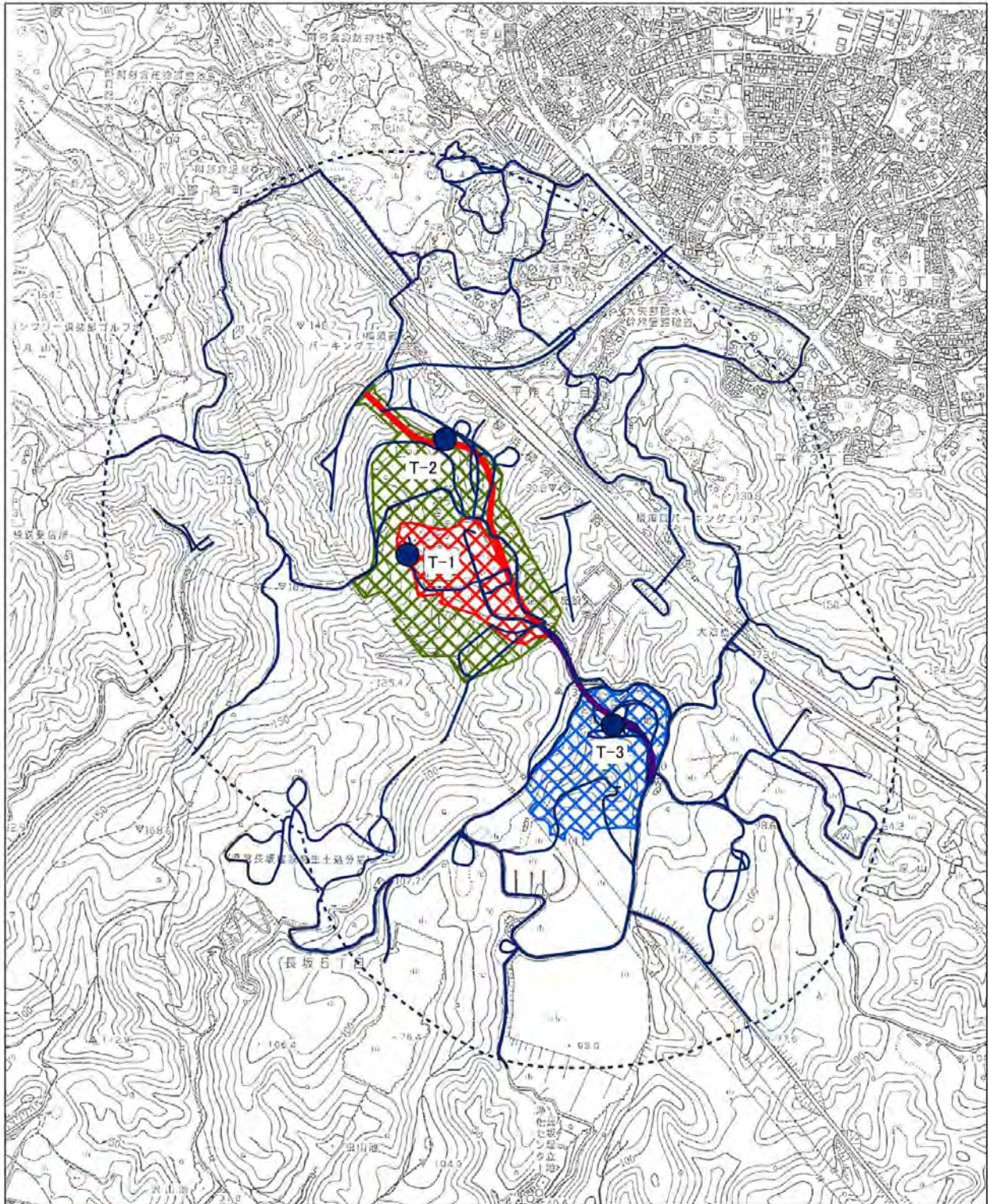


図 5-2-1-10-9 調査地点(哺乳類)

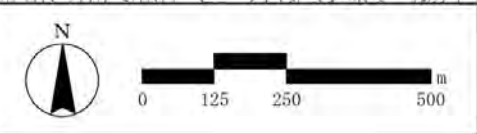
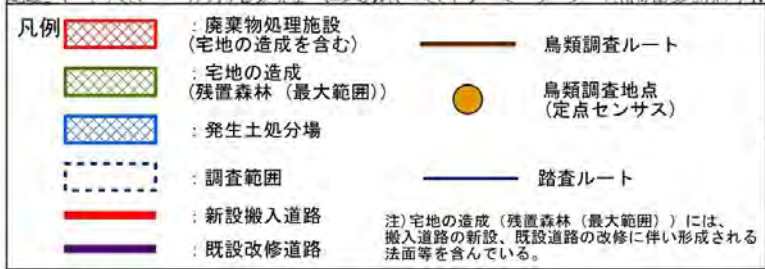
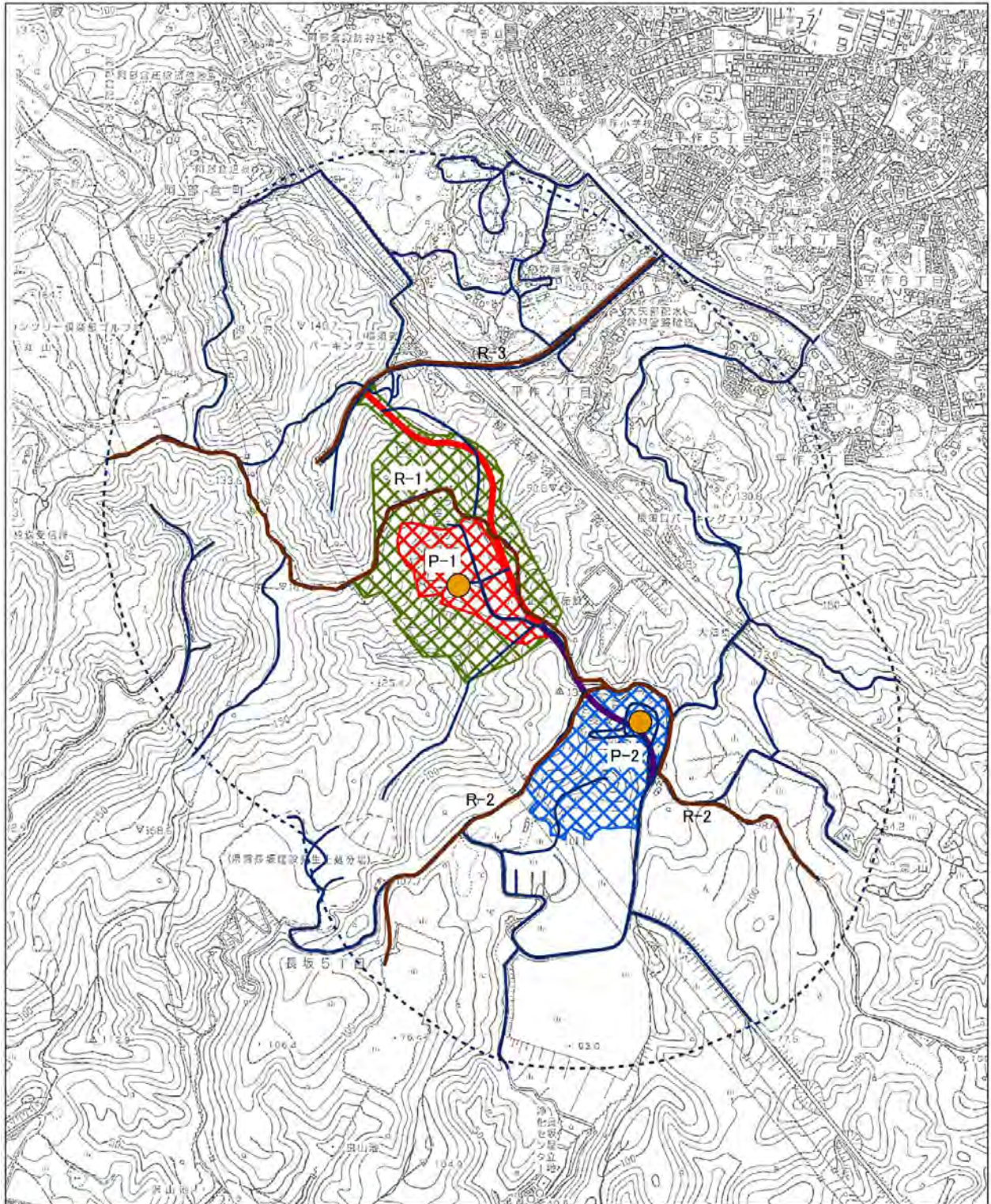
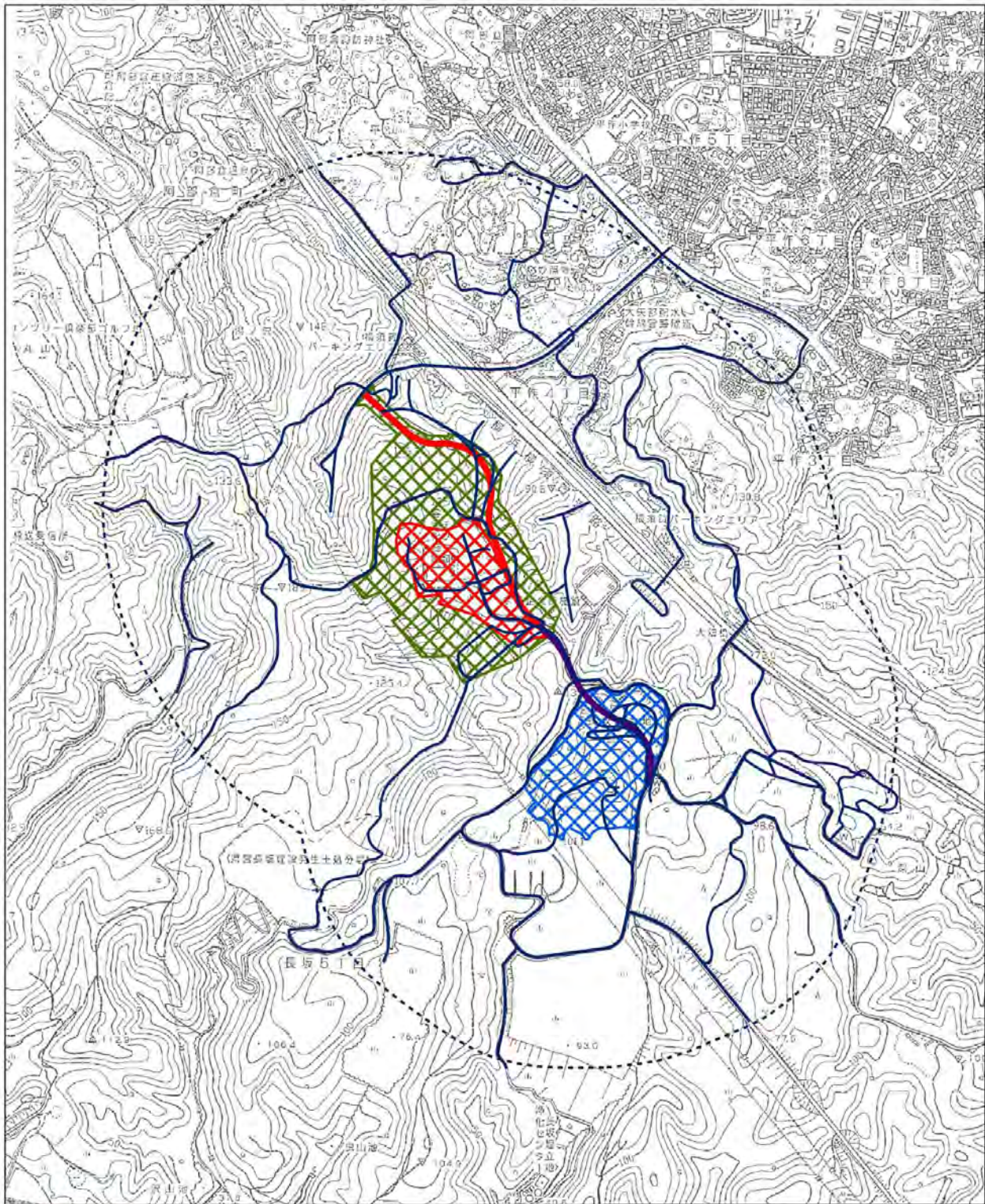


図 5-2-1-10-10 調査地点(鳥類)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林(最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<p> 踏査ルート</p> <p>注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
---	---

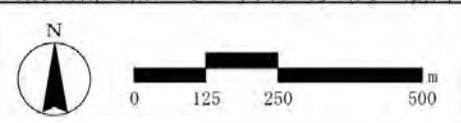


図 5-2-1-10-11 調査地点
(両生類・爬虫類)

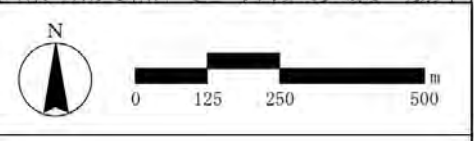
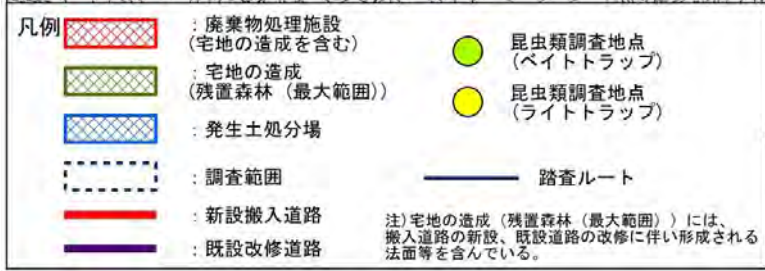
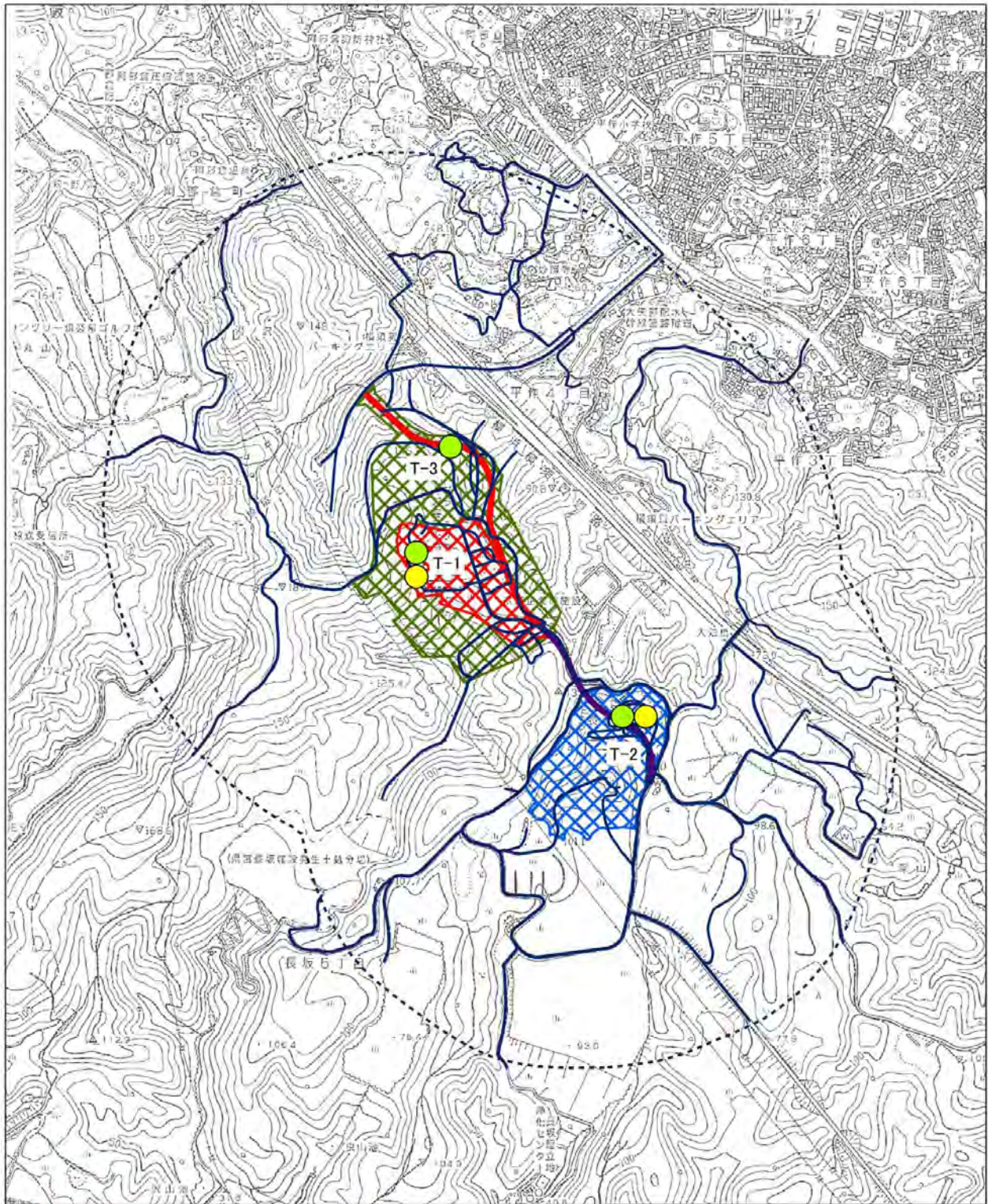


図 5-2-1-10-12 調査地点 (昆虫類)

オ) 調査結果

a 既存資料調査

既存資料調査確認種の分類群別の概要は、表5-2-1-10-23に示すとおりである。

既存資料により確認された動物は、哺乳類14種、鳥類86種、爬虫類11種、両生類10種、昆虫類1077種であった。このうち、表5-2-1-10-37 (P. 428) の選定基準に該当する重要な種は、哺乳類1種、鳥類43種、爬虫類7種、両生類6種、昆虫類33種であった。

表5-2-1-10-23 既存資料調査による分類群別の概要

分類群	合計種数	重要な種	
		種数	主な種名
哺乳類	14種	1種	イタチ
鳥類	86種	43種	ミゾゴイ、ハチクマ、オオタカ、サシバ、ノスリ、フクロウ、ハヤブサ、ツバメ、アカハラ、ルリビタキ、オオルリ等
爬虫類	11種	7種	イシガメ、トカゲ、シマヘビ、アオダイショウ、マムシ等
両生類	10種	6種	トウキョウサンショウウオ、イモリ、アズマヒキガエル、ニホンアカガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル
昆虫類	1,077種	33種	ミルンヤンマ、キボシケシゲンゴロウ、ヒラタクワガタ、キイロトラカミキリ、カボチャミバエ、スミナガシ等

b 現地調査結果

a) 哺乳類

i 確認種

確認種は、表5-2-1-10-24に示すとおりである。なお、表中には既存資料調査による確認種も記した。

現地調査確認種は、合計5目9科9種であった。調査時期別の種数は、夏7種、秋5種、冬6種、春6種であり、大差はなかった。

調査範囲の広い範囲でアズマモグラの塚や坑道及びタイワンリスが確認され、実施区域では、タヌキ及びノウサギの糞が確認された。一方、トラップ調査ではアカネズミが捕獲されたほか、無人撮影法では、タヌキ、イタチ、ハクビシンが撮影された。夜間調査では、コウモリ目の一種（バットディテクターによる確認）が、実施区域内及びその周辺の草地や林縁の上空で確認された。

また、実施区域の周辺の草地では、アライグマの足跡が確認された。

表5-2-1-10-24 哺乳類確認種

番号	目	科	種名	文献	調査時期				調査範囲			重要種	
					夏季	秋季	冬季	春季	実施区域*				周辺
					8月	10月	12月	5月	①	②	③		
1	モグラ	モグラ	ヒミズ	●									
2			アズマモグラ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	
3	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ	●									
-			コウモリ目の一種		○	○		○	○	○	○	○	
4	サル	サル	ニホンザル	●									
5	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	●	○	○	○	○	○		○	○	
6	ネズミ	リス	タイワンリス	●	○	○	○	○	○	○	○	○	
7		ネズミ	アカネズミ	●				○	○				
8			ヒメネズミ	●									
9			カヤネズミ	●									
10			ハツカネズミ	●									
11	ネコ	アライグマ	アライグマ				○					○	
12		イヌ	タヌキ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	
13			キツネ	●									
14		イタチ	イタチ	●	○		○			○		○	○
15			アナグマ	●									
16		ジャコウネコ	ハクビシン		○					○			
合計	6目	10科	16種	14種	7種	5種	6種	6種	6種	6種	5種	7種	1種

- 注) 1. 分類及び種名は「日本産野生生物目録 脊椎動物編」(平成5年、環境庁)に準拠した。
 2. モグラ類の塚や坑道は、分布上からアズマモグラとした。
 3. コウモリは、バット・ディテクターによる確認であり、種の同定が困難であるため、コウモリ目の一種とした。
 4. イタチ科の一種は、チョウセンイタチの記録がないことからイタチとした。
 5. ※実施区域 ①：廃棄物処理施設、②：宅地の造成、③：発生土処分場

ii 確認状況

各種の確認状況は、以下に示すとおりである。

○アズマモグラ

通年、実施区域内及びその周辺の林道等で、塚及び坑道が確認された。

○コウモリ目の一種

夏季、秋季、春季に、実施区域内及びその周辺の草地、林縁等の上空で確認された(バット・ディテクターによる反応周波数帯は40～60kHz)。

○ノウサギ

通年、実施区域(発生土処分場)で糞が確認された。

冬季に、実施区域の周辺のスギ植林内で1個体が目撃された。

春季に、実施区域内(宅地の造成)及びその周辺で延べ3個体が確認された。

○タイワンリス

通年、実施区域内及びその周辺の広い範囲で確認された。

○アカネズミ

春季に、トラップ調査で捕獲された。捕獲された個体数は、T-1で1個体、T-3で1個体の合計2個体であった。

○アライグマ

冬季に、実施区域の周辺の草地で足跡が確認された。

○タヌキ

夏季に、実施区域内(宅地の造成)で足跡が確認されたほか、実施区域内(新規搬入道路)に設置した自動撮影装置(T-2)で1個体が撮影された。

秋季に、実施区域の周辺で足跡及び糞が確認された。

冬季に、実施区域内(宅地の造成・発生土処分場)で糞が確認された。

春季に、実施区域の周辺で糞が確認された。

○イタチ

夏季に、実施区域内(新規搬入道路)に設置した自動撮影装置(T-2)で1個体が撮影された。

冬季に、実施区域の周辺で糞が確認された。

○ハクビシン

夏季に、実施区域内(新規搬入道路)に設置した自動撮影装置(T-2)で1個体が撮影された。

iii トラップ法

トラップ調査により、表5-2-1-10-25に示すとおり、アカネズミが合計2個体捕獲された。調査時期別では、春季で2個体であった。調査地点別では、T-1と T-3でそれぞれ1個体であった。夏季、秋季、冬季調査では、捕獲されなかった。

表5-2-1-10-25 トラップ捕獲個体数一覧

調査時期	夏季	秋季	冬季	春季	合計
T-1	0	0	0	1 ^{注)}	1
T-2	0	0	0	0	0
T-3	0	0	0	1 ^{注)}	1
合計	0	0	0	2	2

注) アカネズミ

b) 鳥類

i 生息確認種

現地調査による確認種は、表5-2-1-10-26(1/2)～(2/2)に示すとおりである。確認種は、鳥類相調査による確認種のほか、既存資料調査による確認種も記載した。

現地調査により生息が確認された鳥類は、合計14目35科74種であった。調査回別にみると、鳥類相調査では、6月調査で35種、10月調査で43種、12月調査で50種、2月調査で43種、4月調査で45種、5月調査で40種が確認された。

主な確認種は、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラス等であった。6月調査ではホトトギス、ヤブサメ、オオルリ等の夏鳥が確認された。12月、2月の調査ではジョウビタキ、ツグミ類、アオジ等の冬鳥が確認された。また、4月、5月、10月調査では、猛禽類、ヒタキ類等の渡りの途中と思われる種も確認された。

夜間調査では、フクロウの鳴き声の実施区域内(宅地の造成)及び実施区域の周辺の樹林で確認されたほか、ミゾゴイの鳴き声も実施区域内(宅地の造成)の樹林で確認された。

環境別にみると、樹林では、フクロウ、カラ類、キツツキ類等のほか、コジュケイやガビチョウ等の外来種も確認された。実施区域の周辺の人家周辺では、カラス類、ムクドリ、スズメ等の人里を好む種が確認された。また、平作川や『横須賀しょうぶ園』の池では、セキレイ類、カワセミ等の水辺を好む種が確認された。

表5-2-1-10-26(2/2) 鳥類確認種

番号	目	科	和名	文献	調査時期						調査範囲			渡り区分	重要種		
					6月	10月	12月	2月	4月	5月	実施区域*					周辺	
											①	②	③				
81			コサメビタキ	●											夏鳥	○	
82			キビタキ	●		○					○		○	○	夏鳥	○	
83			オオルリ	●	○						○			○	夏鳥	○	
84		イワヒバリ	カヤクグリ				○							○	冬鳥		
85		スズメ	スズメ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	留鳥		
86		セキレイ	キセキレイ	●		○	○			○	○			○	冬鳥	○	
87			ハクセキレイ	●	○	○	○	○	○	○	○			○	留鳥		
88			セグロセキレイ	●	○	○	○	○	○	○	○			○	留鳥	○	
89			ピンズイ	●		○		○				○	○	○	○	冬鳥	○
90			クヒバリ			○								○	冬鳥		
91		アトリ	カワラヒワ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	留鳥	○	
92			マヒワ			○	○	○				○	○	○	○	冬鳥	
93			ベニマシコ	●			○	○	○				○	○	○	冬鳥	
94			ウソ	●			○	○	○			○	○	○	○	冬鳥	
95			シメ	●		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	冬鳥	
96			イカル			○	○	○						○	○	留鳥	
97		ホオジロ	ホオジロ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	留鳥		
98			カシラダカ	●			○							○	○	冬鳥	
99			ミヤマホオジロ	●												冬鳥	
100			アオジ	●		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	冬鳥	○
101			クロジ	●			○	○						○	冬鳥	○	
102	キジ	キジ	コジュケイ	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	外来種		
103	ハト	ハト	ドバト	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	外来種		
104	スズメ	チメドリ	ガビチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	外来種		
合計	14目	40科	104種	86種	35種	43種	50種	43種	45種	40種	37種	42種	47種	70種	-	40種	
					74種												

- 注) 1. 分類及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。
 3. オシドリは、両生類・爬虫類早春調査で確認された。
 4. *実施区域 ①: 廃棄物処理施設、②: 宅地の造成、③: 発生土処分場

ii 調査方法別の調査結果

調査ルート及び定点の結果は、表5-2-1-10-27～表5-2-1-10-28に示し、調査月別の結果は、表5-2-1-10-29(1/6)～(6/6)に示すとおりである。

i) ルートセンサス法

調査の結果、9目24科53種、延べ1,639個体が確認された。地点別では、R-1が37種501個体、R-2が40種728個体、R-3が34種410個体であった。

R-1は大楠山ハイキングコースを通過するルートで、樹林環境が多く、キツツキ類、メジロ、ヤブサメ、ガビチョウ等の樹林性の鳥類が確認された。

R-2は主に林縁沿いの舗装路を通過するルートで、メジロ(101個体)が最も多く確認され、トビ、ウグイス、アオジ等が確認された。また実施区域上空を通過するハチクマの飛翔も確認された。

R-3は平作の道路沿いを通過するルートで、ヒヨドリ(104個体)が最も多く確認され、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシボソガラス等が確認された。

表 5-2-1-10-27 ルートセンサス調査結果

No.	種名	R-1							R-2							R-3							合計	
		6月	10月	12月	2月	4月	5月	合計	6月	10月	12月	2月	4月	5月	合計	6月	10月	12月	2月	4月	5月	合計		
1	キジ	1						1							1									2
2	カルガモ							1											1	2				3
3	キジバト				3			3			8	4			1	13	2	2	1		4			9
4	カワウ							3	1					1		2								2
5	ホトトギス																1							1
6	ハチクマ								1						1									1
7	トビ	2		1	1	1		5		1		1	1	1	4	2	2	4	4				12	
8	オオタカ													1	1		2							2
9	ノスリ											1					1		1					2
10	カワセミ																		1					1
11	ヨガラ	1	1	4	1	3	2	12	1	3	3	6	1	5	19	1	1				1	3	34	
12	アカゲラ			1				1														1	1	
13	アオゲラ					2	1	3		2					2					1		1	6	
14	モズ		1	1				2		4					4		4						10	
15	カケス		1					1		1					1		3						3	
16	ヒシボソガラス					13		13	1		5				6	1	2	4	1	1	4	13	32	
17	ハシブトガラス	7	5	4	1	2	4	23	57	9	2	2	2	1	73	12	7	9	2	4	4	38	134	
18	キグイタダキ											3			3								3	
19	ヨガラ							1															1	
20	ヤマガラ	1	1	3		4	1	10	2	2	5	10	3	4	26	1		1	1		1	4	40	
21	ヒガラ				1			1			1	2	3		6								7	
22	シジュウカラ		6	12		6	3	27	8	5	7	8	8	2	38	1		2		1		4	69	
23	ツバメ	2						2	1						1							1	4	
24	ヒヨドリ		55	21	3	24	1	104	2	41	22	10	16	3	94	15	57	16	10	5	1	104	302	
25	ウグイス	25		11		20	11	67	23	4	6	3	28	10	74	9		5	2	2	3	21	162	
26	ヤブサメ	1				1		2															2	
27	エナガ			3		2		5		3			2		5				2			2	12	
28	メジロ	18	36	37	1	20	8	120	31	18	22	11	15	4	101	45	14	2	1	4	70	291		
29	ムクドリ																5		12		5	22	22	
30	マミチャジナイ									2					2								2	
31	シロハラ		6	3	3	1	13			4	6				10								23	
32	アカハラ					1		1				2	1		3								4	
33	ツグミ										5				5			1				1	6	
34	ルリビタキ			1	1			2				1			1								3	
35	ジョウビタキ										3	1			4		1					1	5	
36	キビタキ		1					1		2					2								3	
37	オオルリ	1						1															1	
38	スズメ	7						7	21	2	2				25	7	6	2	4	7	9	35	67	
39	キセキレイ																1		1	1	3		3	
40	ハクセキレイ							2									3	2	4	2	1	12	14	
41	セグロセキレイ	1	1														1	1	3				5	
42	カワラヒワ					2		2	2	1		1			4	2	1				2	4	10	
43	ベニマシコ					1		1			5				5								6	
44	ウソ			5				5			9	1			10								15	
45	シメ			3				1	4		2			3	5		1	1					2	
46	イカル				1			1															1	
47	ホオジロ	1	5			3	3	12	7	10	12	1	8	11	49	1	6				1	8	69	
48	カンシラダカ										1				1								1	
49	アオジ			4	5	6		15			31	19	6		56		2	5	1			8	79	
50	クロジ							2	2														2	
51	コジュケイ	5		7		7		19	8	11	8		15	3	45	1	2			1		4	68	
52	ドバト									3					3			4					4	
53	ガビチョウ	3				5		10	8	3	5		6		22	1				1	1	3	35	
合計	53種	76	113	127	20	127	38	501	177	135	162	88	121	45	728	102	107	73	56	33	39	410	1,639	
合計		種数	15	11	19	10	21	12	37	17	22	21	18	19	11	40	16	17	19	16	15	15	34	53

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。

2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

ii) 定点調査

調査の結果、10月24科44種、延べ602個体が確認された。地点別では、P-1が32種270個体、P-2が40種332個体であった。

P-1は、実施区域内(宅地の造成)の廃棄物処理施設脇に設置され、最も多く確認されたスズメ(46個体)は、処理施設で営巣していたほか、ハクセキレイの確認も施設周辺のみであった。また、周囲には落葉広葉樹林、ササ藪、草地等に接しているため、ヤマガラ、ウグイス、メジロ、ホオジロ等が確認されたほか、上空を飛行するチョウゲンボウ、ツバメ、カワラヒワ等が確認された。

P-2は実施区域内(発生土処分場)の草地に設置され、ヒヨドリ(59個体)が最も多く確認された。ススキ草地ではホオジロ、周囲のササ藪ではウグイスやアオジが比較的多く確認された。

表 5-2-1-10-28 定点調査結果

No.	種名	P-1						P-2						総計			
		6月	10月	12月	2月	4月	5月	合計	6月	10月	12月	2月	4月		5月	合計	
1	キジ													1	1	1	
2	カルガモ										1			1	2	2	
3	キジバト		6	5				11	1	10	8		1		20	31	
4	アオバト									1					1	1	
5	カワウ	2		1			1	4			2		6		8	12	
6	アオサギ								1						1	1	
7	ホトギス								1						1	1	
8	トビ	2		1	2	1		6	2	1		1	2	2	8	14	
9	ノスリ				1			1								1	
10	コゲラ		1			2	2	5	2		2		1	2	7	12	
11	アオゲラ			1	1	1		3		1	1		1		3	6	
12	チョウゲンボウ	1						1								1	
13	モズ			1				1		1					1	2	
14	ハシボソガラス				1			1	1						1	2	
15	ハシブトガラス	9	4	3	3	2	3	24	9	5		1	3	5	23	47	
16	ヤマガラス	1				2	1	4			1		3	4	8	12	
17	シジュウカラ	1	1	1		1		4	1	3	1		3		8	12	
18	ツバメ	1					2	3	1					8	9	12	
19	ヒヨドリ	1	8	7		12	1	29		23	12		21	3	59	88	
20	ウグイス	5	1	1	1	3	3	14	3	2	3		9	3	20	34	
21	エナガ					2		2						2	2	4	
22	メジロ	1	1	14		3	3	22	7	6	11		4	2	30	52	
23	ムクドリ	7						7								7	
24	マミチャジナイ									4					4	4	
25	シロハラ			1				1			1		1		2	3	
26	アカハラ												1		1	1	
27	ツグミ										10				10	10	
28	ルリビタキ			1				1					1		1	2	
29	ジョウビタキ			1				1			1				1	2	
30	スズメ	8	17	9	4	4	4	46	3	1					4	50	
31	ハクセキレイ	4	2	1	1	1	1	10								10	
32	ビンズイ		3					3		2					2	5	
33	カワラヒワ	4	16			1	1	22	9	6	3				18	40	
34	マヒワ		6					6		3	2				5	11	
35	ベニマシコ										2				2	2	
36	ウソ			2				2			7				7	9	
37	シメ		1	3				4		2	5				7	11	
38	イカル									2					2	2	
39	ホオジロ	3	5	3		2	6	19	2	3	7		3	2	17	36	
40	カシラダカ										1				1	1	
41	アオジ						1	1			1		1		2	3	
42	コジュケイ	1	2	1	1	3		8	5	1	2		14	2	24	32	
43	ドバト									1					1	1	
44	ガビチョウ	3				1		4	4	3			1		8	12	
合計	44種	個体数	54	74	57	15	41	29	270	52	81	84	2	77	36	332	602
		種数	17	15	19	9	16	13	32	16	21	22	2	19	12	40	44

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表5-2-1-10-29 (1/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (6月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察	
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺
1	キジ	キジ	キジ	1					○	
2	カモ	カモ	カルガモ						○	○
3	ハト	ハト	キジバト			2		1	○	○
4			アオバト							○
5	カツオドリ	ウ	カワウ		1		2		○	○
6	ペリカン	サギ	アオサギ					1	○	○
7	カッコウ	カッコウ	ホトトギス			1		1		○
8	チドリ	チドリ	コチドリ							○
9	タカ	タカ	ハチクマ		1					
10			トビ	2		2	2	2	○	○
11	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ							○
12	キツツキ	キツツキ	コゲラ	1	1	1		2	○	○
13			アオゲラ							
14	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ				1			
15			ハヤブサ							
16	スズメ	カラス	ハシボソガラス		1	1		1	○	○
17			ハシブトガラス	7	57	12	9	9	○	○
18		シジュウカラ	ヤマガラ	1	2	1	1			○
19			シジュウカラ		8	1	1	1	○	○
20		ツバメ	ツバメ	2	1		1	1	○	○
21		ヒヨドリ	ヒヨドリ		2	15	1		○	○
22		ウグイス	ウグイス	25	23	9	5	3	○	○
23			ヤブサメ	1						
24		エナガ	エナガ							○
25		メジロ	メジロ	18	31	45	1	7	○	○
26		ムクドリ	ムクドリ				7			○
27		ヒタキ	オオルリ	1						
28		スズメ	スズメ	7	21	7	8	3	○	○
29		セキレイ	ハクセキレイ	1			4		○	○
30	セグロセキレイ									○
31	アトリ	カワラヒワ		2	2	4	9	○	○	
32	ホオジロ	ホオジロ	1	7	1	3	2	○	○	
33	(キジ)	(キジ)	コジュケイ	5	8	1	1	5	○	○
34	(ハト)	(ハト)	ドバト		3				○	○
35	(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ	3	8	1	3	4	○	○
計	12目	25科	35種	15種	17種	16種	17種	16種	22種	31種
				76 個体	177 個体	102 個体	54 個体	52 個体		

- 注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表 5-2-1-10-29 (2/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (10月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察		
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺	
1	キジ	キジ	キジ						○		
2	カモ	カルガモ	カルガモ							○	
3	ハト	ハト	キジバト		8	2	6	10	○	○	
4			アオバト						1		○
5	カツオドリ	ウ	カワウ							○	
6	ペリカン	サギ	アオサギ							○	
7	タカ	タカ	トビ		1	2		1	○	○	
8			オオタカ							○	○
9			ノスリ				1			○	○
10	フクロウ	フクロウ	フクロウ							○	
11	キツツキ	キツツキ	コゲラ	1	3	1	1		○	○	
12			アオゲラ			2			1	○	○
13	スズメ	モズ	モズ	1	4	4		1		○	
14		カラス	カケス	1	1	3			○	○	
15			ハシボソガラス			2					○
16			ハシブトガラス	5	9	7	4	5	○	○	
17		シジュウカラ	ヤマガラ	1	2				○	○	
18			ヒガラ		1					○	
19			シジュウカラ	6	5		1	3	○	○	
20		ヒヨドリ	ヒヨドリ	55	41	57	8	23	○	○	
21		ウグイス	ウグイス		4		1	2	○	○	
22		エナガ	エナガ		3						○
23		メジロ	メジロ	36	18	4	1	6	○	○	
24		ムクドリ	ムクドリ			5				○	○
25		ヒタキ	マミチャジナイ		2				4	○	○
26			ツグミ								○
27			エゾビタキ								○
28			キビタキ	1	2					○	○
29		スズメ	スズメ		2	6	17	1	○	○	
30		セキレイ	キセキレイ								○
31			ハクセキレイ	1		3	2			○	○
32			セグロセキレイ			1				○	○
33	ビンズイ						3	2	○	○	
34	タヒバリ										○
35	アトリ	カワラヒワ		1			16	6	○	○	
36		マヒワ					6	3	○	○	
37		シメ			2	1	1	2	○	○	
38		イカル						2	○	○	
39	ホオジロ	ホオジロ	5	10	6	5	3	○	○		
40		アオジ								○	
41	(キジ)	(キジ)	コジュケイ		11	2	2	1	○	○	
42	(ハト)	(ハト)	ドバト					1	○	○	
43	(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ		3			3	○	○	
計	9目	22科	43種	11種	22種	17種	17種	21種	31種	40種	
				個体	個体	個体	個体	個体			

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表 5-2-1-10-29 (3/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (12月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察		
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺	
1	カモ	カモ	カルガモ			1		1		○	
2	ハト	ハト	キジバト		4	1	5	8		○	
3	カツオドリ	ウ	カワウ				1	2		○	
4	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ							○	
5	タカ	タカ	トビ	1		4	1		○	○	
6			ツミ								○
7			ハイタカ								○
8			オオタカ				2				
9			ノスリ				1			○	○
10	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ							○	
11	キツツキ	キツツキ	コゲラ	4	3			2	○	○	
12			アカゲラ	1							○
13			アオゲラ					1	1	○	
14	スズメ	モズ	モズ	1			1			○	
15		カラス	カケス								○
16			ハシボソガラス			5	4				○
17			ハシブトガラス	4	2	9	3			○	○
18		シジュウカラ	ヤマガラ	3	5	1		1	○	○	
19			ヒガラ	1						○	○
20			シジュウカラ	12	7	2	1	1	○	○	
21		ヒヨドリ	ヒヨドリ	21	22	16	7	12	○	○	
22		ウグイス	ウグイス	11	6	5	1	3	○	○	
23		エナガ	エナガ	3					○	○	
24		メジロ	メジロ	37	22	14	14	11	○	○	
25		セッカ	セッカ								○
26		ミソサザイ	ミソサザイ							○	○
27		ムクドリ	ムクドリ								○
28		ヒタキ	シロハラ	6	4		1	1	○	○	
29			アカハラ							○	○
30			ツグミ			5			10	○	○
31			ルリビタキ	1				1			○
32			ジョウビタキ			3	1	1	1	○	○
33		イワヒバリ	カヤクグリ								○
34		スズメ	スズメ		2	2	9			○	○
35	セキレイ	キセキレイ			1					○	
36		ハクセキレイ			2	1		○	○		
37		セグロセキレイ			1					○	
38	アトリ	カワラヒワ					3	○	○		
39		マヒワ					2	○			
40		ベニマシコ			5		2	○	○		
41		ウソ	5	9		2	7	○	○		
42		シメ	3		1	3	5	○	○		
43		イカル								○	
44	ホオジロ	ホオジロ			12		3	7	○	○	

表 5-2-1-10-29 (3/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (12月：続き)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察	
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺
45	(スズメ)	(ホオジロ)	カシラダカ		1			1		○
46			アオジ	4	31	2		1	○	○
47			クロジ							○
48	(キジ)	(キジ)	コジュケイ	7	8		1	2	○	○
49	(ハト)	(ハト)	ドバト			4			○	○
50	(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ	2	5				○	○
計	9目	22科	50種	19種	21種	19種	19種	22種	29種	47種
				127 個体	162 個体	73 個体	57 個体	84 個体		

- 注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表 5-2-1-10-29 (4/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (2月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察		
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺	
1	カモ	カモ	カルガモ			2					
2	ハト	ハト	キジバト	3					○	○	
3	タカ	ミサゴ	ミサゴ							○	
4		タカ	トビ	1	1	4	2	1	○	○	
5			ツミ								○
6			ノスリ				1	1			○
7	キツツキ	キツツキ	コゲラ	1	6				○	○	
8			アカゲラ							○	
9			アオゲラ					1			○
10	スズメ	モズ	モズ						○	○	
11		カラス	ハシボソガラス			1	1		○	○	
12			ハシブトガラス	1	2	2	3	1	○	○	
13		キクイタダキ	キクイタダキ		3						
14		シジュウカラ	ヤマガラ		10	1					○
15			ヒガラ			2					
16			シジュウカラ			8					○
17		ヒヨドリ	ヒヨドリ	3	10	10				○	○
18		ウグイス	ウグイス		3	2	1			○	○
19		エナガ	エナガ			2				○	○
20		メジロ	メジロ	1	11	2				○	○
21		ミソサザイ	ミソサザイ								○
22		ムクドリ	ムクドリ			12					○
23		ヒタキ	シロハラ	3	6					○	○
24			アカハラ		2						○
25			ツグミ				1			○	○
26			ルリビタキ	1	1						○
27			ジョウビタキ			1					
28		スズメ	スズメ			4	4			○	○
29		セキレイ	ハクセキレイ			4	1				○
30			セグロセキレイ			3					○
31			ビンズイ								
32		アトリ	カワラヒワ		1						○
33			マヒワ							○	○
34			ベニマシコ							○	○
35			ウソ			1					○
36			シメ							○	○
37	イカル		1								○
38	ホオジロ	ホオジロ		1					○	○	
39		アオジ	5	19	5				○	○	
40		クロジ									○
41	(キジ)	(キジ)	コジュケイ				1		○	○	
42	(ハト)	(ハト)	ドバト							○	
43	(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ							○	
計	6目	22科	43種	10種	18種	16種	9種	2種	20種	39種	
				20 個体	88 個体	56 個体	15 個体	2 個体			

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表 5-2-1-10-29 (5/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (4月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察		
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺	
1	キジ	キジ	キジ		1			1		○	
2	カモ	カモ	カルガモ							○	
3	ハト	ハト	キジバト			4		1		○	
4	カツオドリ	ウ	カワウ		1			6	○	○	
5	ペリカン	サギ	アオサギ							○	
6	タカ	タカ	トビ	1	1		1	2	○	○	
7			オオタカ		1						
8			ノスリ								○
9	フクロウ	フクロウ	フクロウ						○		
10	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ			1				○	
11	キツツキ	キツツキ	コゲラ	3	1		2	1	○	○	
12			アオゲラ	2		1	1	1	○	○	
13	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ							○	
14	スズメ	モズ	モズ						○		
15		カラス	ハシボソガラス	13		1					○
16			ハシブトガラス	2	2	4	2	3	○	○	
17		シジュウカラ	コガラ	1							
18			ヤマガラ	4	3		2	3	○	○	
19			ヒガラ		3					○	○
20			シジュウカラ	6	8	1	1	3	○	○	
21		ツバメ	ツバメ							○	
22		ヒヨドリ	ヒヨドリ	24	16	5	12	21	○	○	
23		ウグイス	ウグイス	20	28	2	3	9	○	○	
24			ヤブサメ	1	2						○
25		エナガ	エナガ	2	2		2		○	○	
26		メジロ	メジロ	20	15	1	3	4	○	○	
27		ムクドリ	ムクドリ								○
28		ヒタキ	シロハラ	3					1		○
29			アカハラ	1	1				1		○
30			ツグミ								○
31			ルリビタキ						1	○	
32			ジョウビタキ								
33		スズメ	スズメ			4	4		○	○	
34		セキレイ	キセキレイ			4					○
35	ハクセキレイ				2	1		○	○		
36	セグロセキレイ									○	
37	アトリ	カワラヒワ	2				1		○	○	
38		ベニマシコ	1						○	○	
39		ウン								○	
40		シメ			3					○	
41	ホオジロ	ホオジロ	3	8		2	3	○	○		
42		アオジ	6	6	1		1				
43	(キジ)	(キジ)	コジュケイ	7	15	1	3	14	○	○	
44	(ハト)	(ハト)	ドバト							○	
45	(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ	5	6	1	1	1	○	○	
計	11目	25科	45種	21種	19種	15種	16種	19種	27種	36種	
				127 個体	121 個体	33 個体	41 個体	77 個体			

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ドバト、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

表 5-2-1-10-29 (6/6) ルート・地点別確認個体数一覧 (5月)

番号	目名	科名	種名	ルートセンサス			定点		直接観察		
				R-1	R-2	R-3	P-1	P-2	実施 区域	周辺	
1	キジ	キジ	キジ						○		
2	カモ	カモ	カルガモ					1		○	
3	ハト	ハト	キジバト		1					○	
4	カツオドリ	ウ	カワウ				1				
5	ペリカン	サギ	ミゾゴイ						○		
6			アオサギ							○	
7	チドリ	カモメ	オオセグロカモメ							○	
8	タカ	タカ	トビ		1			2	○	○	
9			サシバ							○	○
10	フクロウ	フクロウ	フクロウ						○	○	
11	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ							○	
12	キツツキ	キツツキ	コゲラ	2	5	1	2	2	○	○	
13			アオゲラ	1						○	○
14	スズメ	カラス	ハシボソガラス			4				○	
15			ハシブトガラス	4	1	4	3	5	○	○	
16		シジュウカラ	ヤマガラ	1	4	1	1	4	○	○	
17			シジュウカラ	3	2				○	○	
18		ツバメ	ツバメ			1	2	8		○	
19		ヒヨドリ	ヒヨドリ	1	3	1	1	3	○	○	
20		ウグイス	ウグイス	11	10	3	3	3	○	○	
21			ヤブサメ							○	○
22		エナガ	エナガ					2	○	○	
23		ムシクイ	センダイムシクイ							○	
24		メジロ	メジロ	8	4	4	3	2	○	○	
25		ムクドリ	ムクドリ			5				○	
26		ヒタキ	シロハラ	1						○	○
27			アカハラ								○
28			キビタキ								○
29			オオルリ							○	○
30		スズメ	スズメ			9	4		○	○	
31		セキレイ	キセキレイ			1					
32			ハクセキレイ			1	1		○	○	
33			セグロセキレイ								○
34		アトリ	カワラヒワ			2	1		○	○	
35			シメ	1					○	○	
36		ホオジロ	ホオジロ	3	11	1	6	2	○	○	
37			アオジ				1				
38			クロジ	2							○
39		(キジ)	(キジ)	コジュケイ		3			2	○	○
40		(スズメ)	チメドリ	ガビチョウ			1				○
計		11目	25科	40種	12種	11種	15種	13種	12種	2種	14種
					38 個体	45 個体	39 個体	29 個体	36 個体		

注) 1. 分類群及び種名は「日本鳥類目録 改訂第7版」(平成24年、日本鳥学会)に準拠した。
 2. 外来種(コジュケイ、ガビチョウ)はリストの末尾に示し、目名、科名がリスト内で重複した際は括弧書きにして区別した。

c) 爬虫類

i 生息確認種

確認種は、表5-2-1-10-30に示すとおりである。なお、表中には、既存資料調査による確認種も記した。

現地調査における確認種は、合計2目6科8種が確認された。

実施区域内及びその周辺の草地や林道でトカゲ、カナヘビが確認された。実施区域の周辺の草地では、(シマヘビの成体1個体及び) マムシの幼体1個体が確認され、林道でシマヘビの脱皮殻及びアオダイショウ幼体の死骸が確認された。また、麓にある『横須賀しょうぶ園』の池でクサガメとアカミミガメが確認された。

表 5-2-1-10-30 爬虫類確認種

番号	目名	科名	種名	文献	調査時期				調査範囲			重要種		
					夏季	秋季	早春	春季	実施区域 ^{*4}				周辺	
					6月	10月	3月	5月	①	②	③			
1	カメ	イシガメ	クサガメ	●	○	○						○		
2			イシガメ	●									○	
3		ヌマガメ	アカミミガメ			○	○					○		
4	トカゲ	ヤモリ	ヤモリ	●										
5		トカゲ	トカゲ	●				○		○			○	
6		カナヘビ	カナヘビ	●	○	○	○	○	○	○		○		
7		ヘビ	タカチホヘビ	●										
8			シマヘビ	●		○							○	○
9			アオダイショウ ^{*1}	●									○	○
10			シロマダラ	●										
11			ヒバカリ	●										○
12			ヤマカガシ ^{*2}	●									○	○
13		クサリヘビ	マムシ	●	○							○	○	
合計	2目	7科	13種	12種	3種	4種	2種	2種	1種	2種	0種	7種	7種	

- 注) 1. アオダイショウは、鳥類4月調査において確認した。
 2. ヤマカガシは、昆虫類6月調査において確認した。
 3. 別項目調査中の確認種を含む。
 4. *実施区域 ①：廃棄物処理施設、②：宅地の造成、③：発生土処分場
 5. 分類群及び種名は「日本産野生生物目録 脊椎動物編」(平成5年、環境庁)に従った。

ii 確認状況

各種の確認状況は、以下に示すとおりである。

○クサガメ

夏季及び秋季に、実施区域の周辺の『横須賀しょうぶ園』の池で各1個体が確認された。

○アカミミガメ

秋季及び早春季に、実施区域の周辺の『横須賀しょうぶ園』の池で1～2個体が確認された。

○トカゲ

春季に、実施区域（宅地の造成）の林道で幼体2個体が確認された。

○カナヘビ

夏季に、実施区域内及びその周辺の樹林内で成体が確認された。

秋季に、実施区域内（宅地の造成）で幼体1個体が確認されたほか、実施区域の周辺で成体及び幼体が確認された。

早春季に、実施区域内（宅地の造成）で成体1個体が確認されたほか、実施区域の周辺で成体が確認された。

春季に、実施区域（宅地の造成）及びその周辺で成体が確認された。

○シマヘビ

秋季及び春季に、実施区域の周辺で脱皮殻と成体が確認された。

○ヤマカガシ

昆虫類6月調査において、実施区域の周辺で死骸が確認された。

○アオダイショウ

鳥類4月調査において、実施区域の周辺で幼体の死骸が確認された。

○マムシ

夏季に、実施区域の周辺の草地で幼体1個体が確認された。

d) 両生類

i 生息確認種

確認種は、表5-2-1-10-31に示すとおりである。なお、表中には、既存資料調査による確認種も記した。

現地調査における確認種は、合計1目3科4種が確認された。

両生類は、実施区域内（宅地の造成）の廃棄物処理施設北東側の窪地付近からアマガエルの鳴き声が確認された。実施区域内（発生土処分場）の草地では、ニホンアカガエルの幼体が1個体確認されたほか、シュレーゲルアオガエルの鳴き声も確認された。

実施区域の周辺では、実施区域内（発生土処分場）の東側に位置する池でヤマアカガエルとシュレーゲルアオガエルが確認された。また、南西側の産業廃棄物処分場の上流側の沢や多自然型水路等でヤマアカガエルの卵塊が確認された。

表5-2-1-10-31 両生類確認種

番号	目	科	種名	文献	調査時期				調査範囲			重要種		
					夏季	秋季	早春	春季	実施区域				周辺	
					6月	10月	3月	5月	St.1	St.2	St.3			
1	サンショウウオ	サンショウウオ	トウキョウサンショウウオ	●									○	
2		イモリ	イモリ	●									○	
3	カエル	ヒキガエル	アズマヒキガエル	●									○	
4		アマガエル	アマガエル ^{*1}	●			○		○					
5		アカガエル	ニホンアカガエル		●	○	○					○	○	○
6			ヤマアカガエル		●	○	○	○					○	
7			トノサマガエル		●									○
8			ウシガエル		●									
9			ツチガエル		●									
10		アオガエル	シュレーゲルアオガエル		●	○			○			○	○	○
合計	2目	6科	10種	10種	3種	2種	2種	1種	1種	0種	2種	3種	7種	
											4種			

注) 1. アマガエルは、昆虫類4月調査において確認した。

2. 別項目調査中の確認種を含む

3. 実施区域 ①：廃棄物処理施設、②：宅地の造成、③：発生土処分場

4. 分類群及び種名は「日本産野生生物目録 脊椎動物編」（平成5年、環境庁）に従った。

ii 確認状況

各種の確認状況は、以下に示すとおりである。

○アマガエル

早春季及び昆虫類4月調査において、実施区域（宅地の造成）の林縁で鳴き声が確認された。

○ニホンアカガエル

夏季に、実施区域内（発生土処分場）の草地で幼体1個体が確認された。

秋季に、実施区域の周辺の林道沿いで成体1個体が確認された。

○ヤマアカガエル

夏季に、実施区域の周辺の池で幼生1個体が確認された。

秋季に、実施区域の周辺の林道沿いで成体2個体が確認された。

早春季に、実施区域の周辺の池、水溜り、溝、用水路で卵塊が確認された。

○シュレーゲルアオガエル

夏季及び春季に、実施区域の周辺の池などで鳴き声が確認された。

春季に、実施区域内（発生土処分場）及び周辺域の池で鳴き声が確認された。

e) 昆虫類

i 生息確認種

確認種は、合計19目218科924種であった（表5-2-1-10-32）。目別では、コウチュウ目47科322種、チョウ目35科140種、カメムシ目32科139種、ハエ目38科107種、ハチ目21科101種等が多かった。確認種の多くは分布域の広い種で、神奈川県から低山地に普通に生息する種が多かった。

季節別では、6月に、ウラナミアカシジミ、アカシジミ、ゲンジボタル等が確認された。8月に、セミ類、クワガタムシ類、カミキリムシ類等の樹林に生息する種を中心に、トンボ類やバッタ類、コガネムシ類などの草地に生息する種も確認された。10月に、カメムシ類、バッタ類等が多く確認された。4月に、ジョウカイボン類、ハムシ類、ハバチ類等や成虫で越冬するツチイナゴ、キタキチョウ等が確認された。5月に、ハナムグリ類、ハナアブ類、ハナバチ類等の訪花性の種が多く確認された。

表5-2-1-10-32 昆虫類分類群別の確認科数・種数（現地調査）

目名	調査時期						合計	
	初夏	夏	秋	早春	春	初夏	科数	種数
	6月	8月	10月	4月	5月	6月		
トビムシ		1	5		3		5	5
イシノミ		1	1		1		1	1
カゲロウ						1	1	1
トンボ	7	12	5		1	5	7	21
カワゲラ				2	1		2	2
ゴキブリ	4	3	3	1	2	1	2	5
カマキリ	1	2	4				1	4
シロアリ					1		1	1
バッタ	19	30	39	3	9	13	13	52
ナナフシ	1	2			1	1	1	2
ハサミムシ	2	1	1	3	2	1	1	3
カメムシ	40	65	66	14	29	43	32	139
アミメカゲロウ	4	6	3	2	1	5	6	13
コウチュウ	130 ^{注)}	95	66	35	99	98	47	322
ハチ	45	44	40	29	35	36	21	101
シリアゲムシ	1	1	1	1	1	1	1	1
ハエ	41	32	31	31	43	31	38	107
トビケラ		4	1	1			3	4
チョウ	51	48	43	24	37	58	35	140
19目	346種 ^{注)}	347種	309種	147種	266種	294種	218科	924種

注) ホタル確認調査結果のゲンジボタルを含める。

ii 確認状況

現地調査により確認された種の目別の生息確認状況は、以下に示すとおりである。

○トビムシ目

5科5種が確認された。

○イシノミ目

1科1種が確認された。実施区域内及びその周辺の樹林林床での確認例が多かった。

○カゲロウ目

フタスジモンカゲロウの1科1種が確認された。ベントス調査でも確認されており、実施区域の周辺の沢沿いで多数確認された。

○トンボ目

7科21種が確認された。確認した種はトンボ科が多く、幼虫が止水性のシオカラトンボ、ウスバキトンボ、アキアカネ等が広範囲で確認された。幼虫が流水性のアサヒナカワトンボ、ヤマサナエ、ダビドサナエ、ミルンヤンマ等が沢沿いで確認された。

○カワゲラ目

2科2種が確認された。実施区域（宅地の造成）及び（発生土処分場）の林内から林縁にかけて確認された。

○ゴキブリ目

2科5種が確認された。実施区域内及びその周辺で主に林床の落葉下で確認された。

○カマキリ目

1科4種が確認された。草地を中心として、オオカマキリが比較的多く確認された。

○シロアリ目

ヤマトシロアリの1科1種が確認された。実施区域の周辺の石の下に生息していた。

○バッタ目

13科52種が確認された。草地では、エンマコオロギ、カンタン等のコオロギ類、ツコムシ、ヒメギス等のキリギリス類、ショウリョウバッタ、ヒナバッタ、ツチイナゴ等のバッタ類が確認された。樹林では、コロギス、クチキコオロギ、ヤブキリ、タンザワフキバッタ等が確認され、また、市街地の樹木等にはアオマツムシやカネタタキなどが生息していた。

○ナナフシ目

1科2種が確認された。主に実施区域内及びその周辺の落葉樹広葉樹葉上で確認

された。

○ハサミムシ目

1科3種が確認された。ハマベハサミムシとヒゲジロハサミムシは倒木や石の下、キアシハサミムシは、林縁の葉上で確認された。

○カメムシ目

32科139種が確認された。確認種は草地性の種が多く、ヨコバイ類、ハマベアワフキ、ナガカメムシ類、ヘリカメムシ類、マルカメムシ等が実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）の草地で確認された。樹林性の種は、セミ類、アカスジキンカメムシ、ツノカメムシ類等が確認されたほか、林床では、ナガカメムシ類やツチカメムシ類が確認された。また、実施区域の周辺の沢や池等では、アメンボ類が生息していた。

○アミメカゲロウ目

6科13種が確認された。実施区域内及びその周辺の林縁での確認が多かったが、ウスバカゲロウは林内で、ヤマトクロスジヘビトンボは沢沿いで確認された。

○コウチュウ目

目別では最も多い47科322種が確認され、樹林から草地、市街地に至る各環境において多くの種が生息していた。草地では、アシミゾナガゴミムシ、セアカヒラタゴミムシ等のゴミムシ類、マメコガネ、コメツキムシ類、イタドリハムシ、クロトゲハムシ等のハムシ類が確認された。林縁では、ハンミョウ類、ジョウカイボン類、ラミーカミキリやヒロオビミドリトラカミキリ等のカミキリムシ類のほか、ミズキ等の花にハナムグリ類、カミキリモドキ類、クロフナガタハナノミ、トラカミキリ類等が訪花していた。樹林では、オオヒラタシデムシ、ヤマトタマムシやナガタマムシ属等のタマムシ類、ベニヘリテントウ、オバボタル、ミヤマカミキリ、ゾウムシ類等が確認された。また、水域に生息する種であるゲンゴロウ類やガムシ類が、実施区域の周辺の沢等で確認された。

○ハチ目

21科101種が確認された。確認種は草地性の種が多く、ハバチ類やツチバチ類、トビイロケアリ、アナバチ類等が草地や林縁で確認されたほか、ヒゲナガハナバチ類、ミツバチ類等が各種の花に訪花していた。樹林性の種では、スズメバチ類、コマルハナバチ等が確認された。

○シリアゲムシ目

ヤマトシリアゲの1科1種が確認された。林縁を中心に確認され、個体数は多かった。

○ハエ目

38科107種が確認された。確認種は、花に集まる訪花性の種が多く、ナミハナアブ、アシブトハナアブ等のハナアブ類や、ビロウドツリアブ、ツマグロキン

バエ等が主に草地や林縁で確認された。また、吸血性のアブ類、他の昆虫類を捕らえるムシヒキアブ等が確認されたほか、ガガンボ類、ミズアブ類、ヒゲナガヤチバエ等の水辺を好む種も実施区域の周辺の沢沿いや実施区域内(発生土処分場)のぬかるみ付近で確認された。

○トビケラ目

3科4種が確認された。確認種の多くは、幼虫が流水性の種で、実施区域内(発生土処分場)のライトトラップでの確認が多かった。

○チョウ目

35科140種が確認された。チョウ類は8科45種が確認され、草地性のイチモンジセセリ、モンキチョウ、ベニシジミ、ツマグロヒョウモン、ヒメウラナミジャノメ等が実施区域内(宅地の造成・発生土処分場)の草地や林縁を中心に確認された。樹林性の種は、オナガアゲハ、モンキアゲハ、アカシジミ、ムラサキシジミ、コジャノメ、サトキマダラヒカゲ等が確認された。ガ類は27科95種が確認され、草地ではシロオビノメイガ、マエアカスカシノメイガ、アカマダラメイガ等のメイガ類やカノコガが確認された。林縁では、イヌビワハマキモドキ、ヒロオビトンボエダシャク、ホタルガのほか、オビガ、マイマイガ、クワゴマダラヒトリ、アヤモクメキリガ等の幼虫も確認された。樹林内では、キガシラオオナミシャク、アカエグリバ、オオシラホシアツバ等が確認された。

iii ライトトラップ調査

確認状況の概要は、表5-2-1-10-33に示すとおりである。

調査期間を通じて、7目45科85種447個体が確認された。目別にみると、コウチュウ目が最も多く11科30種、次いでハエ目の10科16種であった。ハネカクシ類等のコウチュウ目のほか、ユスリカ類等が確認された。

地点別の確認種数は、表5-2-1-10-34に示すとおり、T-1が21科31種、T-3が36科64種であった。

表5-2-1-10-33 ライトトラップ調査による確認科数・種数(目別)

目名	科数	種数	主な確認種
バッタ	4	4	コロギス、タンボコオロギ、カネタタキ
カメムシ	8	12	アオバハゴロモ、ヒゲナガカメムシ、ヒメホシカメムシ
コウチュウ	11	30	ミズギワゴミムシ科の数種、ハネカクシ科の数種、タテスジナガドロムシ
ハチ	2	6	キイロシリアゲアリ、アズマオオズアリ
ハエ	10	16	ガガンボ科の一種、ユスリカ科の数種、ショウジョウバエ属の一種
トビケラ	2	3	ウルマーシマトビケラ
チョウ	8	14	カレハチビマルハキバガ、アカマダラメイガ、シバツトガ、スジキリヨトウ
合計7目45科85種447個体			

表5-2-1-10-34 ライトトラップ調査による確認科数・種数及び個体数(地点別)

目名	T-1			T-3		
	科数	種数	個体数	科数	種数	個体数
バッタ	1	1	1	3	3	3
カメムシ	2	2	4	8	11	23
コウチュウ	5	8	8	10	25	152
ハチ	1	4	20	2	2	2
ハエ	9	11	58	5	10	131
トビケラ				2	3	8
チョウ	3	5	5	6	10	32
合計	21	31	96	36	64	351

iv ベイトトラップ調査

確認状況の概要は、表5-2-1-10-35に示すとおりである。

調査期間を通じて、10目45科94種30,607個体が確認された。目別にみると、コウチュウ目が最も多く13科37種、次いでハチ目の3科17種等であった。アオオサムシ、オオヒラタシデムシ、ハネカクシ類等のコウチュウ類を中心に、その他、アズマオオズアリ、アメイロアリ等のアリ類が多く確認された。

地点別の確認種数は、表5-2-1-10-36に示すとおり、T-2が最も多い32科53種、次いでT-1が29科50種であった。

表5-2-1-10-35 ベイトトラップ調査による確認科数・種数(目別)

目名	科数	種数	主な確認種
トビムシ	5	5	ツチトビムシ科の一種、アヤトビムシ科の一種
イシノミ	1	1	イシノミ科の一種
ゴキブリ	1	3	モリチャバネゴキブリ、キスジゴキブリ
バッタ	5	12	シバズ、エンマコオロギ、クマスズムシ
ハサミムシ	1	1	ヒゲジロハサミムシ
カメムシ	4	5	オオモンシロナガカメムシ、ヨコヅナツチカメムシ、ツチカメムシ
コウチュウ	13	37	アオオサムシ、ミイデラゴミムシ、オオヒラタシデムシ、ハマベオオヒメサビキコリ
ハチ	3	17	アズマオオズアリ、トビイロシワアリ、アメイロアリ
ハエ	11	11	ヒラヤマシマバエ、ショウジョウバエ属の数種
チョウ	1	1	ヤガ科の一種
合計10目45科94種30,607個体			

表5-2-1-10-36 ベイトトラップ調査による確認科数・種数及び個体数(地点別)

目名	T-1			T-2			T-3		
	科数	種数	個体数	科数	種数	個体数	科数	種数	個体数
トビムシ	5	5	45	4	4	36	3	3	40
イシノミ	1	1	2	1	1	1			
ゴキブリ	1	2	52	1	2	240	1	3	552
バッタ	3	4	6	3	6	27	5	10	75
ハサミムシ	1	1	1	1	1	3			
カメムシ	2	2	15	3	3	11	1	1	1
コウチュウ	8	17	46	9	17	332	5	11	53
ハチ	2	12	9,683	2	11	3,156	1	8	16,145
ハエ	5	5	18	8	8	26	6	6	13
チョウ	1	1	28						
合計	29	50	9,896	32	53	3,832	22	42	16,879

イ 重要な種、個体群及びその生息地

ア) 調査事項

調査地域に生息する重要な動物の確認地点、個体数、行動等とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 動物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果を踏まえ、学術上または希少性の観点から、表5-2-1-10-37に示す選定基準に該当するものを、重要な動物として抽出した。

表5-2-1-10-37 重要な動物の選定基準

番号	選定基準	カテゴリー
①	「文化財保護法」(昭和25年、法律第214号)	天然記念物 特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年、法律第75号)	国内希少野生動植物種 国際希少野生動植物種 緊急指定種
③	「環境省 第4次レッドリスト」(平成24年、環境省)に記載されている種	絶滅(EX) 野生絶滅(EW) 絶滅危惧種ⅠA類(CR) 絶滅危惧種ⅠB類(EN) 絶滅危惧種Ⅱ類(VU) 準絶滅危惧(NT) 情報不足(DD) 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)に記載されている種	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足 不明種 絶滅のおそれのある地域個体群

エ) 調査結果

a 哺乳類

重要な哺乳類として、1科1種が確認された。抽出結果は表5-2-1-10-38に、確認状況及び一般生態は、表5-2-1-10-39に示すとおりである。また、確認位置は、図5-2-1-10-13(1/2)～(2/2)に示すとおりである。

表5-2-1-10-38 重要な哺乳類一覧

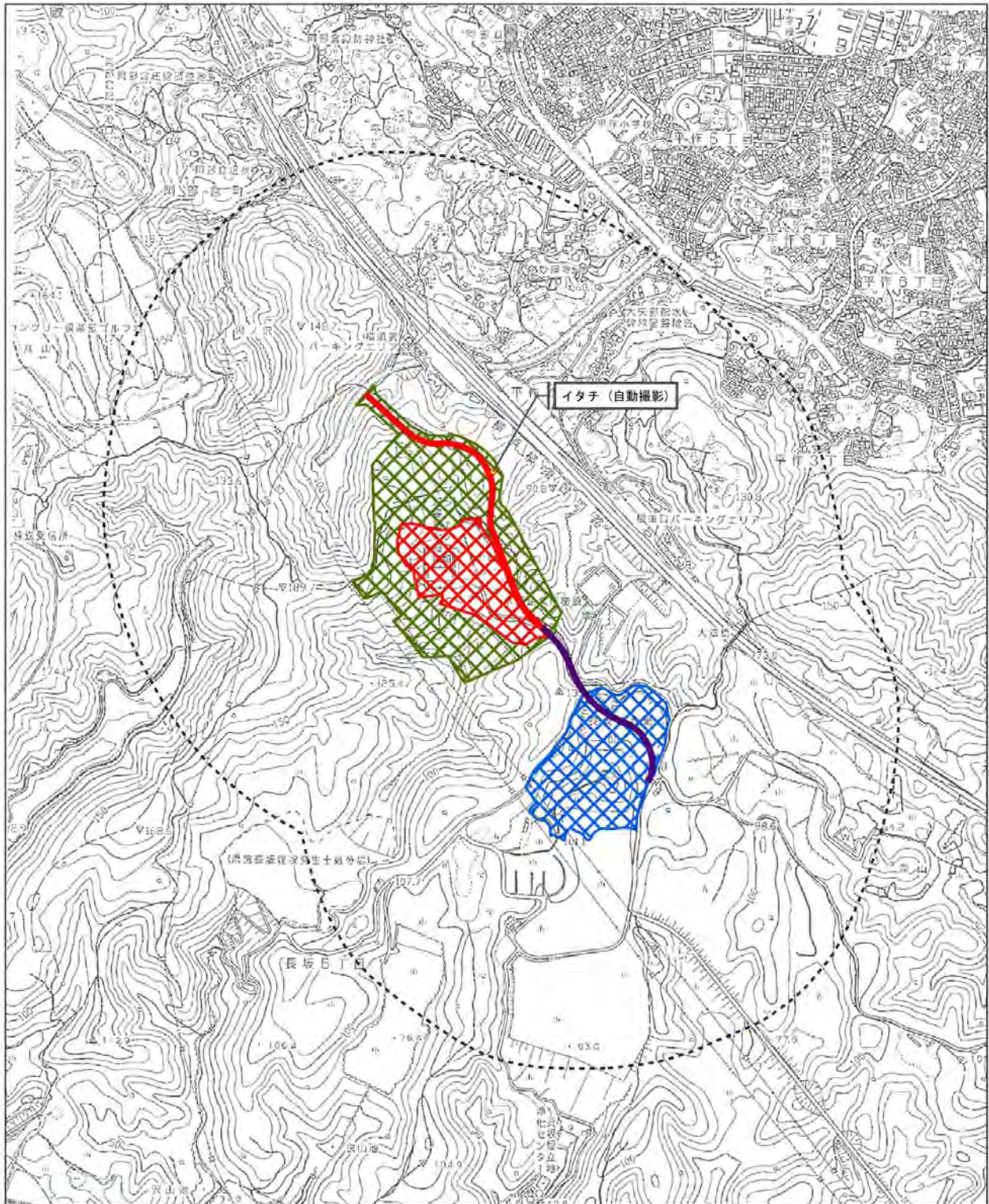
番号	科名	和名	選定基準			
			①	②	③	④
1	イタチ	イタチ				準絶滅危惧
合計	1科	1種	0種	0種	0種	1種

注) 選定基準は、表5-2-1-10-37に対応する。

表5-2-1-10-39 重要な哺乳類の確認状況及び一般生態

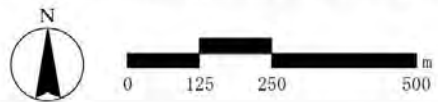
種名	項目	内容
イタチ	確認状況	夏季に、実施区域内（新規搬入道路）に設置した自動撮影装置で1個体が撮影された。 冬季に、実施区域の周辺で糞が確認された。
	一般生態	水辺環境を好み、水田・河川敷などを主な生息地とする。ネズミ・鳥・カエルなどを食べるほか、水にもぐつての捕食も行う。 本州～九州にかけて分布する。平野部から山麓まで県内全域に広く分布するが、密度は低いと考えられる。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）



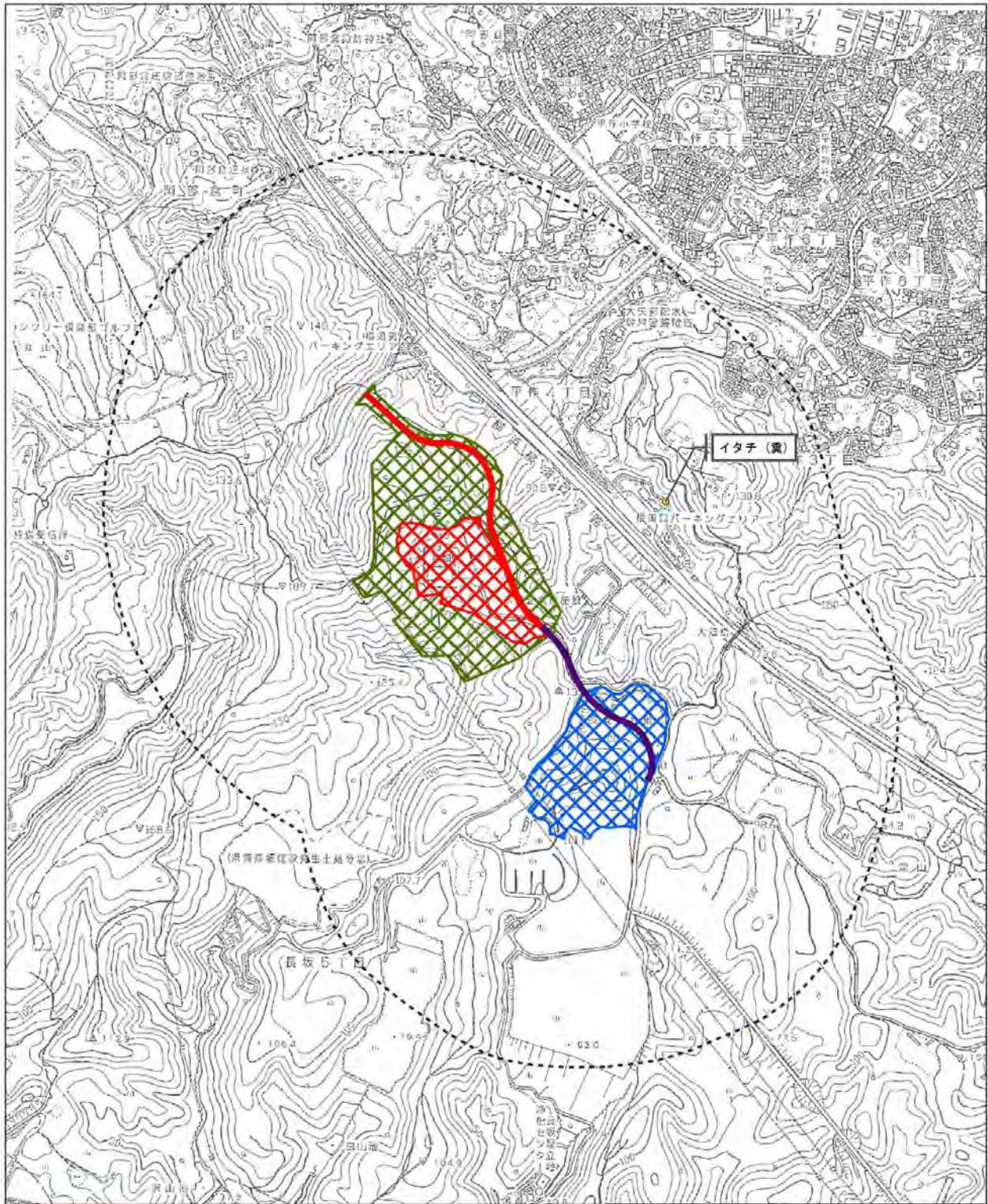
- 凡例**
- : 廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む)
 - : 宅地の造成
(残置森林 (最大範囲))
 - : 発生土処分場
 - : 調査範囲
 - : 新設搬入道路
 - : 既設改修道路

○ 重要な種の確認地点
 ※ ()内の数字は確認個体数を示す。



注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

図 5-2-1-10-13 (1/2)
 重要な哺乳類の確認地点 (夏季)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> 重要な種の確認地点 <p>※ () 内の数字は確認個体数を示す。</p> <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
--	---

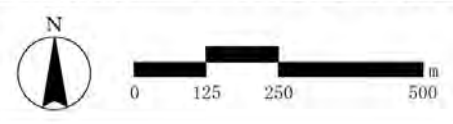


図 5-2-1-10-13 (2/2)
重要な哺乳類の確認地点 (冬季)

b 鳥類

重要な鳥類は、表5-2-1-10-37 (P. 428) に示す選定基準にしたがって抽出した。

抽出結果は、表 5-2-1-10-40 に、各種の確認状況及び一般生態は、表 5-2-1-10-41(1/9)～(9/9) (P. 433～441) に示すとおりである。また、確認地点位置は、図 5-2-1-10-14 (1/6)～(6/6) (P. 442～447) に示すとおりである。重要な鳥類として、21科32種が抽出された。

表5-2-1-10-40 重要な鳥類一覧

番号	科名	種名	選定基準				
			①	②	③	④	
						繁殖期	非繁殖期
1	カモ	オシドリ			DD	希少種	減少種
2	ハト	アオバト				注目種	注目種
3	サギ	ミゾゴイ			VU	絶滅危惧Ⅰ類	
4	アマツバメ	ヒメアマツバメ				減少種	—
5	チドリ	コチドリ				注目種	—
6	ミサゴ	ミサゴ			NT	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧
7	タカ	ハチクマ				絶滅危惧Ⅰ類	—
8		ツミ				絶滅危惧Ⅱ類	希少種
9		ハイタカ			NT	情報不足	希少種
10		オオタカ		国内	NT	絶滅危惧Ⅱ類	希少種
11		サシバ			VU	絶滅危惧Ⅰ類	—
12		ノスリ				絶滅危惧Ⅱ類	希少種
13	フクロウ	フクロウ				準絶滅危惧	—
14	ハヤブサ	ハヤブサ		国内	VU	絶滅危惧Ⅰ類	希少種
15	サンショウクイ	サンショウクイ			VU	絶滅危惧Ⅱ類	—
16	モズ	モズ				減少種	—
17	キクイタダキ	キクイタダキ				希少種	—
18	シジュウカラ	コガラ				絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧
19	ツバメ	ツバメ				減少種	—
20	ウグイス	ヤブサメ				準絶滅危惧	—
21	ムシクイ	センダイムシクイ				準絶滅危惧	—
22	セッカ	セッカ				減少種	減少種
23	ヒタキ	アカハラ				減少種	—
24		ルリビタキ				絶滅危惧Ⅱ類	—
25		キビタキ				減少種	—
26		オオルリ				準絶滅危惧	—
27	セキレイ	キセキレイ				減少種	—
28		セグロセキレイ				減少種	—
29		ビンズイ				絶滅危惧Ⅱ類	—
30	アトリ	カワラヒワ				減少種	—
31	ホオジロ	アオジ				絶滅危惧Ⅱ類	—
32		クロジ				絶滅危惧Ⅰ類	減少種
合計	21科	32種	0種	2種	8種	32種	11種
						32種	

注) 1. 重要な種の選定基準は、表5-2-1-10-37(P. 428)に示すとおりである。

2. 「国内」は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年、法律第75号)に基づく国内希少野生動植物種である。

表5-2-1-10-41 (1/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
オシドリ	確認状況	両生・爬虫類早春季調査において、実施区域の周辺『横須賀しょうぶ園』の池で1個体が確認された。
	一般生態	雑食性で水生昆虫や甲殻類、植物の種子などを食べ、特に秋から冬にはドングリを好んで食べる。繁殖は、水辺の樹林で行われ、繁殖期は4～7月。巣は樹洞や巣箱を利用し、抱卵、育雛は雌が単独で行う。 国内では、東北地方以北では夏鳥、関東地方以南では漂鳥、あるいは冬鳥である。 県内では、県北部や西部を中心として全域で冬鳥、または留鳥。
アオバト	確認状況	6月調査に、実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺を飛翔する3個体が確認された。 10月調査に、実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	夏鳥として丘陵地から山地の森林に渡来し、一部は越冬する。主に樹上で樹木の芽や実などを採食する。大磯町照ヶ崎では群れで海水を飲みに来る習性が知られており、北海道や静岡でも報告されている。 国内では、北海道では夏鳥、本州以南では留鳥または漂鳥として、北部のものは冬季には南へ移動する。県内では、丘陵地から山地の森林に夏鳥として渡来するが、一部は越冬する。
ミゾゴイ	確認状況	5月の夜間調査で、実施区域内（宅地の造成）で鳴き声の確認された。
	一般生態	夏鳥として、丘陵地から低山地のよく茂った広葉樹林に渡来し、4～7月に枝上に営巣する。沢沿いでサワガニ・カエル類などを好んで捕食する。 国内では、本州から九州で繁殖する。 県内では、夏鳥として渡来するが、繁殖の確実な記録はまれであり、春の渡りの季節の記録がほとんどである。
ヒメアマツバメ	確認状況	12月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	市街地とその周辺に生息し、上空を飛び回りながら昆虫類を捕らえる。巣はコシアカツバメやイワツバメなどの古巣を利用することが多く、巣の入り口には羽毛を貼りつけるのが特徴である。 国内では、関東以西の太平洋岸の地域に分布する。 県内では、留鳥として平野部に局地的に分布する。

表 5-2-1-10-41 (2/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
コチドリ	確認状況	6月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	主に夏鳥として渡来し、河川中流から下流にかけての河川敷に生息する。植物のまばらな砂礫地に好んで営巣するが、造成地や駐車場などを代替環境として利用することもある。 国内では、九州以北に夏鳥として渡来する。関東地方以西では少数が越冬する。 県内では、全域に夏鳥として渡来する。少数は冬期もみられる。
ミサゴ	確認状況	2月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が3例確認された。胸の模様などの特徴から少なくとも2個体が確認された。
	一般生態	大きな川や湖に生息し、空中高くからダイビングして魚を捕らえる。繁殖期には断崖の岩棚や、大木の上に巣を作る。 全国の沿岸部で局地的に繁殖し、冬期には漂行する個体も多い。 県内では、主に冬鳥として渡来し、沿岸部から相模川などの大きな河川や丹沢湖などの湖沼に生息する。
ハチクマ	確認状況	6月に、実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺を北東～東方向へ飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	夏鳥として5月頃に丘陵地や低山地の森林に渡来し、9月頃に渡去する。地上でクロスズメバチの巣を掘り出して幼虫や蛹を食べる特異な食性を持ち、生息痕跡としてスズメバチ類の巣盤が発見される。高木の枝上に営巣する。 国内では、北海道から九州で繁殖する。 県内では、ほぼ確実な繁殖例は県西部の1例だけであるが、県北部から丹沢山麓、大磯丘陵などで繁殖期の観察例があり、繁殖の可能性はある。
ツミ	確認状況	12月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が、2例が確認された。 2月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	夏鳥または留鳥として生息し、小鳥類を捕らえる。山地の樹林に生息する一方、都市公園や人家の庭などの小規模の都市緑地でも繁殖する。 全国で繁殖し、西南日本では越冬する個体もある。また、南西諸島には別亜種が周年生息する。 県内では一年を通して観察され、横浜市西部から小田急線沿線の地域での繁殖例が多い。

注) ミサゴ、ハチクマ、ツミについては、繁殖に係る行動は確認されなかった。

表 5-2-1-10-41 (3/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ハイタカ	確認状況	12月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が2例確認された。
	一般生態	留鳥または夏鳥として、山地から丘陵地の森林に生息する。林内を飛翔して主に小鳥類を捕らえる。 国内では、四国以北で繁殖し、冬鳥として国外から渡来する個体も多い。 県内では主に冬鳥として渡来し、丘陵地から農耕地にかけて観察される。確実な繁殖記録としては、横浜市緑区の例があるだけである。
オオタカ	確認状況	10月に、実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺の上空を飛翔する1個体が2例確認された。 12月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が2例確認された。 4月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	留鳥として山麓から丘陵地の森林に生息し、主に中・小型の鳥類をとらえる。スギ・マツ類などの針葉樹の高木に営巣することが多い。 国内では、北海道と本州で繁殖し、冬季は漂行する個体も多い。 県内では、平地から山麓にかけて留鳥として生息する。
サシバ	確認状況	5月に、実施区域(宅地の造成)と調査範囲を通過する1個体が2例確認された。
	一般生態	夏鳥として4月頃渡来し、丘陵地や低山地に生息する。特に谷戸地形を好み、ある程度以上の面積を持つ水田と樹林地がセットで存在することが生息のための条件となっている。高木の梢などを見張り場にしてエサを探し、水辺でカエルやヘビをよく捕らえる。スギ林などの高木の樹上に営巣する。 国内では、夏鳥として渡来し、東北地方から九州にかけて繁殖する。南西諸島では多くの個体が越冬する。 県内では、県西部の丘陵地などわずかな地域で繁殖しているのみである。秋の渡りの季節には横須賀市武山などで多数の個体が西に渡るのが観察される。

注) ハイタカ、オオタカ、サシバについては、繁殖に係る行動は確認されなかった。

表 5-2-1-10-41 (4/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ノスリ	確認状況	10月に、実施区域内（宅地の造成、発生土処分場）と実施区域の周辺を飛翔する1～2個体が4例確認された。 12月に、実施区域内（宅地の造成）と実施区域の周辺を飛翔する1～2個体が10例確認された。 2月に、実施区域内（宅地の造成）、実施区域の周辺及びその周囲を飛翔する1～2個体が5例確認された。 4月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が2例確認された。
	一般生態	留鳥または漂鳥。森林で繁殖する。非繁殖期には、川原、農耕地のような草原的環境にも生息する。 国内では、北海道から四国で繁殖し、非繁殖期には全国で見られる。小笠原諸島に別亜種が周年生息する。 県内では、繁殖期には丹沢山麓から大磯丘陵にかけて、局地的に生息し、非繁殖期には全域の丘陵地から平地で見られる。
フクロウ	確認状況	10月の夜間調査で、実施区域内（宅地の造成）の林内から鳴き声が確認された。 4月の夜間調査で、実施区域内（宅地の造成）と実施区域の周辺の林内から鳴き声が確認されたほか、実施区域内（宅地の造成）で飛翔が確認された。 5月の夜間調査で、実施区域内（宅地の造成）及び実施区域の周辺の林内から鳴き声が確認された。
	一般生態	留鳥として平地から低山の大きな木のある林や社寺林などに生息する。夜行性で日中は薄暗い林などで休んでいる。夕方から活動を始め、樹林や農耕地などでネズミ類や鳥類、爬虫類、両生類などを捕食する。主に大木の樹洞に営巣するが、土の壁の横穴や人家の屋根裏、巣箱や人工構造物などもよく利用する。 国内では、留鳥として九州以北の平地から低山の林に生息する。 県内では、平地から低山の大きな木のある林に生息する。
ハヤブサ	確認状況	6月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。 4月に、実施区域の周辺を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	断崖のある海岸部で留鳥もしくは冬鳥として生息する。冬季には沿岸部や内陸部でも広くみられる。高速で飛翔し、空中で鳥類を捕食する。近年は都市部のビルや橋での繁殖例も散見される。 国内では、北海道～九州で繁殖し、冬期は沿岸部で広くみられる。 県内では主に冬鳥として渡来し、沿岸部や大河川沿いに観察されるが、内陸部に飛来することもある。

注) ノスリ、ハヤブサについては、繁殖に係る行動は確認されなかった。

表5-2-1-10-41 (5/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
サンショウクイ	確認状況	5月に、実施区域内（宅地の造成）を飛翔する1個体が確認された。
	一般生態	夏鳥として渡来し、明るい落葉広葉樹林に生息する。樹冠近くの枝にとまり、飛翔昆虫などを捕らえる。高木の枝先に椀型の巣を作る。 国内では、亜種サンショウクイが夏鳥として、本州から九州に生息する。 県内では、県北部、県西部、県中部の丘陵地に夏鳥として渡来する。
モズ	確認状況	10月に、実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺の樹上や開けた場所で1～2個体が11例確認された。 12月に、実施区域内（宅地の造成）及び実施区域の周辺の林縁や開けた場所で1個体が4例確認された。 2月に、実施区域内（宅地の造成）及び実施区域の周辺の林縁や樹上で1個体が2例確認された。 4月に、実施区域内（宅地の造成）で1個体が確認された。
	一般生態	低地の林、河原、農耕地、公園などで単独で生活する。昆虫類をはじめとした無脊椎動物や小型哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類などを食べ、はやにえを作る習性がある。ほぼ全国で繁殖し、積雪地の個体は冬期に暖地へ移動する。県内でも全域で見られるが、山間部での観察が比較的少ない。
クイタダキ	確認状況	2月に、実施区域内（発生土処分場）の樹上で3個体が確認された。
	一般生態	冬鳥として主に山地に渡来する。平地の林や公園などで見られることもある。 国内では、本州中部以北の山地で繁殖するほか、冬鳥として全国に渡来する。 県内では、丹沢山地で繁殖例がある。主に冬鳥として渡来し、平地の林や市街地の公園等でもみられることがある。非繁殖期に、カラ類と混群を形成する。
コガラ	確認状況	4月に、実施区域内(宅地の造成)でさえずりが確認された。
	一般生態	留鳥として山地の落葉樹林に生息する。非繁殖期には少数が平地でもみられることがある。他のカラ類と混群を作って移動していることが多い。 国内では、留鳥として九州以北に生息し、冬期は低山帯で漂行していることがある。 県内では、おもに県西部の山地に生息し、繁殖も確認されている。冬期は低山の雑木林などでもみられる。

注) 表中の確認個体数は、のべ数である。

表5-2-1-10-41 (6/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ツバメ	確認状況	6月に、実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）と実施区域の周辺で1～2個体が4例確認された。 4月に、実施区域内（宅地の造成）で1個体が確認された。 5月に、調査範囲上空を飛行する1～8個体が4例確認された。
	一般生態	繁殖は人間の生活と密接に結びつき、人間が出入りする建物の軒下に、泥や草を唾液で固めた椀形の巣を作る。飛びながら飛行昆虫を捕らえる。 国内では、九州以北に夏鳥として渡来し、西日本では越冬する個体も多い。県内では全域の集落、都市に夏鳥として渡来するが、海岸沿いの地域や県央の一部では少数が越冬する。
ヤブサメ	確認状況	6月に、実施区域の周辺のハイキングコースの斜面林の林内で2個体が確認された。 4月に、実施区域の周辺の樹林内でさえずりが確認された。 5月に、実施区域の周辺でさえずりが確認された。
	一般生態	夏鳥として山地から丘陵地の下生えの茂った暗い林内に生息し、林床の湿ったところに多くみられる。林床の地上に営巣する。 国内では、夏鳥として屋久島以北に渡来する。県内でも、夏鳥として山地から丘陵地にかけて観察される。
センダイムシクイ	確認状況	5月に、実施区域の周辺の谷沿いの斜面からさえずりが確認された。
	一般生態	夏鳥として、丘陵地から山地の林に渡来する。昆虫類やクモ類を捕食する。渡りの季節には、都市公園や街路樹などでもみられる。 国内では、夏鳥として全国に渡来する。 県内でも、夏鳥として丘陵地から山地の林に渡来する。
セッカ	確認状況	12月に、実施区域の周辺の草地で1個体が2例確認された。 5月に、実施区域の周辺の草地で1個体のさえずりが確認された。
	一般生態	留鳥として河原や水田周辺の草原に生息する。草の間や地上で主に昆虫類を捕食する。草の茎や葉をクモの糸で縫い合わせて巣をつくる。 国内では、本州以南の平地から山地の草原、ヨシ原等で繁殖し、多雪地の個体は冬期に南下する。 県内では、留鳥として平地の全域でみられる。

表5-2-1-10-41 (7/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
アカハラ	確認状況	12月に、実施区域内（宅地の造成）の樹林内で1個体、実施区域の周辺の草地や林縁で2個体が確認された。 2月に、実施区域の周辺で2個体が確認された。 4月に、実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）と実施区域の周辺で3個体が確認された。 5月に、実施区域の周辺で1個体が確認された。
	一般生態	林内や林縁の地上部で落葉をはねのけながら、ミミズなどを捕って食べる。 国内では本州中部以北で繁殖し、非繁殖期にはおもに関東以南で観察される。 県内では、繁殖期は県西部の山地の落葉広葉樹林で少数がみられ、非繁殖期には平野部の広い範囲で観察される。
ルリビタキ	確認状況	12月に、実施区域内（宅地の造成）の樹上で1個体が確認された。実施区域の周辺では、林縁で1個体が確認された。 2月に、実施区域内（宅地の造成）の樹上で1個体が確認された。実施区域の周辺の林縁では、2個体が確認された。 4月に、実施区域内（発生土処分場）の林縁で1個体が確認された。
	一般生態	亜高山帯で繁殖し、冬期は平地から山地までの暗い林内でみられる。 国内では、北海道から四国の山地や亜高山帯に生息する。巣は林床の岩の隙間や木の根元などに造る。 県内では、丹沢や箱根山地の標高1,000m以上の山地で繁殖する。冬季には平地から山地の広い地域でみられる。
キビタキ	確認状況	10月に、実施区域内及びその周辺の樹林で延べ11個体が確認された。 5月に、実施区域の周辺でさえずりが確認された。
	一般生態	夏鳥として、山地から丘陵地のよく茂った落葉広葉樹林に渡来する。枝から枝に渡り林の中を飛ぶ虫を捕らえる。繁殖は、落葉広葉樹林、針広混交林で行われる。巣は枝の股、樹洞を利用して作る。 国内では、夏鳥として九州以北に渡来する。別亜種が南西諸島に周年生息する。 県内では、夏鳥としておもに県西部の丘陵地や山地でみられる。春や秋の渡りの季節には、平地の林や市街地の公園などでも観察される。

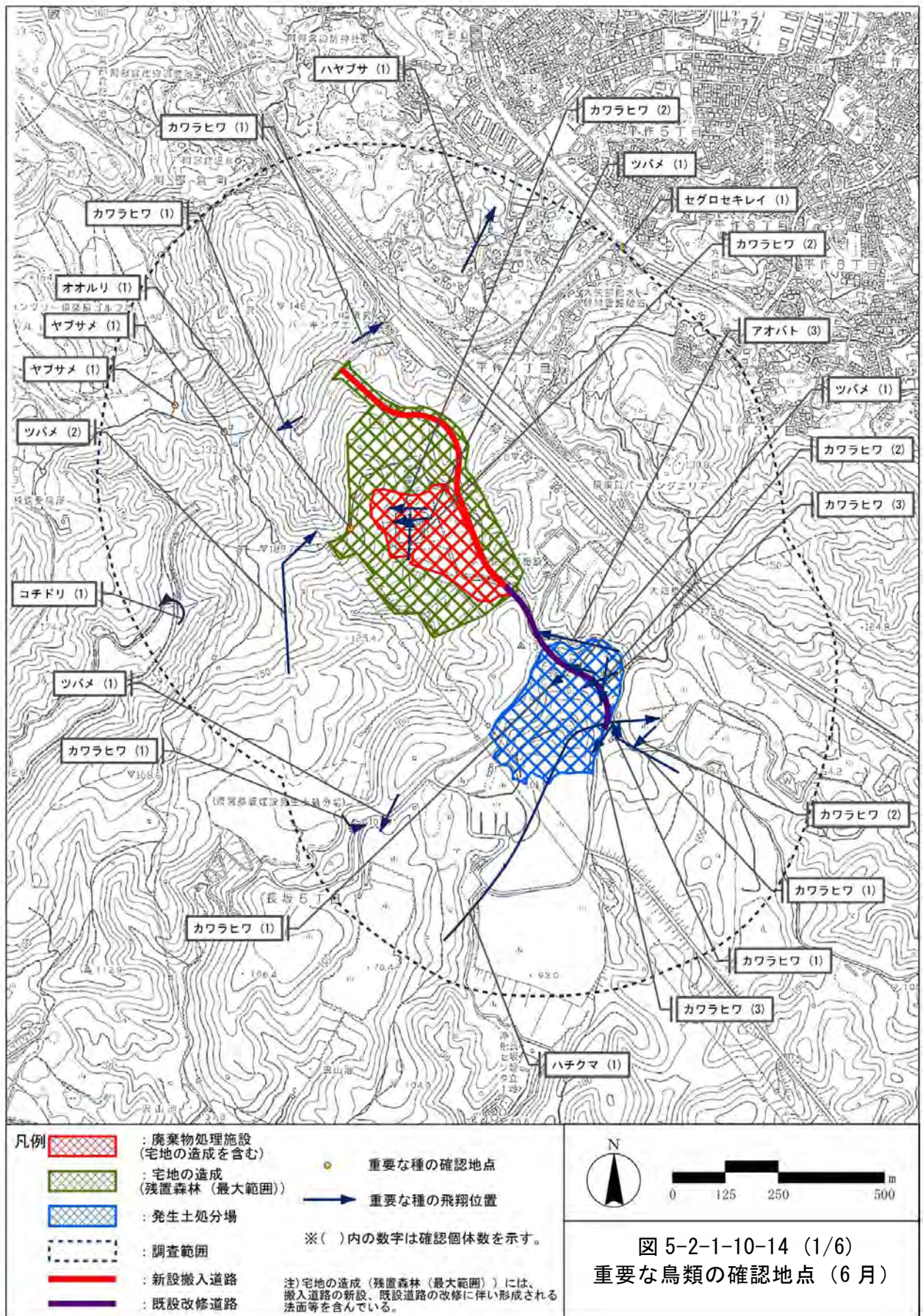
表5-2-1-10-41 (8/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

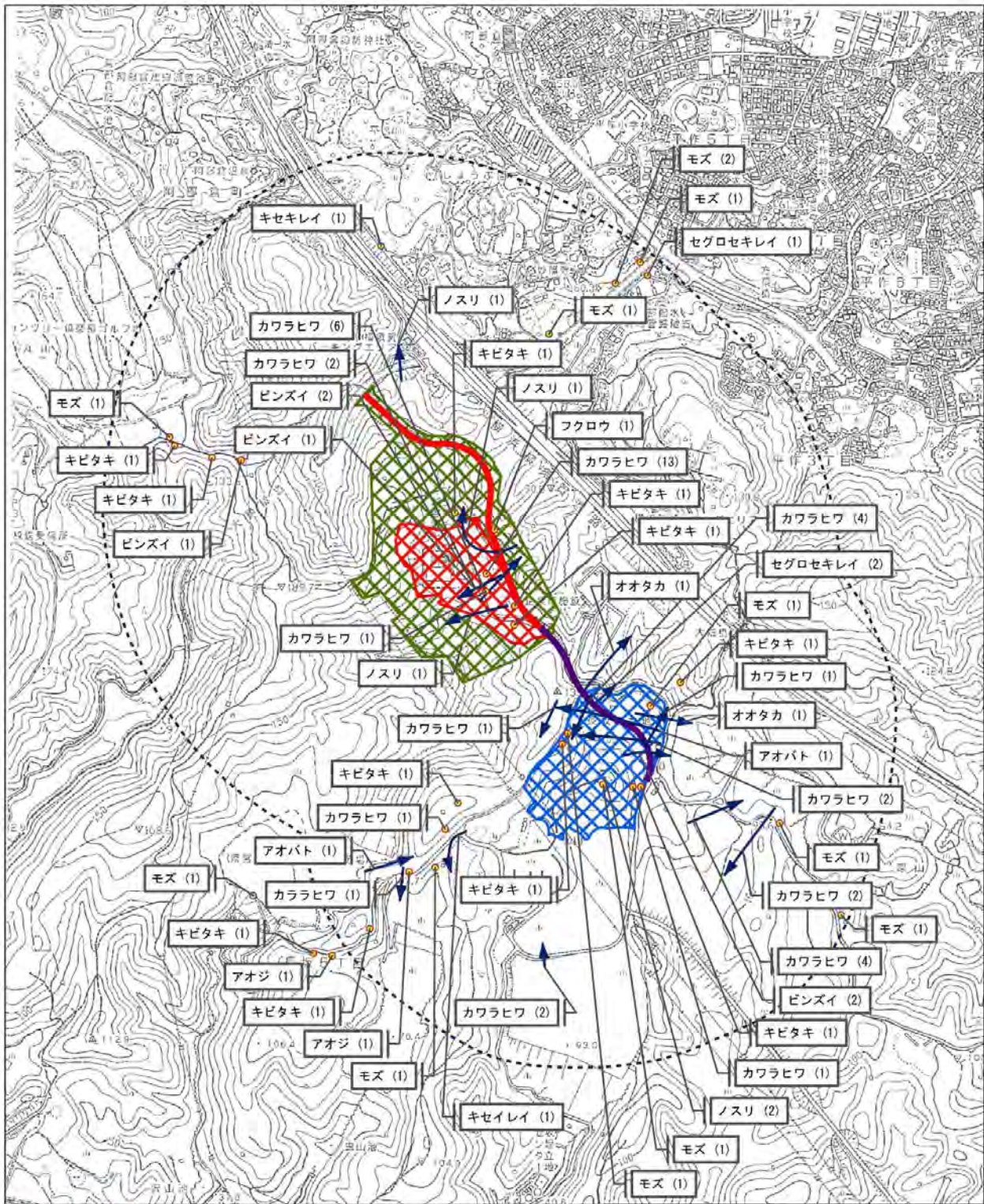
種名	項目	内容
オオルリ	確認状況	6月に、実施区域内（宅地の造成）のハイキングコースの樹林内でさえずりが確認された。 5月に、実施区域の周辺でさえずりが確認された。
	一般生態	夏鳥として、山地から丘陵地の沢沿いの林に渡来する。繁殖は崖地や溪流近くの落葉広葉樹林で行い、岩または土の崖地に巣を作る。枝先から飛んで昆虫を捕らえる。国内では、夏鳥として九州以北の森林に生息する。県内でも、夏鳥として、箱根山地や丹沢山地、大磯丘陵、三浦半島などで繁殖するほか、平地でも繁殖が確認されたことがある。春や秋の渡りの季節には、平地の林や公園などでも観察される。
キセキレイ	確認状況	10月に、実施区域の周辺の水路沿いを飛翔している1個体が確認された。 12月に、実施区域の周辺で2個体が確認された。 4月に、実施区域の周辺で2個体が確認された。 5月に、実施区域の周辺で1個体が確認された。
	一般生態	平地から山地の川岸、湖沼、水田、農耕地に生息する。水生昆虫を捕食する。人家の屋根や橋桁等にお椀型の巣をつくる。 国内では、北海道南部から九州までの平地から山地の河川に、留鳥または漂鳥として生息する。 県内でも、留鳥または漂鳥として平地から低山の水路や河川、水田、農耕地でみられる。
セグロセキレイ	確認状況	6月に、実施区域の周辺の耕作地付近で1個体が確認された。 10月に、実施区域内（発生土処分場）で飛翔する2個体が確認された。実施区域の周辺では、川沿いで1個体が確認された。 12月に、実施区域の周辺の川沿いで1個体が確認された。 2月に、実施区域の周辺の川沿いや水路で1～2個体が5例確認された。 4月に、実施区域の周辺の池で1個体が確認された。 5月に、実施区域の周辺で1個体が確認された。
	一般生態	平地から山地の河川中流域の川岸や湖沼、水田、農耕地に生息する。巣は、川の土手のくぼみ、河原の石や流木の下、人家の石垣や屋根、瓦の隙間などに作る。 国内では、北海道南部から九州までの平地から山地の河川に、留鳥または漂鳥として生息する。 県内でも、留鳥として、平地から低山の河川付近でみられる。

表5-2-1-10-41 (9/9) 重要な鳥類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ビンズイ	確認状況	10月に、実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）及び実施区域の周辺で樹上や上空で1～2個体が4例確認された。
	一般生態	草がまばらに生えた斜面で繁殖する。非繁殖期には、市街地の公園や海岸沿いのマツ林等、平地の広い範囲で観察される。昆虫類やクモ類を捕食する。 国内では、四国と本州中部以北の山地、北海道の平地から山地で繁殖し、冬は本州以南へ移動する。 県内では、繁殖期には、県西部の比較的標高の高い山地に生息し、秋から冬にかけては平地から低山でみられる。
カワラヒロ	確認状況	6月に、実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）及び実施区域の周辺で1～3個体が12例確認された。 10月、12月の調査において、実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）及び実施区域の周辺で広く確認された。 2月に、実施区域の周辺で7個体が確認された。 4月に、実施区域内（宅地の造成）、実施区域の周辺で広く確認された。 5月に、実施区域内（宅地の造成）で2個体が確認されたほか、実施区域の周辺で3個体が確認された。
	一般生態	国内では、本州から九州にかけて留鳥、または冬鳥として生息する。 県内では、留鳥としてほぼ全域でみられる。繁殖記録は平野部に多く、山間部にはほとんどみられない。市街地、村落、道路付近などの林や独立樹などに営巣する。秋冬には、河原や農耕地で群れを作る。
アオジ	確認状況	10月に、実施区域の周辺の林縁の藪で2個体が確認された。 12月、2月、4月の調査において、実施区域及びその周辺の林縁や樹林内などで広範囲に確認された。 5月に、実施区域内（宅地の造成）で1個体が確認された。
	一般生態	国内では、本州中部以北の標高1,000mくらいの亜高山帯で繁殖し、冬期には南方や平地へ移動する。県内でも繁殖期にはごく少数が西丹沢や箱根の山地でみられ、箱根では繁殖の記録もある。非繁殖期には平地から低山の雑木林や農耕地、河川敷の草やぶ、人家の庭などでもみられる。地上で食物を求め、さえずる時は梢にとまる。
クロジ	確認状況	12月、2月の調査において、実施区域の周辺の樹林内で1～2個体が確認された。 5月に、実施区域内（宅地の造成）及び実施区域の周辺の藪で5個体が確認された。
	一般生態	丹沢山地で繁殖が確認されているが、個体数は少なく局所的である。非繁殖期には丘陵地や低山の林でみられるほか、都市公園や人家の庭でも記録がある。暗い林床の落ち葉をかき分けて、おもに草や木の実を食べる。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）





凡例

- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
- : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
- : 発生土処分場
- : 調査範囲
- : 新設搬入道路
- : 既設改修道路
- : 重要な種の飛翔位置
- : 重要な種の確認地点
- : 重要な種の旋回上昇

※()内の数字は確認個体数を示す。
 注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

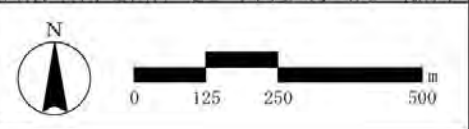
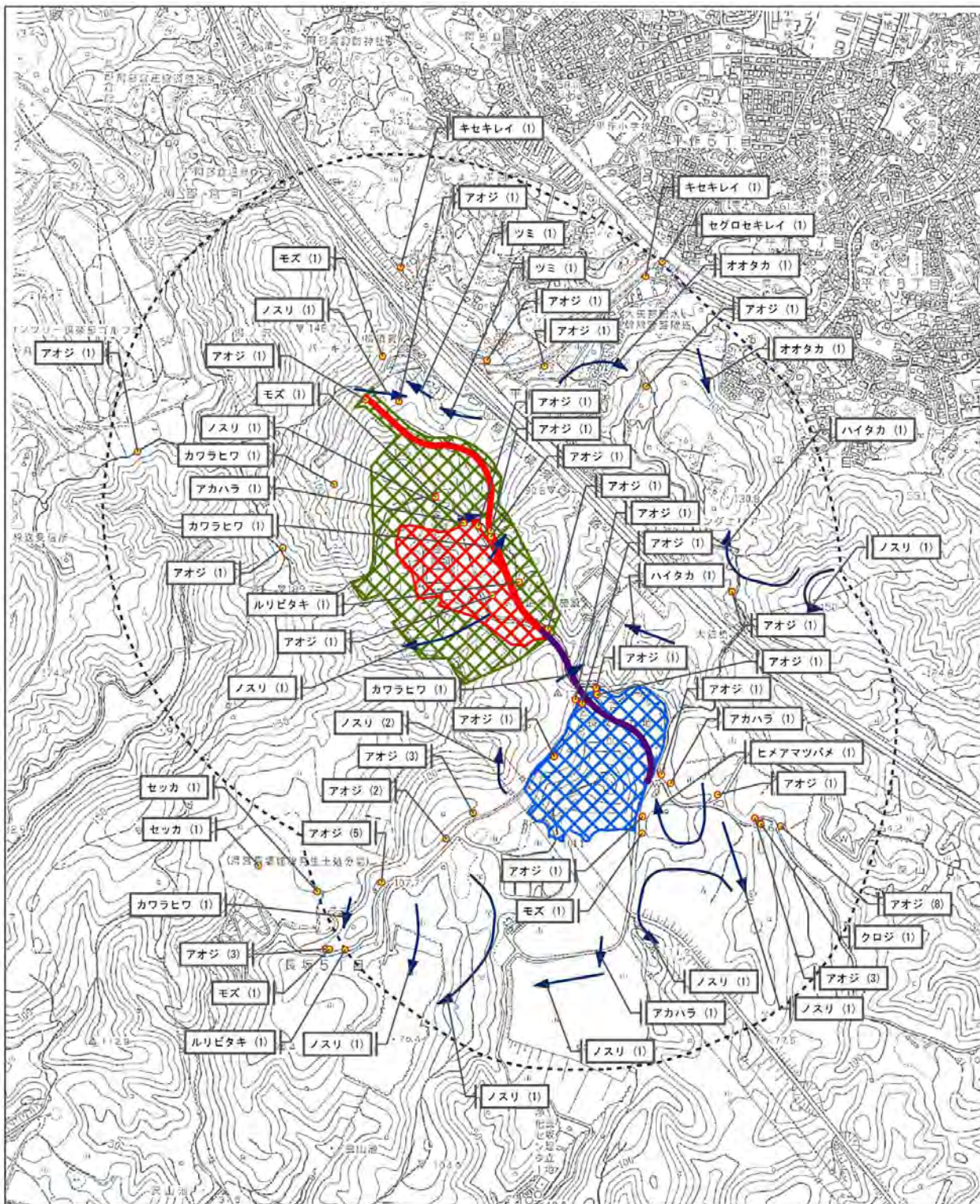










図 5-2-1-10-14 (2/6)
 重要な鳥類の確認地点 (10月)



凡例

	: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)		: 重要な種の確認地点
	: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))		: 重要な種の飛翔位置
	: 発生土処分場		※ () 内の数字は確認個体数を示す。
	: 調査範囲		
	: 新設搬入道路		注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、 搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される 法面等を含んでいる。
	: 既設改修道路		

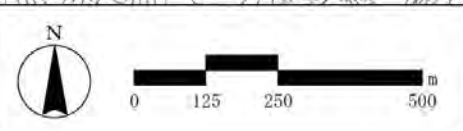
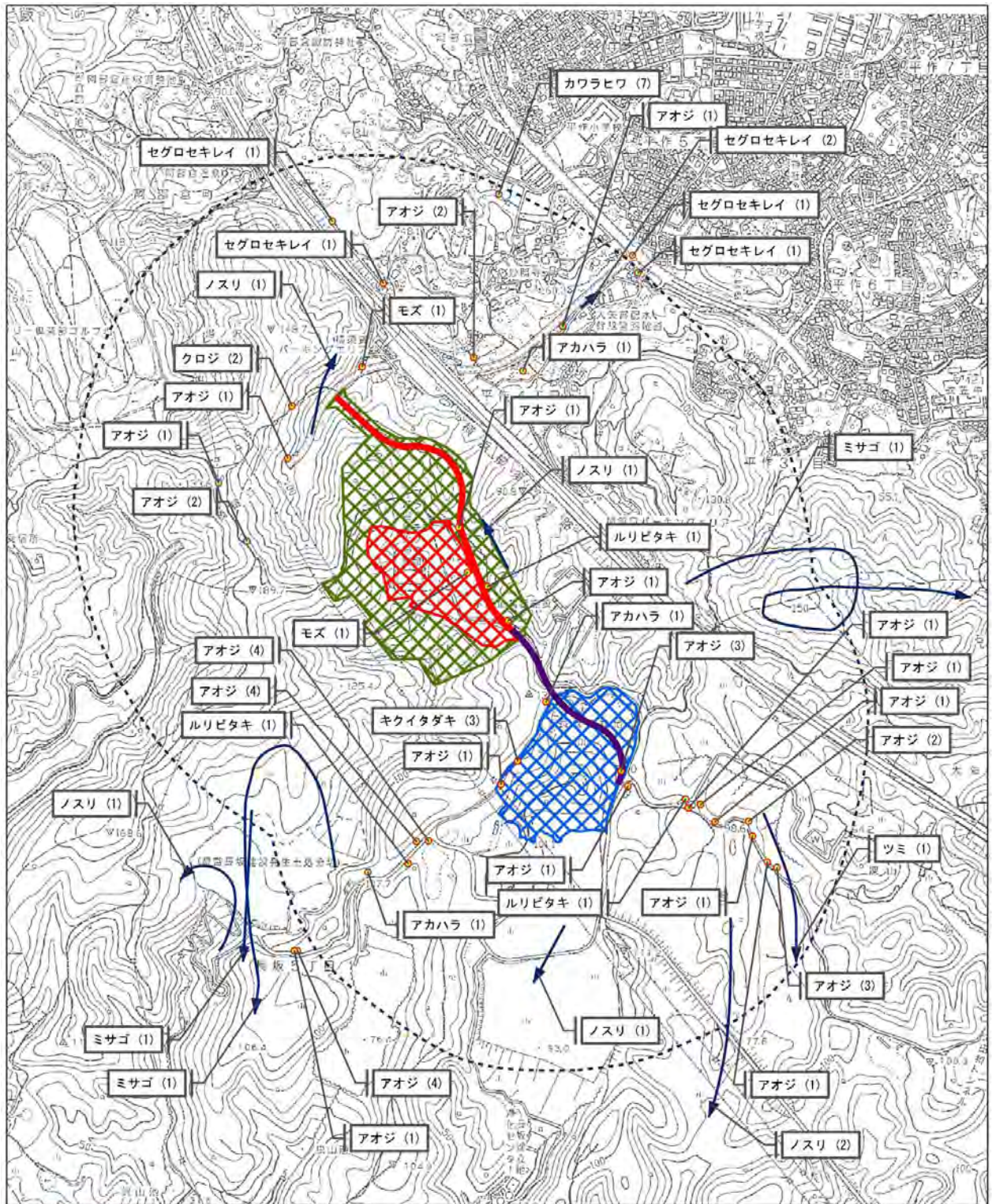


図 5-2-1-10-14 (3/6)
重要な鳥類の確認地点 (12月)



凡例

- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
- : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
- : 発生土処分場
- : 調査範囲
- : 新設搬入道路
- : 既設改修道路
- : 重要な種の確認地点
- : 重要な種の飛翔位置

※ () 内の数字は確認個体数を示す。

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

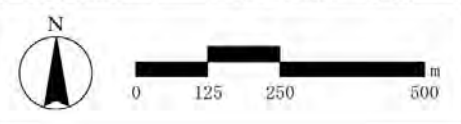
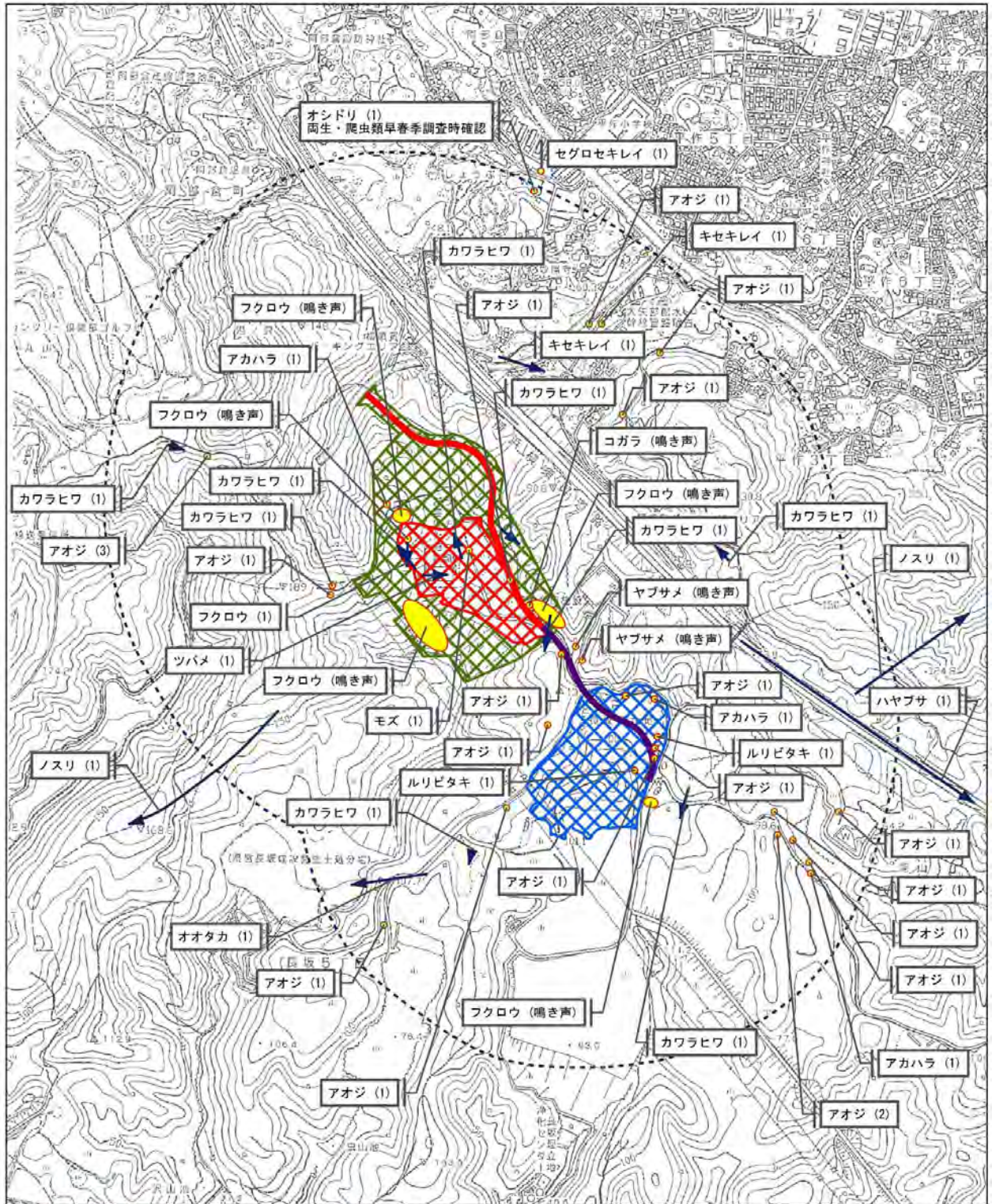


図 5-2-1-10-14 (4/6)
重要な鳥類の確認地点 (2月)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 : 重要な種の鳴き声確認地点 : 重要な種の飛翔位置 <p>※ () 内の数字は確認個体数を示す。</p> <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
---	--

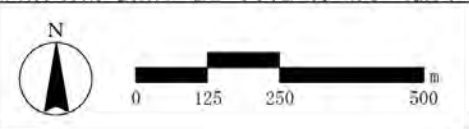
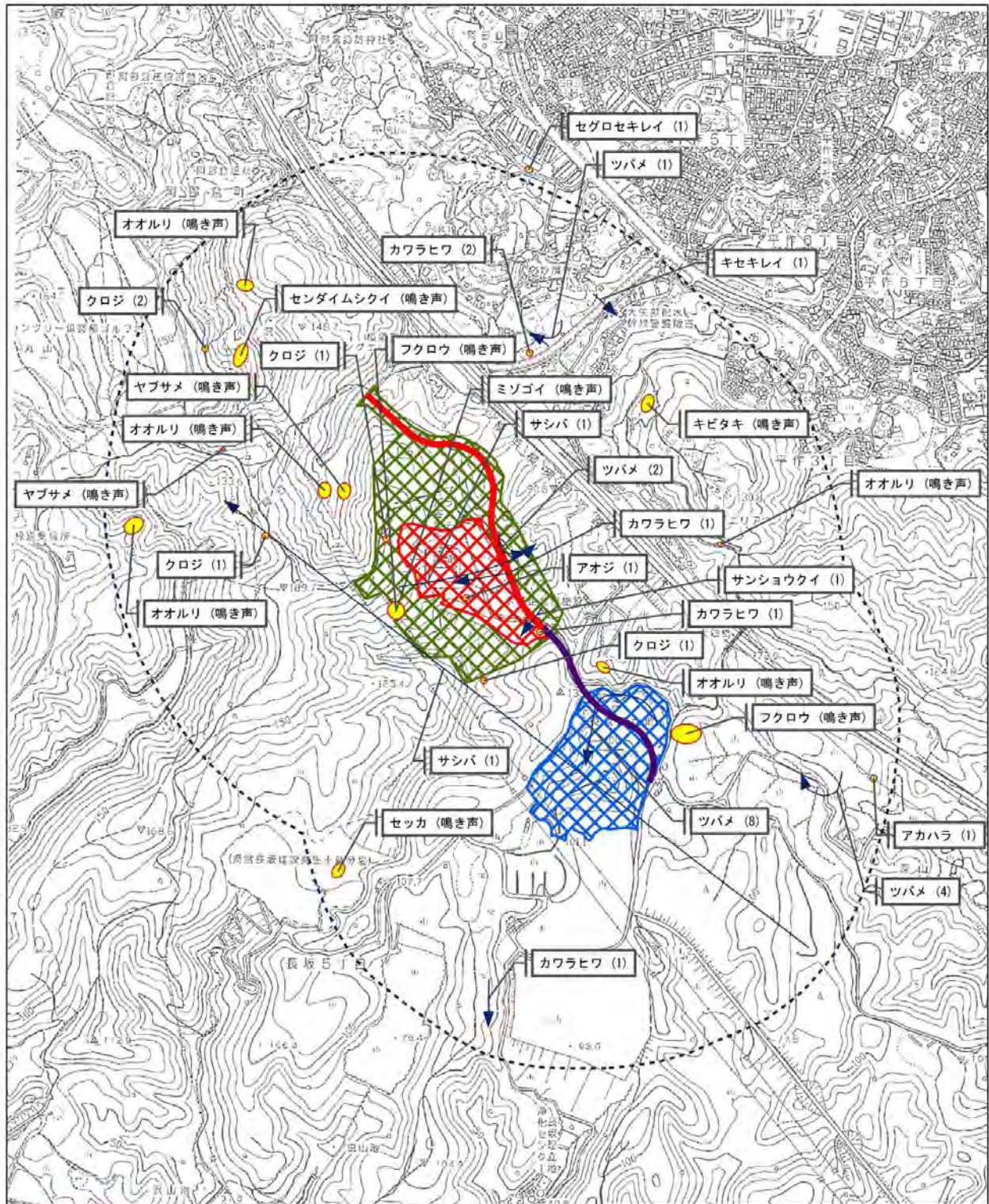


図 5-2-1-10-14 (5/6)
重要な鳥類の確認地点 (4月)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 : 重要な種の鳴き声確認地点 : 重要な種の飛翔位置 <p>※ () 内の数字は確認個体数を示す。</p> <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	<p>N</p> <p>0 125 250 500 m</p>
--	--	---------------------------------

図 5-2-1-10-14 (6/6)
重要な鳥類の確認地点 (5月)

c 爬虫類

重要な種として、トカゲ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシが抽出された。

抽出結果は、表5-2-1-10-42、各種の確認状況及び一般生態は、表5-2-1-10-43に示すとおりである。また、確認位置は、図5-2-1-10-15(1/4)～(4/4) (P. 450～453)に示すとおりである。

表 5-2-1-10-42 重要な爬虫類一覧

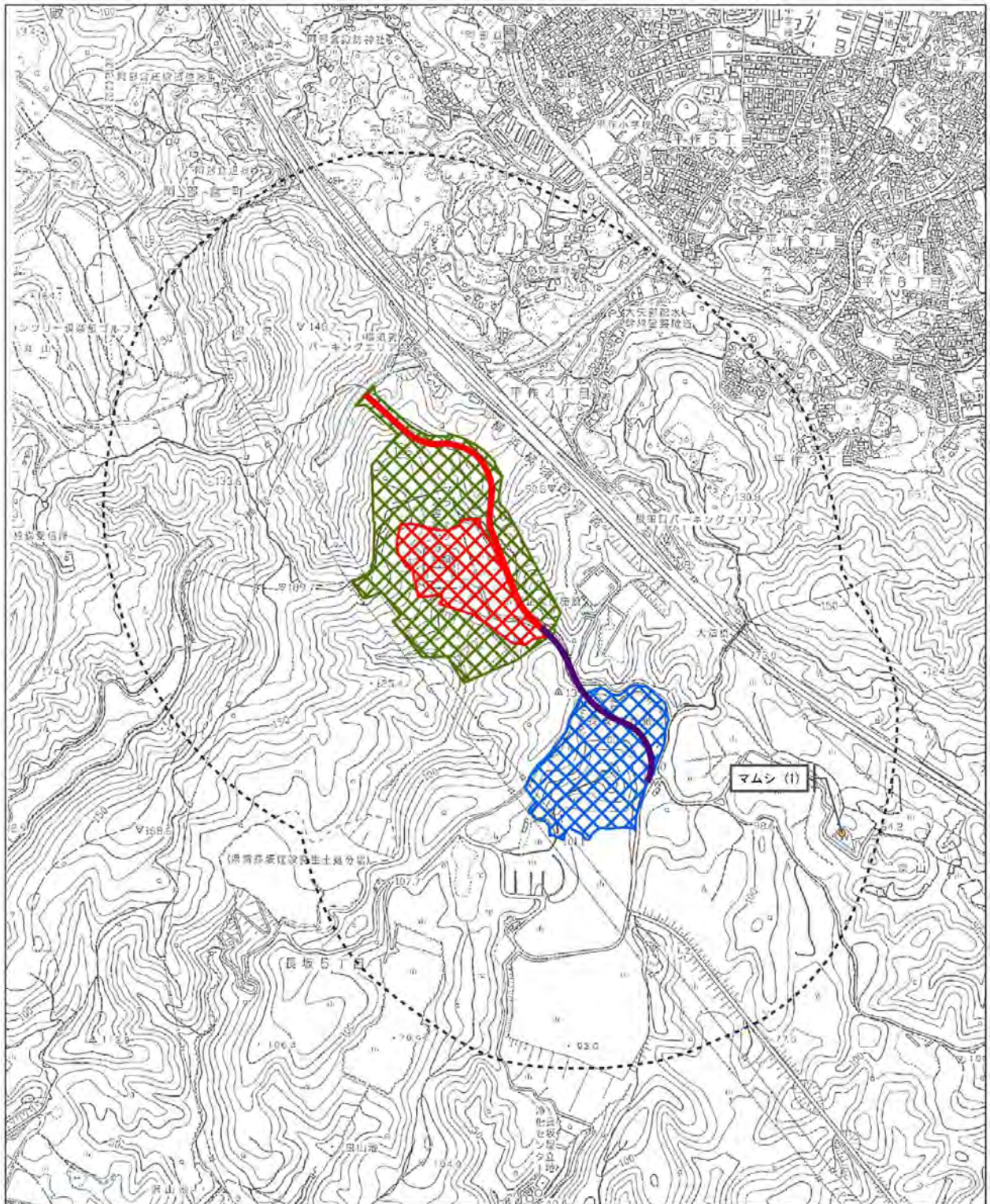
番号	科名	種名	選定基準			
			①	②	③	④
1	トカゲ	トカゲ				要注意種
2	ヘビ	シマヘビ				要注意種
3		アオダイショウ				要注意種
4		ヤマカガシ				要注意種
5	クサリヘビ	マムシ				要注意種
合計	3科	5種	0種	0種	0種	5種

注) 重要な種の選定基準は、表5-2-1-10-37(P. 428)に示すとおりである。

表5-2-1-10-43 重要な爬虫類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
トカゲ	確認状況	春季に、実施区域内（宅地の造成）の林道沿い及び実施区域内（既設改修道路）沿いで幼体を確認された。
	一般生態	日当たりの良い石の下や石垣の隙間、土手の斜面の穴などにすみ、ミミズやクモ、昆虫などを捕食する。 国内では本州～九州にかけて分布する。 県内では、都市部、市街地を除く全域に生息すると思われるが情報不足。
シマヘビ	確認状況	秋季に、実施区域の周辺の林道で脱皮殻が確認された。 春季に、実施区域の周辺の法面草地で成体を確認された。
	一般生態	開けた平地から山地の林縁部など、明るい環境を好む。動きは俊敏で、カエルを多く食べるが、他にも、ネズミ、鳥類の卵やヒナ、ヘビ、トカゲなどさまざまな動物を捕食する。 国内では北海道～九州にかけて分布する。 県内では、都市部や丹沢の高標高地を除く地域に生息すると思われるが、情報不足である。
アオダイショウ	確認状況	鳥類4月調査において、実施区域の周辺の林道上で幼体の死骸が確認された。
	一般生態	山地の林から平野部までさまざまな環境にすむ。 国内では北海道～九州にかけて分布する。 県内では、都市部を除く県内全域に広く分布していると思われるが、情報不足。
ヤマカガシ	確認状況	昆虫類6月調査において、実施区域の周辺の沢で死骸が確認された。
	一般生態	平地から山地の水田や小川、湿地等に多い。動きは活発で主にカエルを捕食する。また、水中でオタマジャクシや小魚も捕食する。 国内では本州～九州に分布する。 県内では、全域で見られるが、情報不足の地域もある。
マムシ	確認状況	夏季に、実施区域の周辺の草地で幼体が1個体確認された。
	一般生態	林や藪などの林床や田畑の畦、水辺などに生息し、ネズミやカエルを主とし、ヘビ、トカゲ、小鳥、魚など小型の脊椎動物を捕食する。 国内では北海道～九州にかけて分布する。 県内では、主に西部に分布しているが、他の地域については情報不足である。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）



凡例	: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)	: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))	: 重要な種の確認地点
	: 発生土処分場		※ () 内の数字は確認個体数を示す。
	: 調査範囲		
	: 新設搬入道路		
	: 既設改修道路		

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

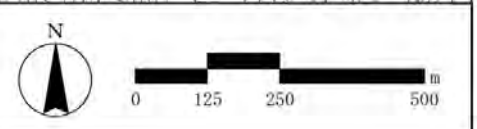
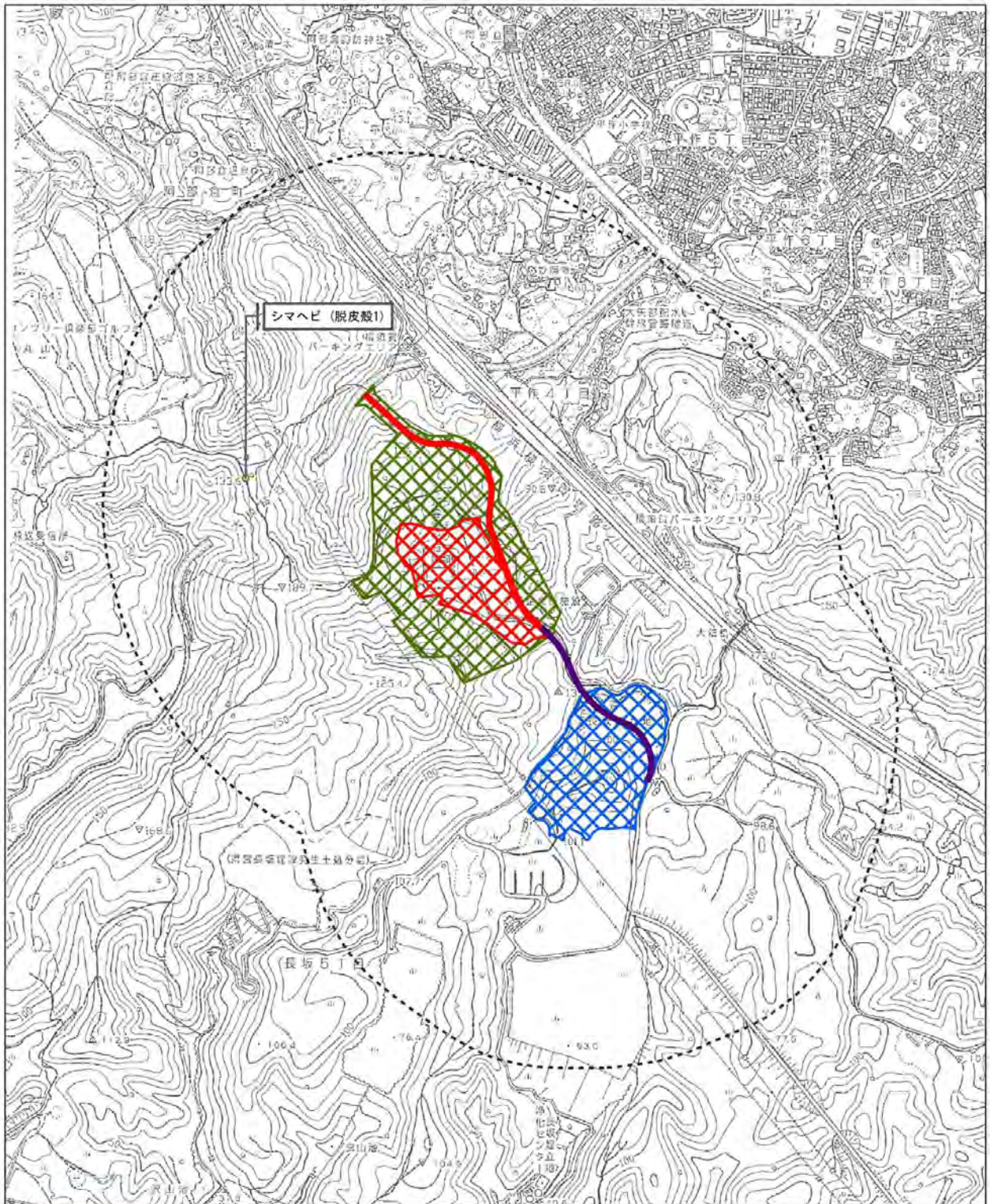
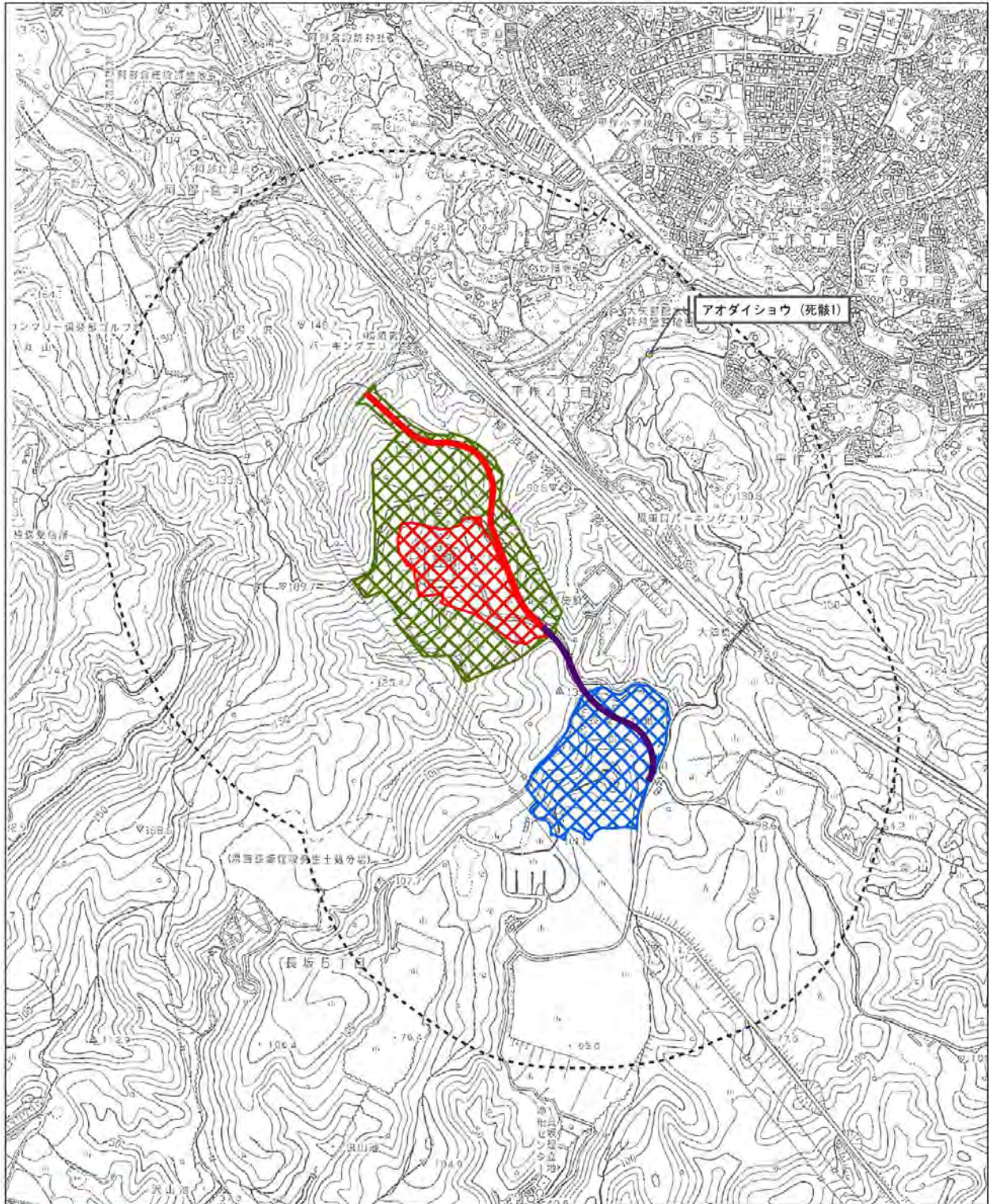


図 5-2-1-10-15 (1/4)
重要な爬虫類の確認地点 (夏)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	
--	---	------

図 5-2-1-10-15 (2/4)
重要な爬虫類の確認地点 (秋)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 重要な種の確認地点 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
--	--

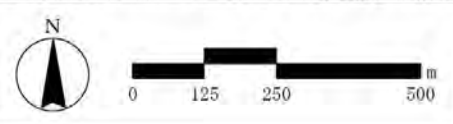
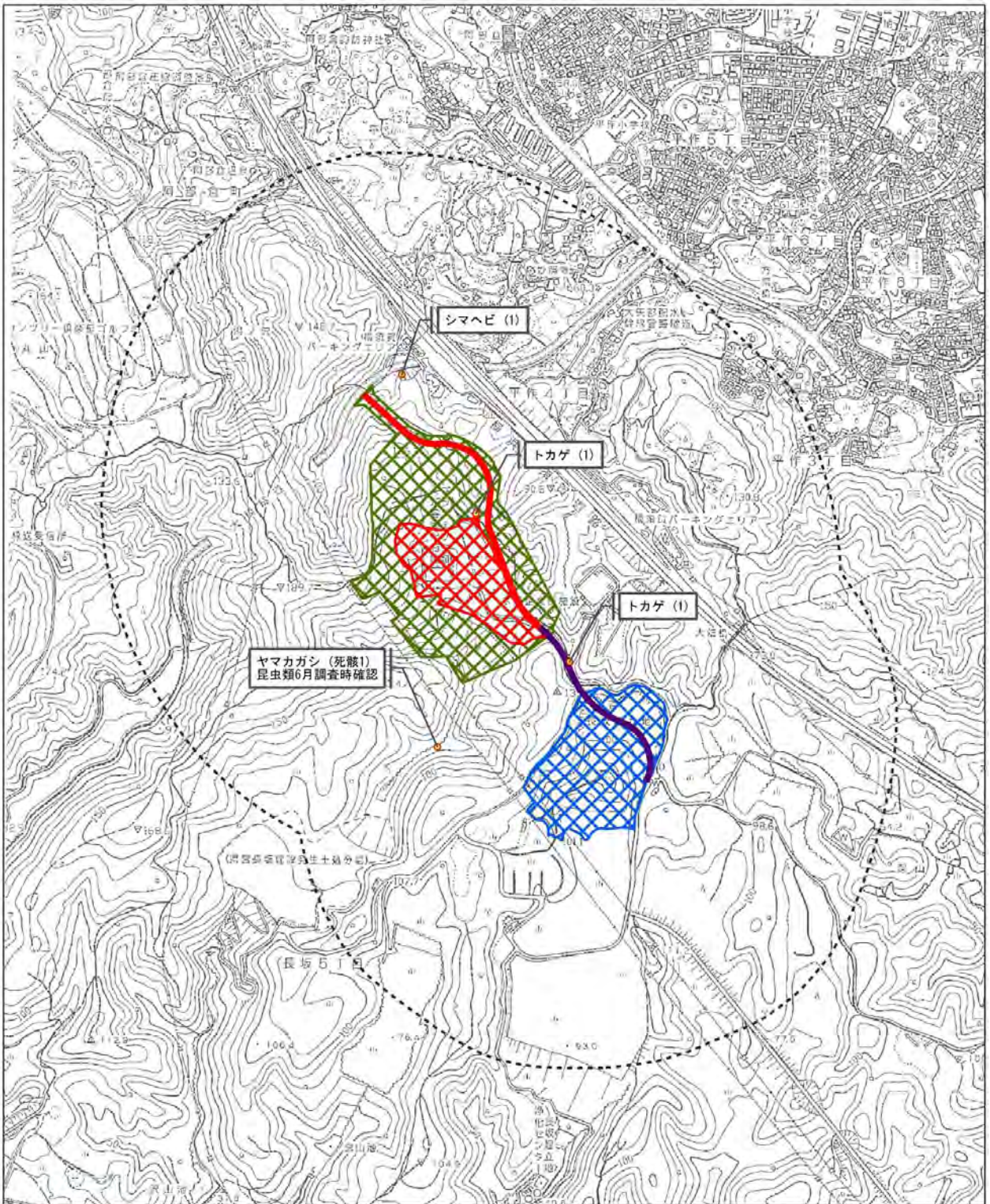


図 5-2-1-10-15 (3/4)
重要な爬虫類の確認地点 (早春)



凡例 : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林(最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路	: 重要な種の確認地点 ※ ()内の数字は確認個体数を示す。		
	注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。		
	図 5-2-1-10-15 (4/4) 重要な爬虫類の確認地点 (春)		

d 両生類

重要な種として、両生類はニホンアカガエル、シュレーゲルアオガエルが抽出された。

抽出結果は、表 5-2-1-10-44 に、各種の確認状況及び一般生態は、表 5-2-1-10-45 に示すとおりである。また、確認位置は、図 5-2-1-10-16 (1/3)～(3/3)に示すとおりである。

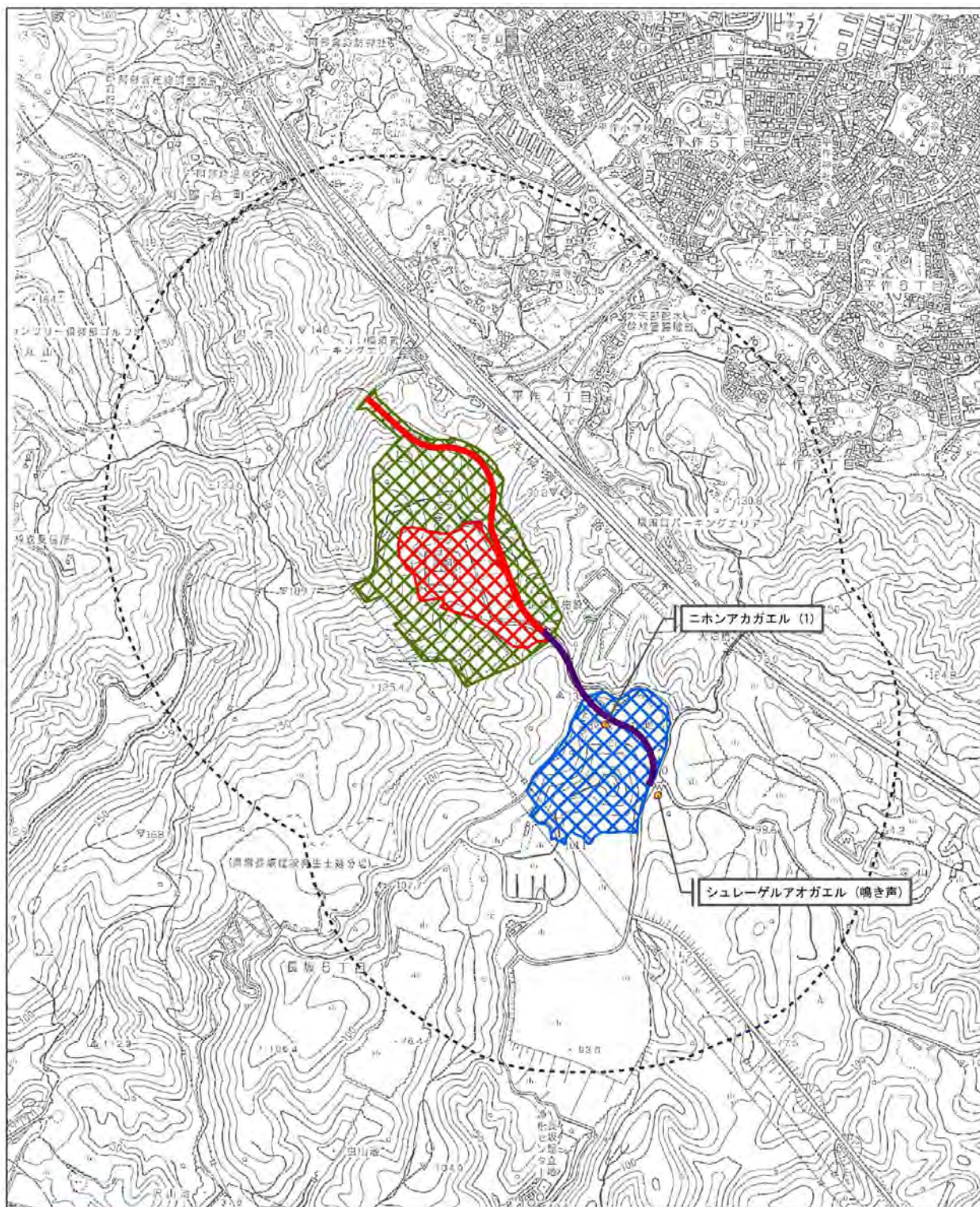
表5-2-1-10-44 重要な両生類一覧

番号	科名	種名	選定基準			
			①	②	③	④
1	アカガエル	ニホンアカガエル				絶滅危惧Ⅱ類
2	アオガエル	シュレーゲルアオガエル				要注意種
合計	2科	2種	0種	0種	0種	2種

注) 重要な種の選定基準は、表 5-2-1-10-37 (P. 428) に示すとおりである。

表 5-2-1-10-45 重要な両生類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ニホンアカガエル	確認状況	夏季に、実施区域内（発生土処分場）の草地で幼体を確認された。 秋季に、実施区域の周辺の林床で成体を確認された。
	一般生態	平地から丘陵地の雑木林の林床に生息し、本州のカエルでは一番早く産卵を開始する。神奈川県では2月初めから水田や浅い水溜まりなどの止水域で産卵が見られ、産卵後には一時休眠する。 国内では本州から四国、九州と壱岐、大隅諸島に分布する。 県内では、横浜市、茅ヶ崎市、秦野市、大磯町、愛川町に分布する。他にも生息地が存在するが、情報不足である。
シュレーゲルアオガエル	確認状況	春季に、実施区域内（発生土処分場）と実施区域の周辺で鳴き声を確認された。 夏季において、実施区域の周辺の池で鳴き声を確認された。
	一般生態	平地から山地の主として広葉樹の林に生息する緑色のカエルで、繁殖期には湿地の岸边や水田の畦などの土中に、泡に包まれた卵塊を産み、孵化した幼生は水中に泳ぎだして成長する。 国内では本州～九州にかけて分布する。 県内では、東部～西部にかけて分布する。他にも生息地が存在すると思われるが、情報不足である。



- 凡例
- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
 - : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
 - : 発生土処分場
 - : 調査範囲
 - : 新設搬入道路
 - : 既設改修道路

● 重要な種の確認地点
 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

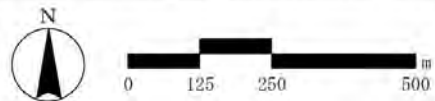
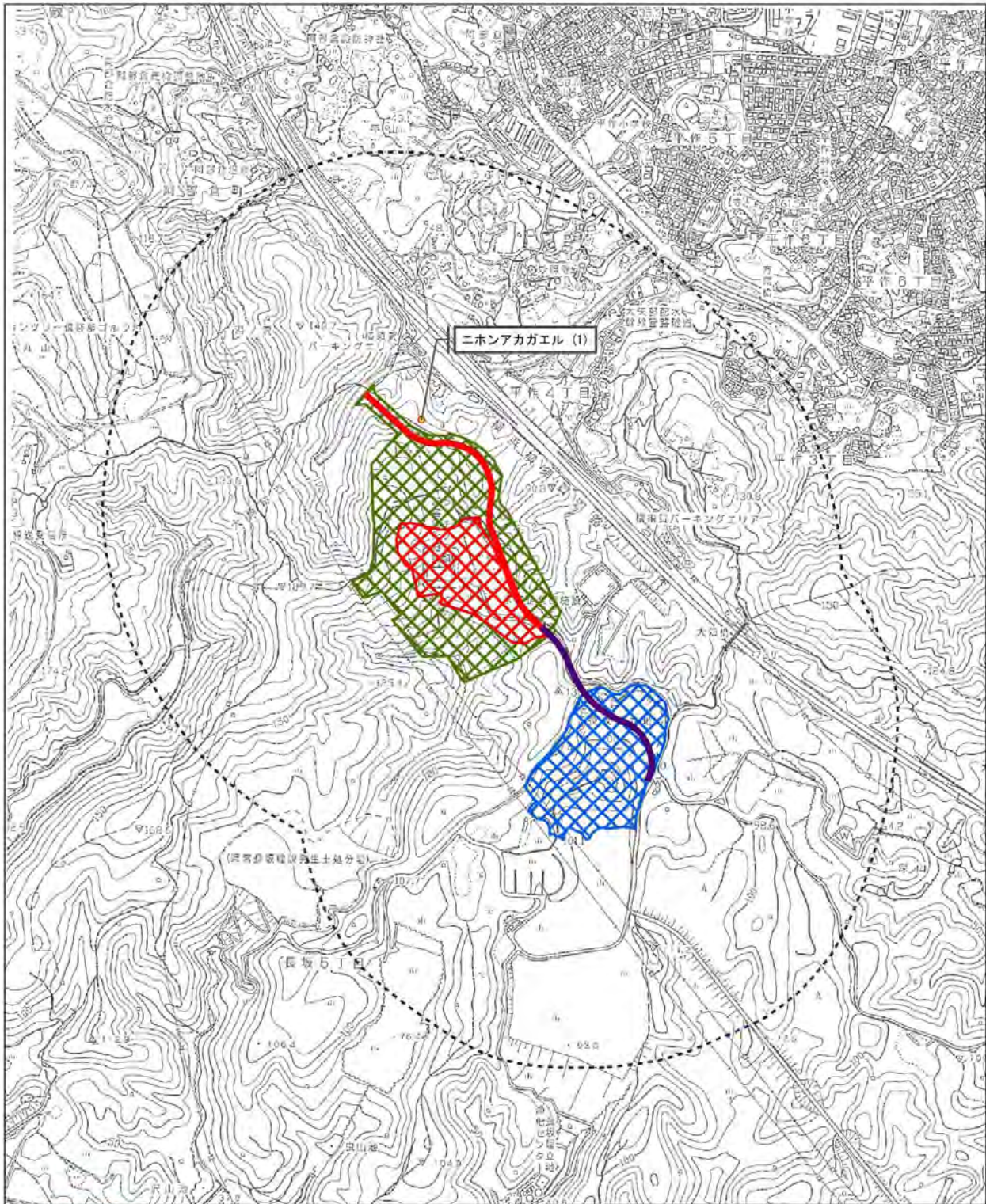


図 5-2-1-10-16(1/3)
 重要な両生類の確認地点 (夏)










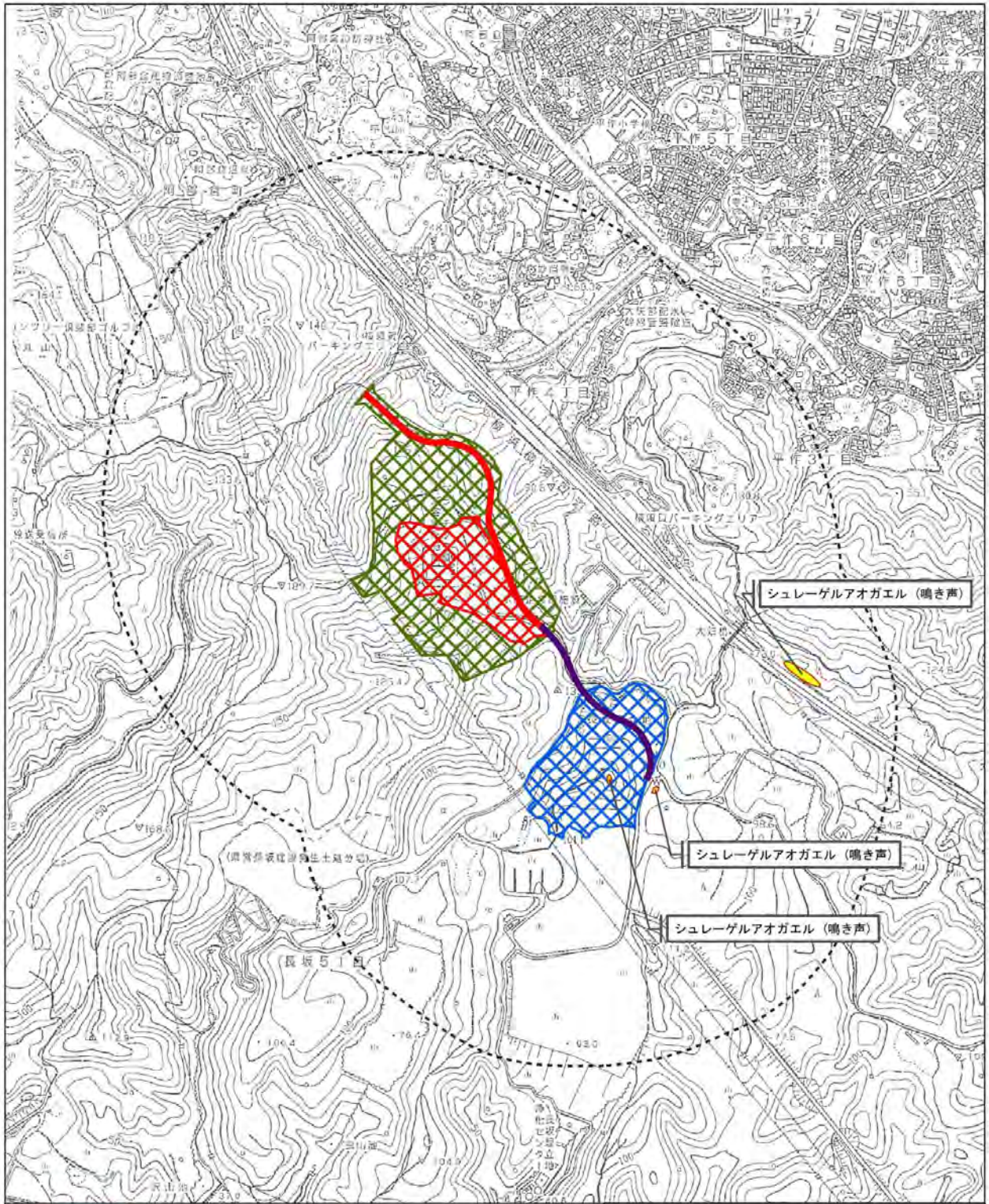
- 凡例
-  : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
 -  : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
 -  : 発生土処分場
 -  : 調査範囲
 -  : 新設搬入道路
 -  : 既設改修道路
 -  : 重要な種の確認地点
- ※ () 内の数字は確認個体数を示す。
- 注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。



図 5-2-1-10-16 (2/3)
重要な両生類の確認地点 (秋)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 : 重要な種の鳴き声確認地点 <p>※ () 内の数字は確認個体数を示す。</p> <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	<div style="text-align: center;"> <p>N</p> <p>0 125 250 500</p> </div>
--	---	--

図 5-2-1-10-16 (3/3)
重要な両生類の確認地点 (春)

e 昆虫類

重要な昆虫類として、ミルンヤンマ、リスアカネ、ショウリョウバッタモドキ、ヤマトタマムシ等、16科19種が抽出された。

抽出結果は表5-2-1-10-46に、各種の確認状況及び一般生態は、表5-2-1-10-47(1/4)～(4/4)に示すとおりである。また、確認位置は、図5-2-1-10-17(1/5)～(5/5) (P. 464～467)に示すとおりである。

表5-2-1-10-46 重要な昆虫類一覧

番号	科名	種名	選定基準			
			①	②	③	④
1	イトトンボ	クロイトトンボ				要注意種
2	カワトンボ	ハグロトンボ				要注意種
3	サナエトンボ	ヤマサナエ				要注意種
4	ヤンマ	ミルンヤンマ				要注意種
5	トンボ	コフキトンボ				要注意種
6		ナツアカネ				要注意種
7		リスアカネ				要注意種
8	ケラ	ケラ				要注意種
9	コオロギ	ヒメスズ				希少種
10	カンタン	ヒロバネカンタン				準絶滅危惧
11	バッタ	ショウリョウバッタモドキ				要注意種
12	ミズムシ	コミズムシ類				情報不足
13	オサムシ	アシミゾナガゴミムシ				準絶滅危惧
14	タマムシ	ヤマトタマムシ				要注意種
15		クロケシタマムシ				準絶滅危惧
16	カミキリムシ	キイロトラカミキリ				要注意種
17	ベッコウバチ	アケボノベッコウ			DD	
18	アブ	ウシアブ				情報不足
19	ミバエ	カボチャミバエ				情報不足
合計	16科	19種	0種	0種	1種	18種

注) 重要な種の選定基準は、表5-2-1-10-37(P. 428)に示すとおりである。

表5-2-1-10-47 (1/4) 重要な昆虫類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
クロイトトンボ	確認状況	平成24年8月に、実施区域の周辺『横須賀しょうぶ園』の池で成虫が確認された。
	一般生態	止水域に生息し、面積が広く開放的な、平野部の池沼を好む。成虫は5月頃から出現して10月頃までみられ、この間に年2化する例が多い。 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、平野部のほぼ全域に生息する。
ハグロトンボ	確認状況	平成24年8月に、実施区域の周辺の平作川で成虫が多数確認された。
	一般生態	水辺に草本類の生える流水に生息し、生活排水などでやや汚染された水域にも生息する。成虫は5月下旬～11月下旬にかけて出現し、最盛期は7～8月である。 国内では、北海道、本州、九州、種子島、屋久島などに分布する。県内では、各地の河川中下流域に生息する。
ヤマサナエ	確認状況	平成25年6月に、実施区域の周辺の沢で成虫が確認された。
	一般生態	河川上流域に生息する。幼虫は水質汚染の影響が少ない、泥底に潜って生活している。 国内では、本州、四国、九州に分布する。 県内では、ほぼ全域に分布している。
ミルンヤンマ	確認状況	平成24年10月に、実施区域の周辺の沢で成虫が確認された。
	一般生態	幼虫の生息域は、河川源流域～上流域で、コシボソヤンマとは明確に棲み分ける。8月頃を中心に羽化し、成熟成虫は9月から10月頃まで出現する。黄昏活動性が強いが、秋以降その時間帯が日中に移行する。 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、ほぼ全域に生息する。
コフキトンボ	確認状況	平成24年8月に、実施区域の周辺『横須賀しょうぶ園』の池で成虫が確認された。
	一般生態	平地から丘陵地の池沼や河川敷等にみられる。夕刻暗くなってから活発に動き出すらしく、その時間帯に交尾が観察されるが、生態的には謎の多い種である。 国内では、北海道南部、本州、四国、九州、種子島、沖永良部島、沖縄本島等に分布する。 県内では、各地の丘陵地、河川敷等に生息する。
ナツアカネ	確認状況	平成24年10月に、実施区域の周辺の道路脇で成虫が確認された。
	一般生態	平野部・低山地の水田や池沼に生息するが、通常は丘陵や樹林に接する場所を好む。7～8月頃に羽化するが、未熟成虫は大規模な移動は行わず、羽化期直後から水域近辺の樹林で継続してみられる。成熟成虫は9～11月に出現する。 国内では、北海道、本州、四国、九州、奄美以北の南西諸島に分布する。県内ではほぼ全域に生息する。

表5-2-1-10-47 (2/4) 重要な昆虫類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
リスアカネ	確認状況	平成24年6月に実施区域の周辺、8月に実施区域内（発生土処分場）及びその周辺で成虫が確認された。
	一般生態	丘陵地などの木立に囲まれた池に生息するが、河川敷等の開放的な場所でみられることもある。成虫は7月中旬から11月上旬にかけてみられる。 国内では、本州、四国、九州、甌島列島等に分布する。県内では、丘陵地を中心とする県内各地の止水域に生息する。
ケラ	確認状況	平成24年10月に、実施区域内(宅地の造成)の林縁の草地の地中から鳴き声が確認された。
	一般生態	湿地に穴を掘ってすむ種で、水田付近に多く、円筒型の体型、細かい毛の密生、前足の発達など、穴居に適した形態を備えている。雄はブーという単調な声で無く。飛ぶことができ、灯火に飛来する。 北海道～九州にかけて分布する。県内では、低地に広く分布する。
ヒメスズ	確認状況	平成24年10月に、実施区域内（宅地の造成）のスギ植林の林床で鳴き声が確認された。
	一般生態	常緑広葉樹林などのよく茂った暗い森の林床に生息する。ジージージーと弱く鳴くだけなので、気づきにくい。本州に分布する。県内では、三浦半島と真鶴半島の一部のみに生息する。
ヒロバネカントン	確認状況	平成24年8月に、実施区域内(宅地の造成・発生土処分場)で成虫が1個体確認された。10月に、実施区域の周辺の草地で確認された。
	一般生態	ススキ・ヨモギ・クズなどの茂った草原に生息する。国内では、本州～南西諸島にかけて分布する。県内では、近年では横須賀市のみで記録されている。
ショウリョウバッタモドキ	確認状況	平成24年6月に実施区域内(発生土処分場)、8月に実施区域内（宅地の造成・発生土処分場）及び実施区域の周辺の草地、10月に実施区域の周辺の草地で幼虫が確認された。
	一般生態	丘陵地のチガヤなどの茂る土手にみられ、秋に成虫が出現する。国内では、本州から九州に分布し、県内では全県の平地から丘陵地に分布する。
コミズムシ類	確認状況	平成24年10月に、実施区域内（発生土処分場）のライトトラップで1個体が確認された。種の同定は困難であったため、コミズムシ属の一種とした。
	一般生態	ため池、水田等に生息し、植物の豊富な環境を好む。国内では、北海道～九州にかけて分布する。県内の生息状況は不明である。

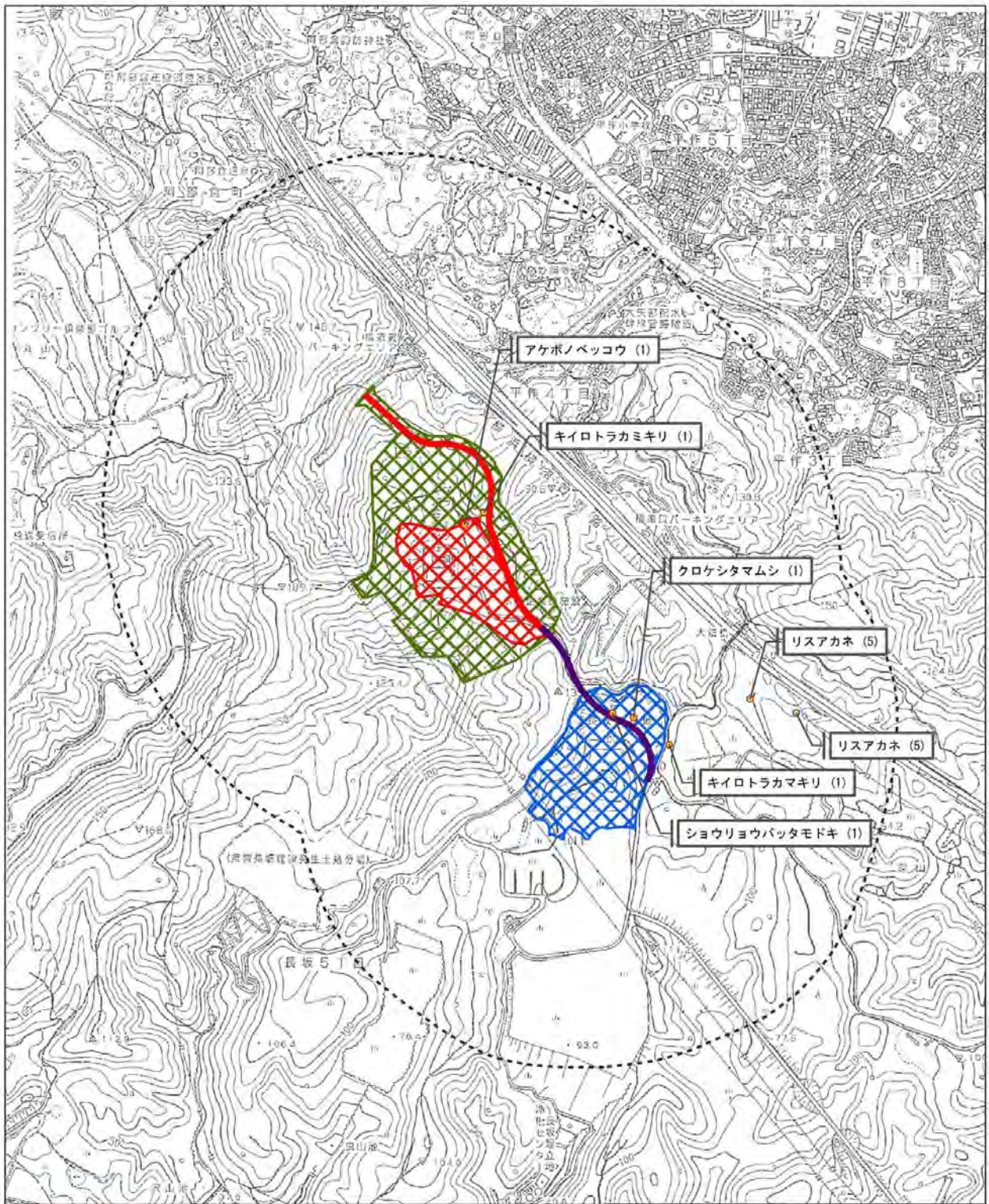
表5-2-1-10-47 (3/4) 重要な昆虫類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
アシミゾナガゴ ミムシ	確認状況	平成24年5月に、実施区域の周辺の草地で1個体が確認された。 平成25年6月に、実施区域の周辺の舗装路に堆積した落葉下から1個体が確認された。
	一般生態	湿地のアシ原に生息している。 国内では、北海道、本州、九州等に分布する。 県内では、川崎市、横浜市、横須賀市、藤野町に分布する。
ヤマトタマムシ	確認状況	平成24年8月に、実施区域の周辺の林縁部で1個体が確認された。
	一般生態	エノキ、ケヤキ、サクラ類、カシ類、カキ、クワ、ニセアカシアなどを宿主とする。夏季にエノキやサクラの樹上を巡回する。 国内では、本州、四国、九州、対馬、屋久島に分布し、県内でも全域に生息する。
クロケシタマムシ	確認状況	平成24年6月に、実施区域内（発生土処分場）の草地で1個体が確認された。
	一般生態	草地や河原の石下などにみられる。成虫越冬する。 国内では、本州、九州に分布する。 県内では、横浜市円海山で確認されている。
キイロトラカミ キリ	確認状況	平成24年6月に、実施区域内（宅地の造成）及び実施区域の周辺の林縁沿いで1個体ずつ確認された。 平成25年6月に、実施区域の周辺の林縁で1個体が確認された。
	一般生態	低地や山間地の夏緑林に多く生息する。ケヤキを寄主植物とし、成虫は5～8月に出現、伐採・枯死木に集まる。 国内では、本州（東北地方南部以南）、四国、九州、屋久島などに分布する。 県内では、ほぼ全域に生息する。
アケボノベッコウ	確認状況	平成24年6月に、実施区域内（宅地の造成）の草地で1個体が確認された。
	一般生態	水辺に生息し、ハシリグモやコモリグモを追って水中に潜り、しばしば獲物を水上で運搬する。土中や材中に多房巣を掘り、ときには地上部で泥壺状の多房巣をつくる。 国内では、本州・九州に分布する。
ウシアブ	確認状況	平成24年8月に、実施区域の周辺の樹林内で1個体が確認された。
	一般生態	牛馬の厩舎付近を主たる生息環境とする。 国内では、北海道～九州にかけて分布する。 県内では、横須賀市猿島などで確認されている。

表5-2-1-10-47 (4/4) 重要な昆虫類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
カボチャミバエ	確認状況	平成25年5月に、実施区域内（宅地の造成）の草地で1個体が確認された。
	一般生態	幼虫がカボチャ、スイカ、トマト等を食害する害虫として知られている。 国内では、本州～九州・南西諸島に分布する。 県内では、最近の確実な記録は、円海山付近のみである。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）



凡例

- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
- : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
- : 発生土処分場
- : 調査範囲
- : 新設搬入道路
- : 既設改修道路

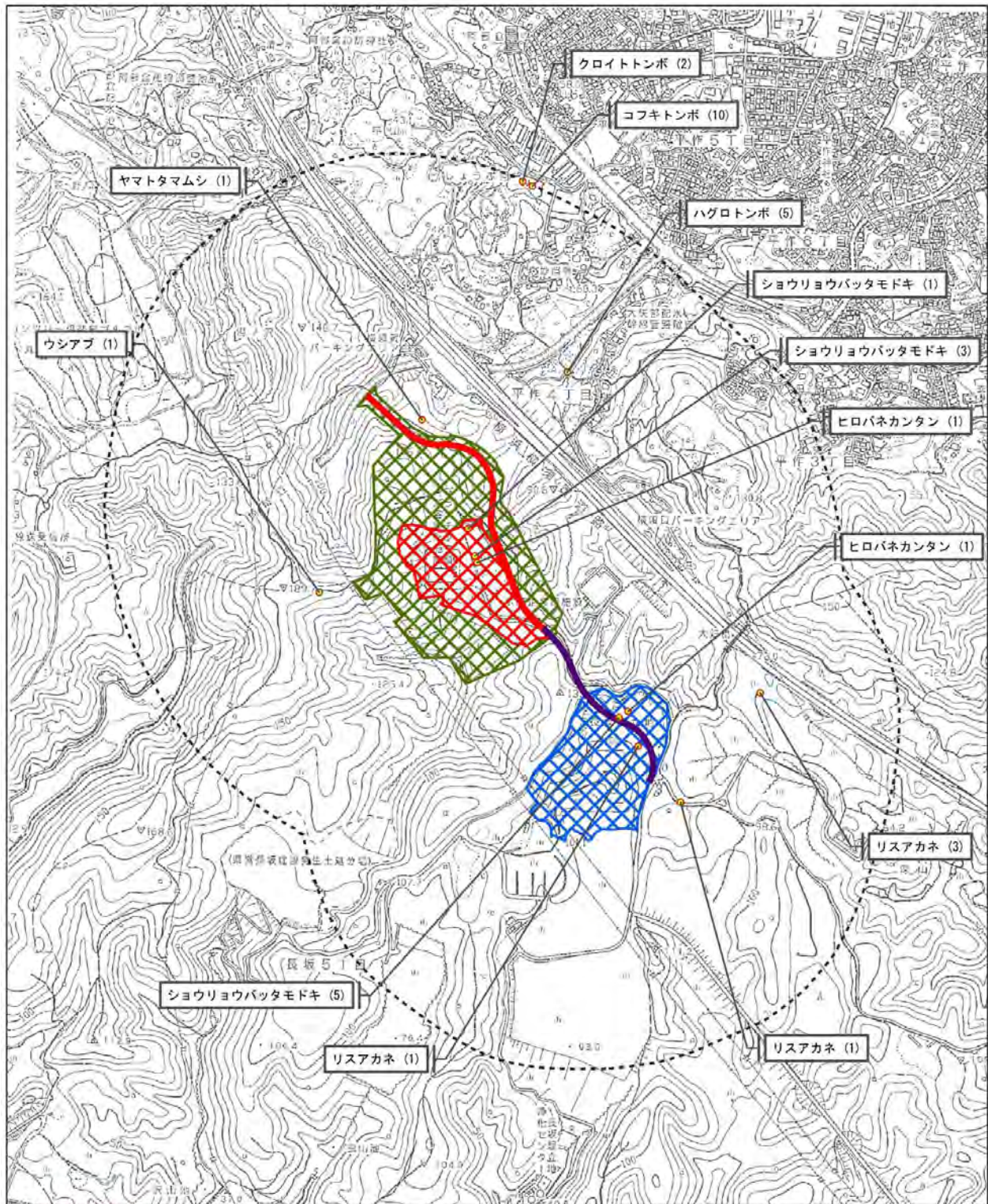
● 重要な種の確認地点
※ () 内の数字は確認個体数を示す。

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

N

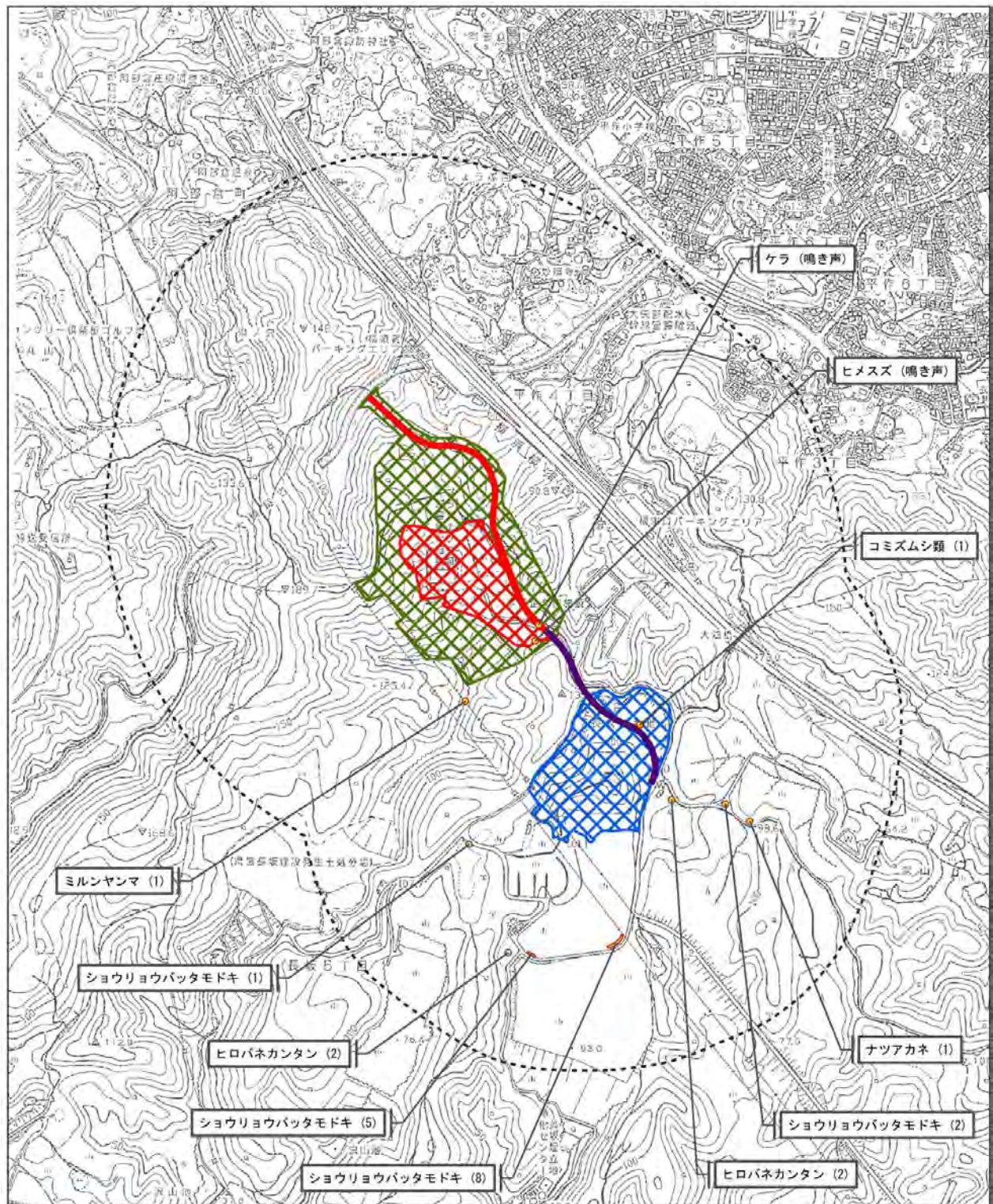
0 125 250 500 m

図 5-2-1-10-17(1/5)
重要な昆虫類の確認地点
(平成 24 年 6 月)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> 重要な種の確認地点 ※ ()内の数字は確認個体数を示す。 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	<div style="text-align: center;"> <p>N</p> <p>0 125 250 500 m</p> </div>
--	---	--

図 5-2-1-10-17 (2/5)
重要な昆虫類の確認地点
(平成 24 年 8 月)



凡例
 : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
 : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
 : 発生土処分場
 : 調査範囲
 : 新設搬入道路
 : 既設改修道路
● : 重要な種の確認地点
 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。
 注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

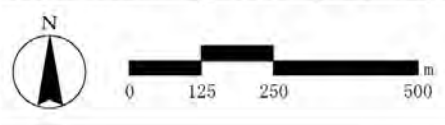
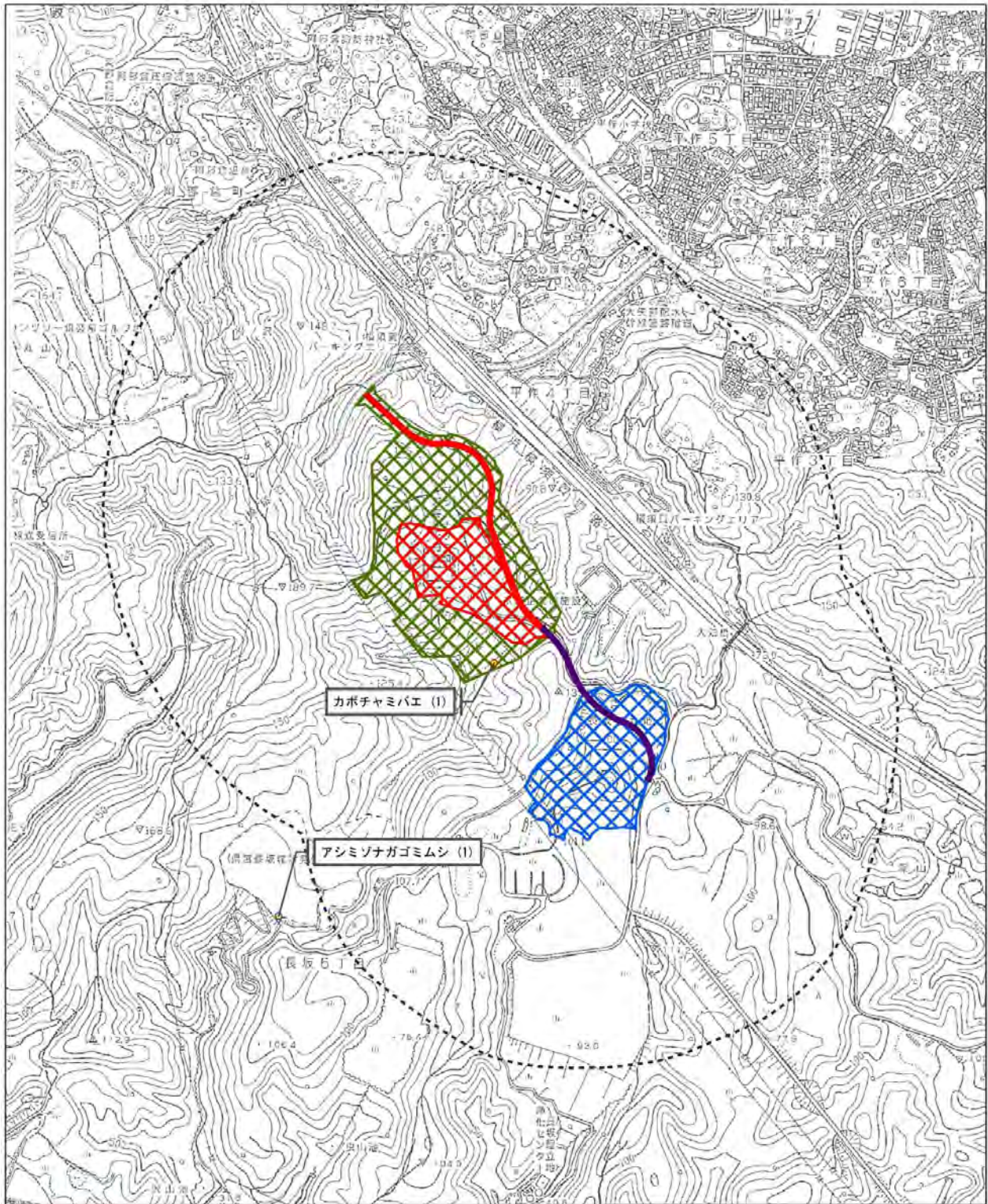


図 5-2-1-10-17(3/5)
 重要な昆虫類の確認地点
 (平成 24 年 10 月)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> ● 重要な種の確認地点 ※ ()内の数字は確認個体数を示す。 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
---	---

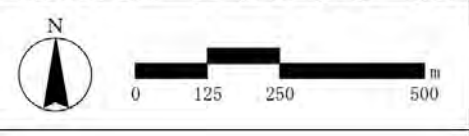
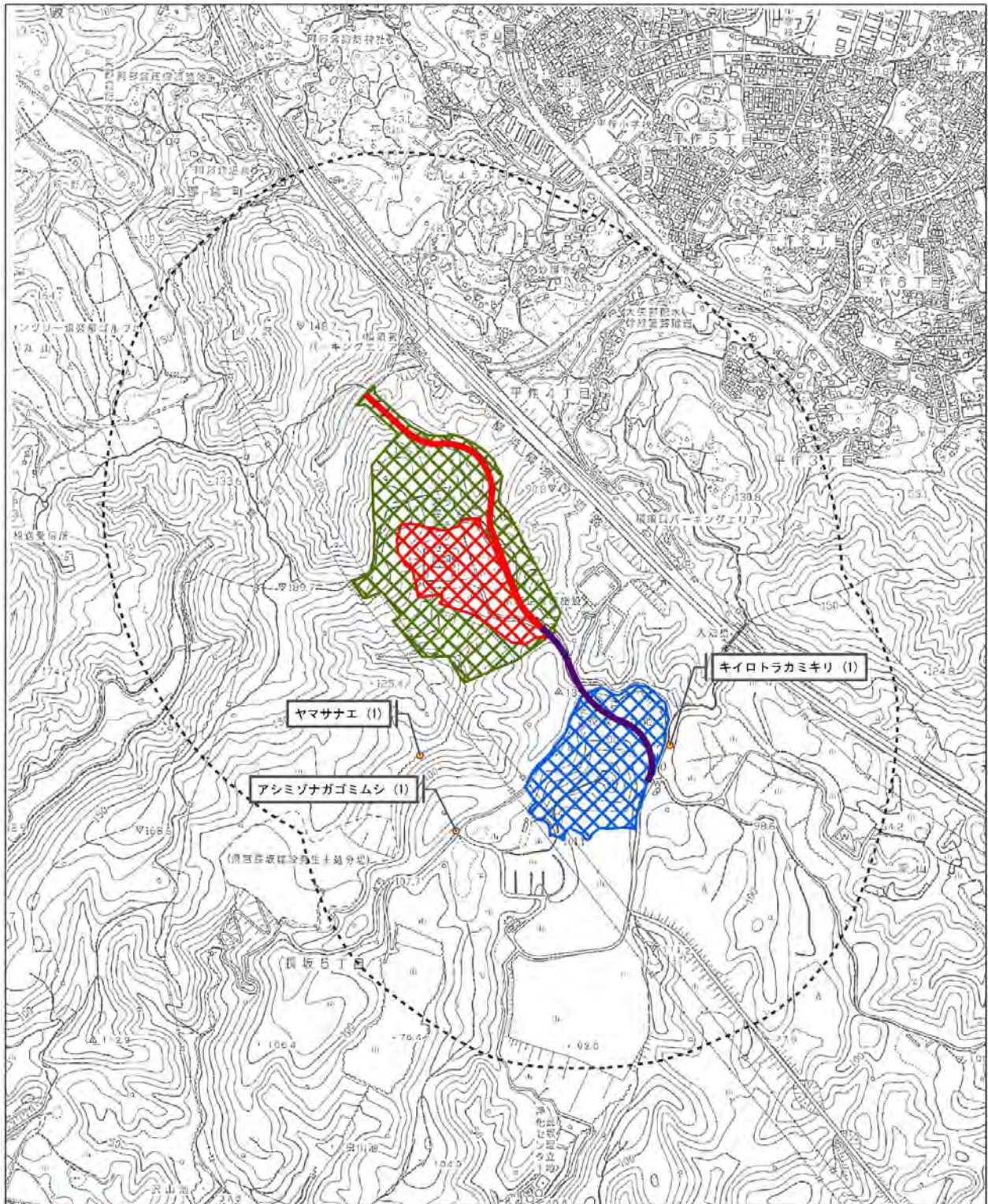


図 5-2-1-10-17(4/5)
重要な昆虫類の確認地点
(平成 25 年 5 月)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> ● 重要な種の確認地点 ※ ()内の数字は確認個体数を示す。 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
---	---

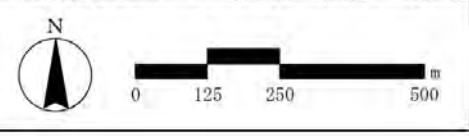


図 5-2-1-10-17(5/5)
重要な昆虫類の確認地点
(平成 25 年 6 月)

ウ 生息環境等との関わり

ア) 調査事項

調査事項は、気象、水象、地象、植物等の生育環境と動物との関わり及び動物相互の関わりとした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 動物相」と同様の範囲とした。

ウ) 調査方法

調査方法は、既存資料の収集・整理とした。

エ) 調査結果

気象、水象、地象の状況は、「(1) 植物 オ 生育環境との関わり」に示したとおりである。なお、植物等の生育環境と動物の関わり及び動物相互の関わりについては、生態系の観点から「(4) 生態系」で詳述する。

エ 対象事業の計画の状況

ア) 調査事項

造成工事の範囲及び施工方法とした。

イ) 調査範囲

実施区域とした。

ウ) 調査方法

工事計画及び事業計画等の把握により行った。

エ) 調査結果

対象事業の工事計画等の内容は、「別添4-2 2 建設工事等」(P. 111)に示すとおりである。

実施区域の敷地面積は、発生土処分場の建設(約7.0ha)、宅地の造成(約18ha、このうち廃棄物処理施設区域 約4.4ha、残置森林 約13.6ha)、関連事業の新設搬入道路(約700m)及び既設改修道路(約450m)である。

なお、新設搬入道路の計画策定は、自然環境の影響を低減するため、一部トンネル化することにより、既存の樹林環境を多く確保し、可能な限り自然環境への影響を低減する。造成に伴う法面については、既存の樹林環境を確保するため傾斜を大きくとる。発生土処分場の跡地については、既設道路等の改修計画以外の場所は森林法に基づき自然林となるよう管理する。

(3) 水生生物

ア 水生生物相

ア) 調査項目

実施区域を流れる排水路から沢山池までの範囲及び長坂埋立地浄化センター放流口下流から萩野川合流点までの範囲に生息する魚類、ベントスの種名及び分布状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、実施区域の下流河川である3区間とした。調査範囲及び調査地点は、図5-2-1-10-18 (P. 471) に示すとおりである。

ウ) 調査方法

a 既存資料調査

実施区域内及びその周辺地域の水生生物について、国または地方公共団体等の公的機関から入手可能な資料の収集を行い、横須賀市または萩野川に記録のある生息確認種、重要な種について整理した。

収集した既存資料は、表5-2-1-10-48に示すとおりである。

表 5-2-1-10-48 水生生物既存資料一覧

番号	資料名	発行者	発行年
①	「地域環境評価書 －三浦半島南部地域－」	神奈川県環境部	平成2年
②	「横須賀市芦名地区産業廃棄物 最終処分場建設事業 環境影響予測評価書」	神奈川県	平成12年
③	「Y-HEART計画基盤整備事業 環境影響予測評価書案」	西武鉄道株式会社	平成12年

b 現地調査

現地調査の調査内容は、表5-2-1-10-49に示すとおりである。

表5-2-1-10-49 水生生物現地調査内容

調査項目		調査時期・回数	調査方法
水生生物相	魚類	春、夏、秋、冬：各1回	任意採集法、トラップ法
	ベントス	早春、春、夏：各1回	任意採集法、コドラート法

a) 魚類

調査地点は、図5-2-1-10-18に示すとおりである。

調査地点において投網・タモ網、カゴワナ等を用いて可能な限り採集するとともに、目視により直接観察された種についても記録した。捕獲あるいは観察された魚類は、種名及び個体数を記録した。

b) ベントス

調査地点は、図5-2-1-10-18に示すとおりである。

i 任意採集法

任意採集法では、甲殻類やトンボの幼虫（ヤゴ）などを確認するために、水際や淵などの環境において採集を行った。採集には目合2mm程度のタモ網を使用し、採集したベントスで精査を必要とするものは10%のホルマリンで固定して持ち帰り、種を同定した。

ii コドラート法

調査地点の水深10cm～20cm程度の瀬（原則として早瀬）を中心に、適当な採集地点に50cm×50cmコドラート（方形枠）を置き、その下流側にサーバーネットを設けてコドラート内の礫等を静かに起こしながら、それらに付着するベントスをネット内に採集した。採集した試料は現場で10%のホルマリンで固定して持ち帰り、種の同定と個体数の計数を行った。

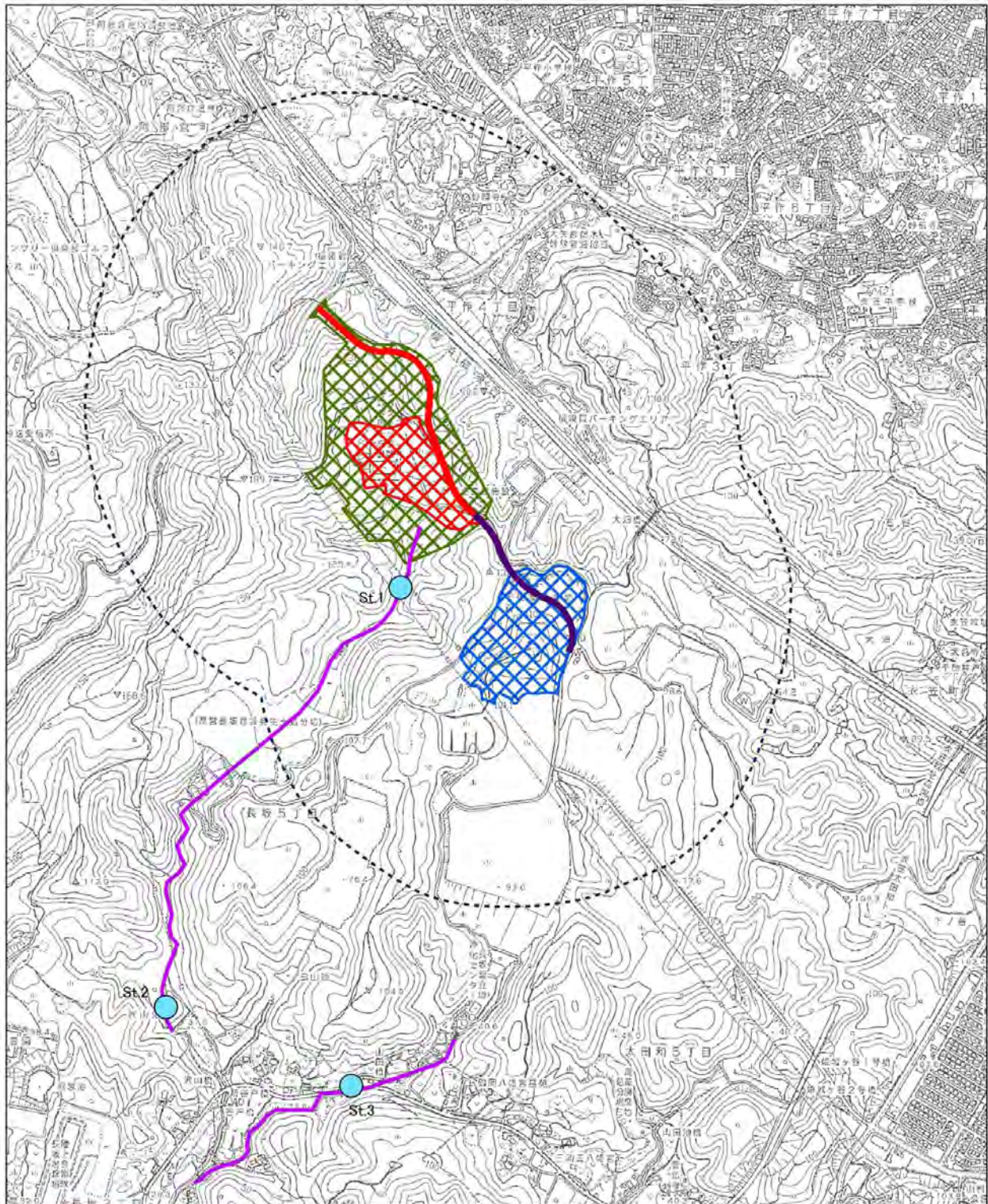
エ) 調査期日









現地調査は、各項目の調査適期に実施した。

各調査項目における調査期日及び調査方法は、表 5-2-1-10-50 に示すとおりである。

表5-2-1-10-50 水生生物調査期日

調査事項	調査時期	調査期日	調査方法
魚類	夏季	平成24年 8月14日	任意採集法、トラップ法
	秋季	平成24年 10月17日	同上
	冬季	平成24年 12月10日	同上
	春季	平成25年 4月30日	同上
ベントス	夏季	平成24年 8月14日	任意採集法、コドラート法
	早春季	平成25年 3月 6日	同上
	春季	平成25年 4月30日	同上



凡例		: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)		: 水生生物調査地点
		: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))		: 水生生物調査区間
		: 発生土処分場		
		: 調査範囲		
		: 新設搬入道路		
		: 既設改修道路		

N


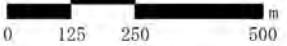



図 5-2-1-10-18
調査地点(水生生物)

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

オ) 調査結果

a 既存資料調査

既存資料調査により確認された分類群別の確認種概要は、表5-2-1-10-51に示すとおりである。

既存資料により確認された動物は、魚類7種であった。このうち、表5-2-1-10-54の選定基準に該当する重要な種は5種であった（表5-2-1-10-51）。

表5-2-1-10-51 既存資料調査による水生生物分類群別の確認種概要

分類群		合計種数	重要な種	
			種数	主な種名
水生生物	魚類	7種	5種	コイ、アブラハヤ、オオヨシノボリ、ルリヨシノボリ、クロヨシノボリ

b 現地調査

a) 魚類

i 確認種

現地調査による確認種は、表5-2-1-10-52に示すとおりである。現地調査による確認種は、合計2目2科3種であった。なお、表中には既存資料調査による確認種も記載した。

ii 確認状況

魚類が確認された地点は、St.3だけであった。

表5-2-1-10-52 魚類確認種

番号	目名	科名	種名		文献	St.1				St.2				St.3				重要種
			和名	学名		夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	
1	コイ	コイ	コイ		●													○
2			アブラハヤ		●													○
3			ドジョウ												2	2	2	○
4	スズキ	スズキ	スズキ		●													○
5			ボウズハゼ											1			○	
6			シマヨシノボリ		●									4	16	6	7	○
7			オオヨシノボリ		●													○
8			ルリヨシノボリ		●													○
9			クロヨシノボリ		●													○
合計	2目	4科	9種		7種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	0個体 0種	4個体 1種	19個体 3種	8個体 2種	9個体 2種	7種

注) 分類及び種名は「日本産野生生物目録 脊椎動物編」(平成5年、環境庁)に従った。

b) ベントス

i 確認種

確認された分類群別の科種数は、表5-2-1-10-53に示すとおりである。

確認種は、合計7綱20目55科97種であった。なお、表中には既存資料調査による確認種(表中^{注)})も記載した。現地調査では、ハエ目5科16種、カゲロウ目8科8種、トンボ目5科8種、トビケラ目6科7種、コウチュウ目4科6種等の昆虫類が多く、その他に、エビ目5科8種等が確認された。確認種は分布域の広い種で、調査地域の環境を反映して沢、池、平地を流れる小河川に生息する種が多く確認されたほか、ヤマトヌマエビやモクズガニ等の回遊性の甲殻類も確認された。

表5-2-1-10-53 ベントス分類群別の確認科数・種数

綱	目名	科数	種数 ^{注)}	種数	主な確認種
渦虫	三岐腸	1	1	1	ナミウズムシ
腹足	原始紐舌	1		1	ヒメタニシ
	盤足	1	1	1	カワニナ
	基眼	2		2	ハブタエモノアラガイ、サカマキガイ
二枚貝	マルスダレガイ	1		1	Corbicula属
ミミズ	イトミミズ	1	1	1	エラミミズ
ヒル	無吻蛭	1	1	1	ナミイシビル
軟甲	ヨコエビ	1		1	ハマトビムシ科
	ワラジムシ	1	1	1	ミズムシ
	エビ	5	7	9	ヤマトヌマエビ、ミナミヌマエビ、ヌマエビ、ミナミテナガエビ、アメリカザリガニ、サワガニ、モクズガニ
昆虫	カゲロウ (蜉蝣)	8	13	14	シロハラコカゲロウ、シロタニガワカゲロウ、フタスジモンカゲロウ
	トンボ (蜻蛉)	6	8	11	アサヒナカワトンボ、ミルンヤンマ、コオニヤンマ、シオカラトンボ
	カワゲラ (セキ翅)	3	6	6	Amphinemura属、Neoperla属
	カメムシ (半翅)	2		4	アメンボ、ヒメアメンボ、シマアメンボ、エサキコミズムシ
	ヘビトンボ	2	4	3	ヤマトクロスジヘビトンボ、ヘビトンボ
	アミメカゲロウ (脈翅)	1		1	ヒロバカゲロウ科
	トビケラ (毛翅)	9	10	11	Cheumatopsyche属、ウルマーシマトビケラ、Lepidostoma属
	ハエ目 (双翅)	5	9	20	Tipula属、ウスギヌヒメユスリカ、Stictochironomus属、Simulium属
	コウチュウ (鞘翅)	4	7	8	マメゲンゴロウ、キイロヒラタガムシ、マルガムシ、ゲンジボタル
7綱19目55科97種					

注) 既存資料調査による。

分類体系は、国土交通省「河川水辺の国勢調査ための生物リストー底生動物」(2012年9月5日更新版)に依った(<http://mizukoku.nilim.go.jp/ksnkankyo/mizukokuweb/system/seibutsuListfile.htm>)。

ii 確認状況

コドラート法における調査地点別の結果は、図5-2-1-10-19～図5-2-1-10-20に示すとおりである。

確認種数はSt. 3が多く、季節による大きな変化はみられなかった。池で調査を実施したSt. 2は、個体数が少なかった。個体数は、St. 3では夏が一番多く、春が少なかった。早春季及び春季調査時は、夏季と比較して泥が堆積し、河床が埋没していた事が要因の一つであると推察された。

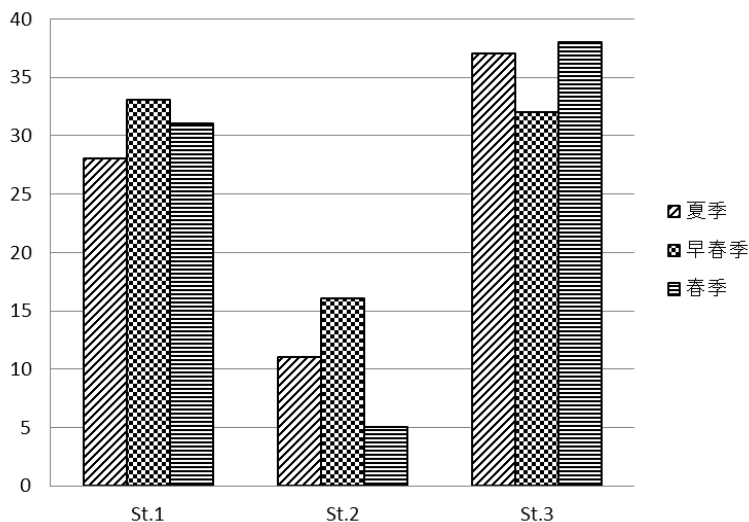


図 5-2-1-10-19 ベントスの確認種数

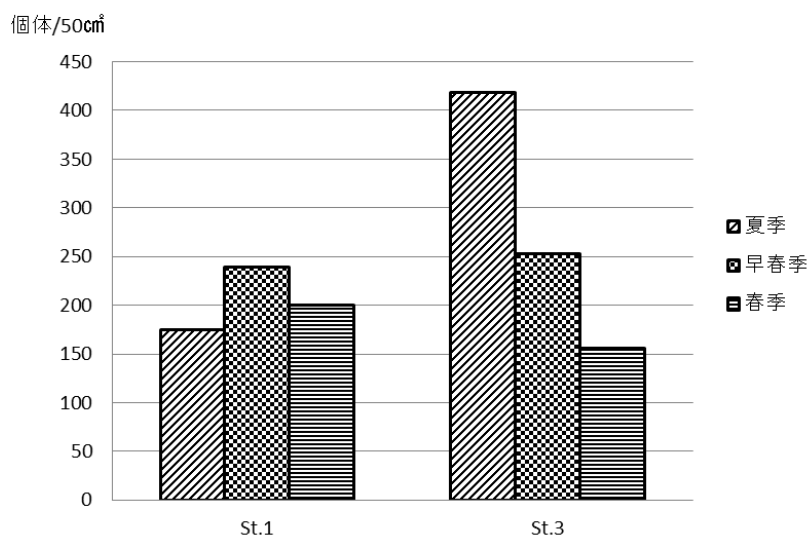


図5-2-1-10-20 ベントスの確認個体数

イ 重要な水生生物種、個体群と生育及び生息地

ア) 調査事項

調査地域に生育・生息する重要な水生生物の確認地点、個体数、繁殖行動、採食行動等とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 水生生物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果を踏まえ、学術上または希少性の観点から、表5-2-1-10-54に示した選定基準に該当するものを、重要な水生生物として抽出した。

表5-2-1-10-54 重要な水生生物の選定基準

番号	選定基準	カテゴリー
①	「文化財保護法」(昭和25年、法律第214号)	天然記念物 特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年、法律第75号)	国内希少野生動植物種 国際希少野生動植物種 緊急指定種
③	「環境省 第4次レッドリスト」(平成24年、環境省) 「環境省 第4次レッドリスト(汽水・淡水魚類)」(平成25年、環境省)	絶滅(EX) 野生絶滅(EW) 絶滅危惧種ⅠA類(CR) 絶滅危惧種ⅠB類(EN) 絶滅危惧種Ⅱ類(VU) 準絶滅危惧(NT) 情報不足(DD) 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)に記されている種	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足 不明種 絶滅のおそれのある地域個体群

エ) 調査結果

a 魚 類

重要な魚類として、ドジョウ、ボウズハゼが抽出された。

抽出結果は、表 5-2-1-10-55 に、各種の確認状況及び一般生態は、表 5-2-1-10-56 に示すとおりである。また、確認地点は、図 5-2-1-10-21 (1/3)～(3/3)に示すとおりである。

表5-2-1-10-55 重要な魚類一覧

番号	科名	種名	選定基準			
			①	②	③	④
1	コイ	ドジョウ			DD	
2	ハゼ	ボウズハゼ				準絶滅危惧
合計	2科	2種	0種	0種	1種	1種

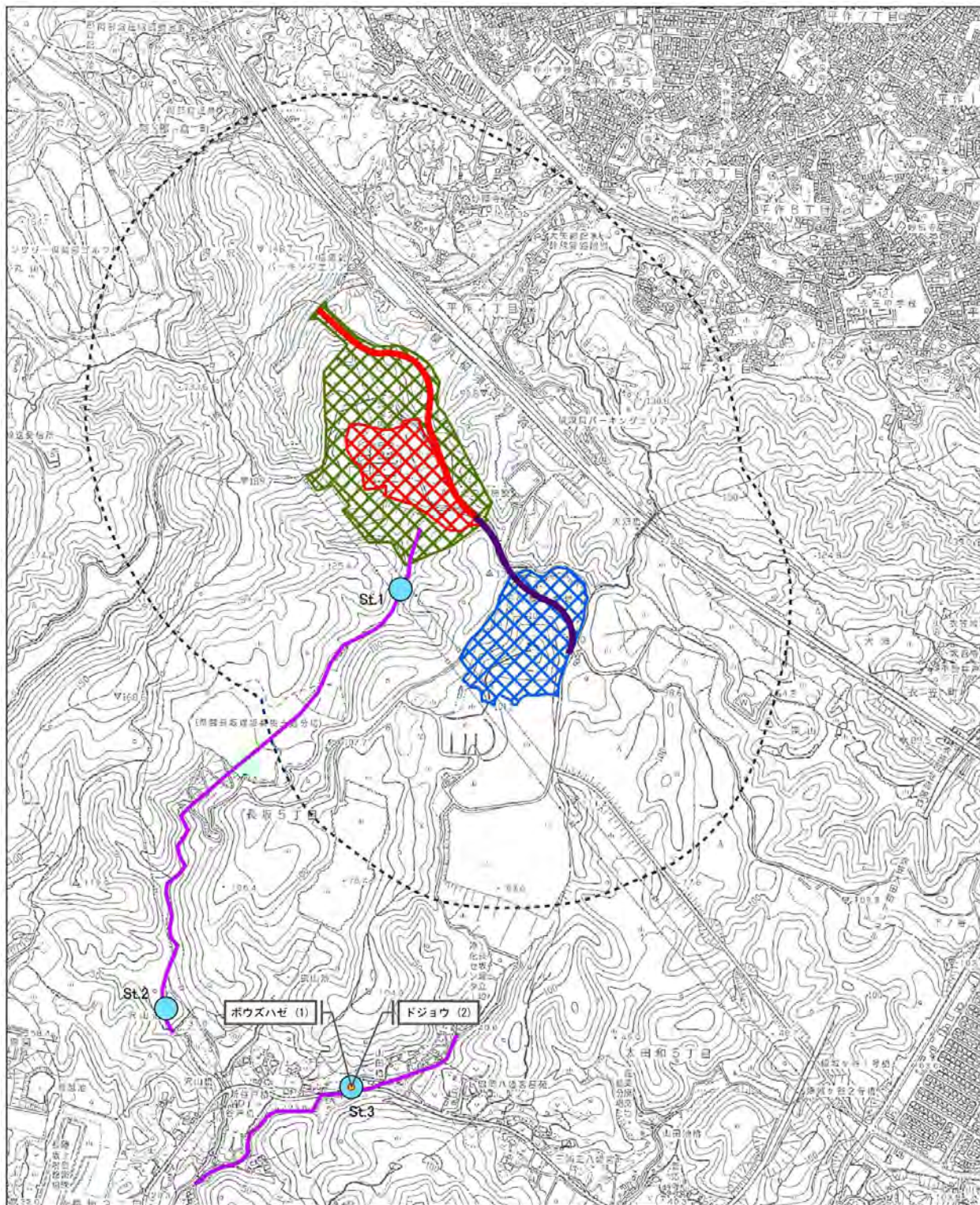
注) 重要な種の選定基準は、表5-2-1-10-54に示すとおりである。









表5-2-1-10-56 重要な魚類の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ドジョウ	確認状況	秋季に、St. 3で2個体が確認された。 冬季に、St. 3で2個体が確認された。 春季に、St. 3で2個体が確認された。
	一般生態	生息域は細流、浅い池沼、水田などの泥底部あるいは、泥の中で、有機物や底生生物を食べ、冬は泥に潜って冬眠する。 国内では、北海道から沖縄にかけて分布する。県内では広く全域に分布する。
ボウズハゼ	確認状況	秋季に、St. 3で1個体が確認された。
	一般生態	生息域は河川の上・中流域で、流れのある瀬を好み、付着藻類を食べる。 国内では、関東地方以西の太平洋側から琉球列島。県内では、全域の主要河川から採集されている。

出典：「環境省 第4次レッドリスト（汽水・淡水魚類）」（平成25年、環境省）

「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）



凡例		: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)		: 重要な種の確認地点
		: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))	※ () 内の数字は確認個体数を示す。	
		: 発生土処分場		: 水生生物調査地点
		: 調査範囲	注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、 搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される 法面等を含んでいる。	
		: 新設搬入道路		
		: 既設改修道路		

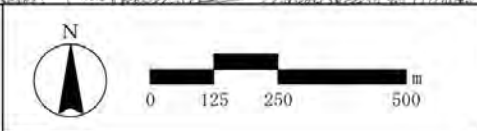
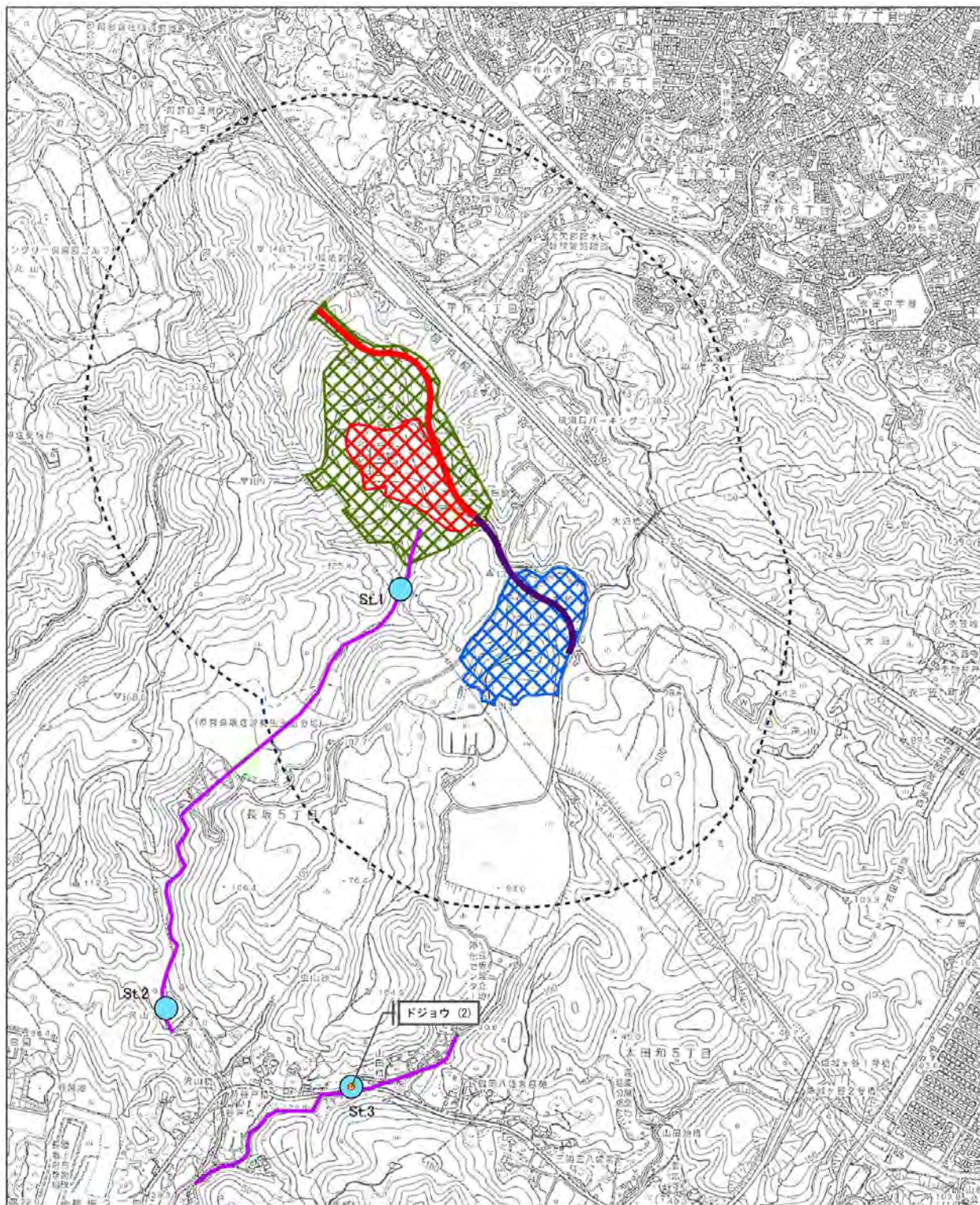


図 5-2-1-10-21 (1/3)
重要な魚類の確認地点 (秋季)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。 : 水生生物調査地点 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
--	--

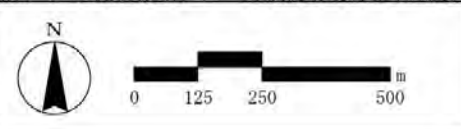
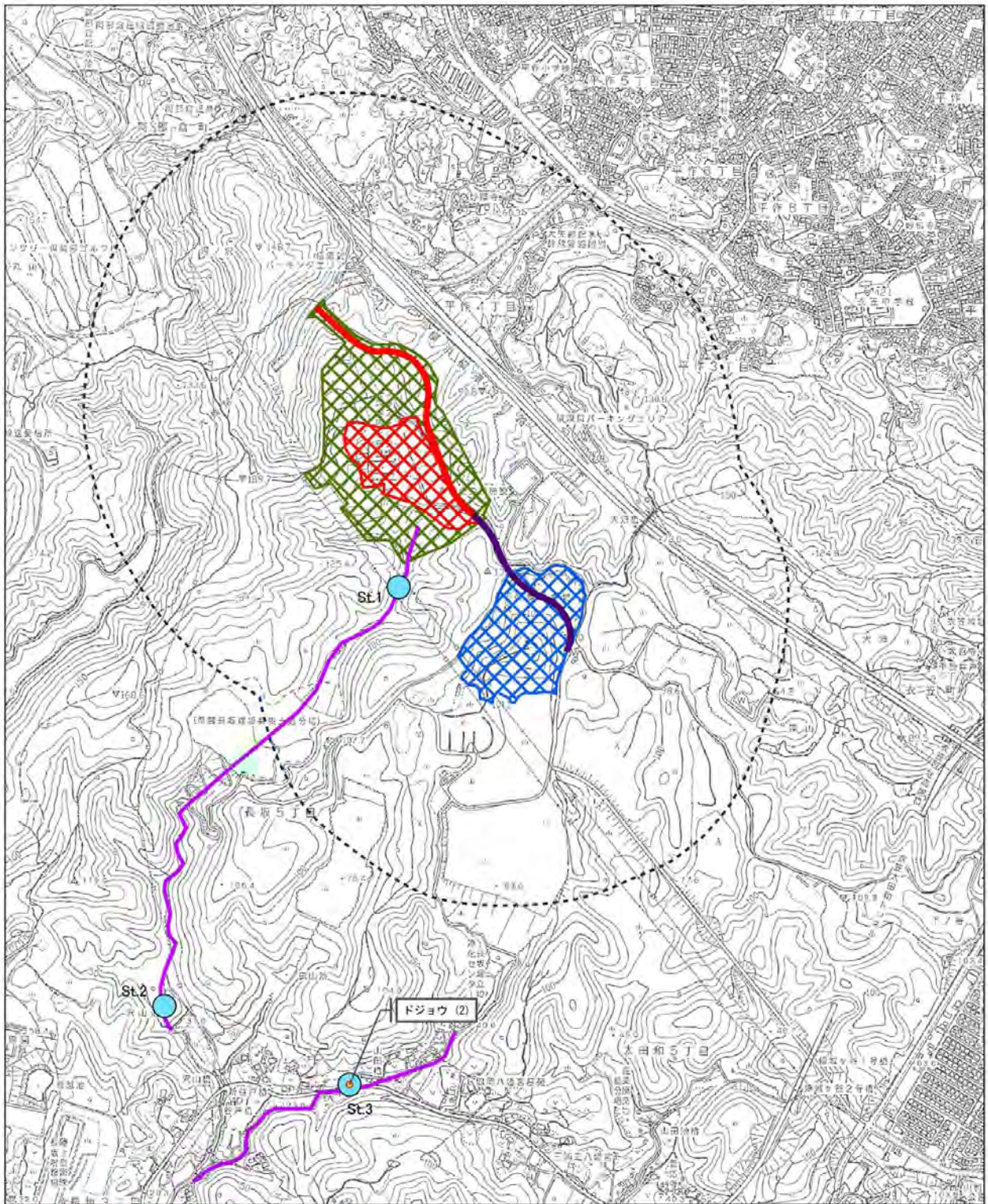


図 5-2-1-10-21 (2/3)
重要な魚類の確認地点 (冬季)



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。 : 水生生物調査地点 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
--	---

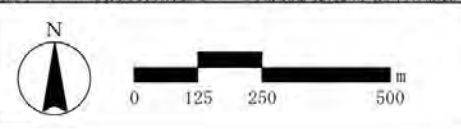


図 5-2-1-10-21 (2/3)
重要な魚類の確認地点 (春季)

b ベントス

重要なベントスとして、ミルンヤンマ、エサキコミズムシ（コミズムシ類）の2科2種が抽出された。

抽出結果は、表5-2-1-10-57に、各種の確認状況及び一般生態は、表5-2-1-10-58に示すとおりである。また、確認地点は、図5-2-1-10-22 (1/3)～(3/3)に示すとおりである。

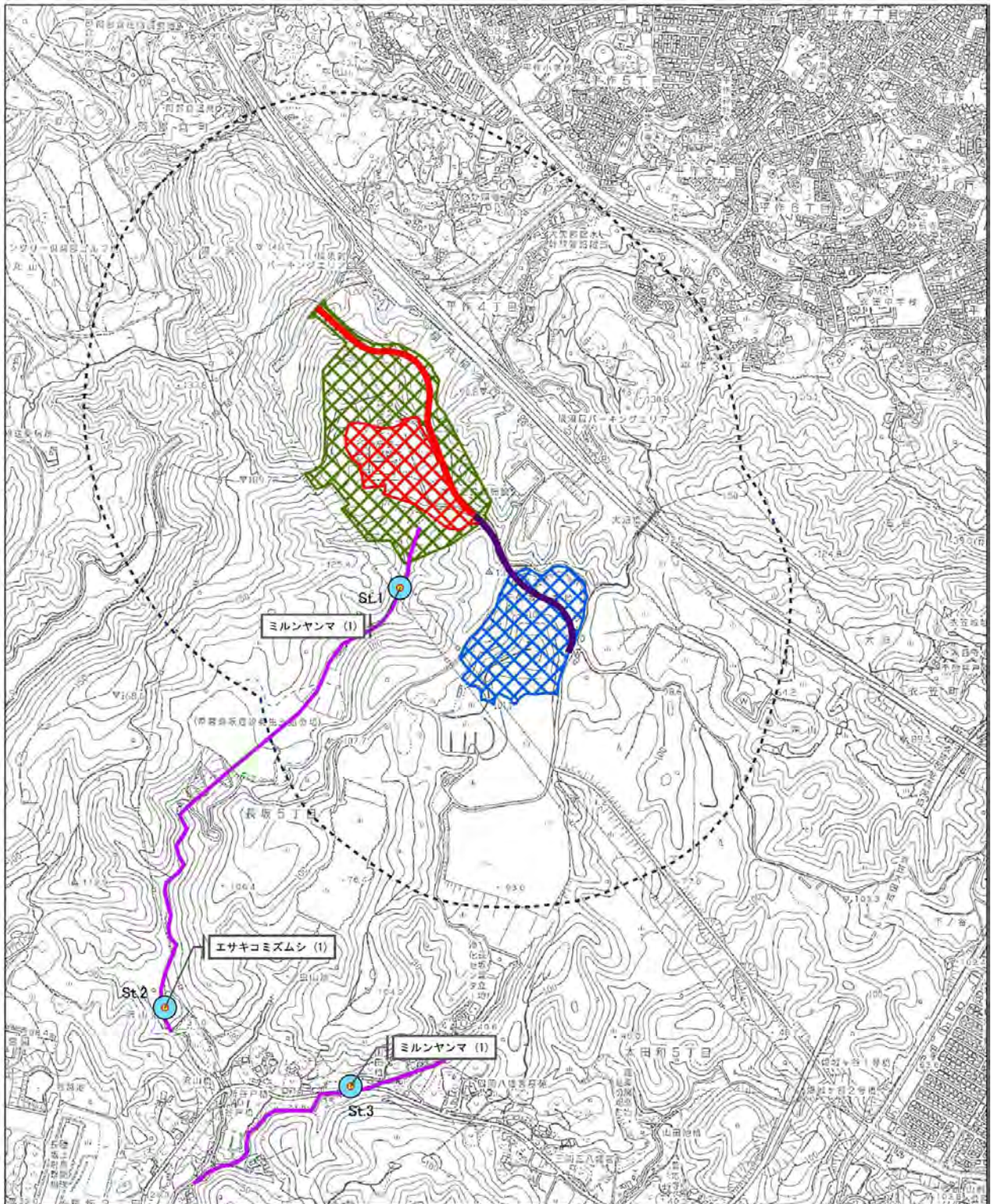
表5-2-1-10-57 重要なベントス一覧

番号	科名	種名	選定基準			
			①	②	③	④
1	ヤンマ	ミルンヤンマ				要注意種
2	ミズムシ	エサキコミズムシ				情報不足
合計	2科	2種	0種	0種	0種	2種

注) 重要な種の選定基準は、表5-2-1-10-54(P. 476)に示すとおりである。

表5-2-1-10-58 重要なベントスの確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ミルンヤンマ	確認状況	夏季に、St. 1及びSt. 3で1個体が確認された。 早春に、St. 1で2個体が確認された。 春季に、St. 1で3個体が確認された。
	一般生態	幼虫の生息域は、河川源流域～上流域で、コシボソヤンマとは明確に棲み分ける。8月頃を中心に羽化し、成熟成虫は9月から10月頃まで出現する。黄昏活動性が強いが、秋以降その時間帯が日中に移行する。 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、ほぼ全域に生息する。
エサキコミズムシ (コミズムシ類)	確認状況	夏季に、St. 2で1個体が確認された。
	一般生態	ため池、水田等に生息し、植物の豊富な環境を好む。 国内では、北海道～九州にかけて分布する。県内の生息状況は不明である。





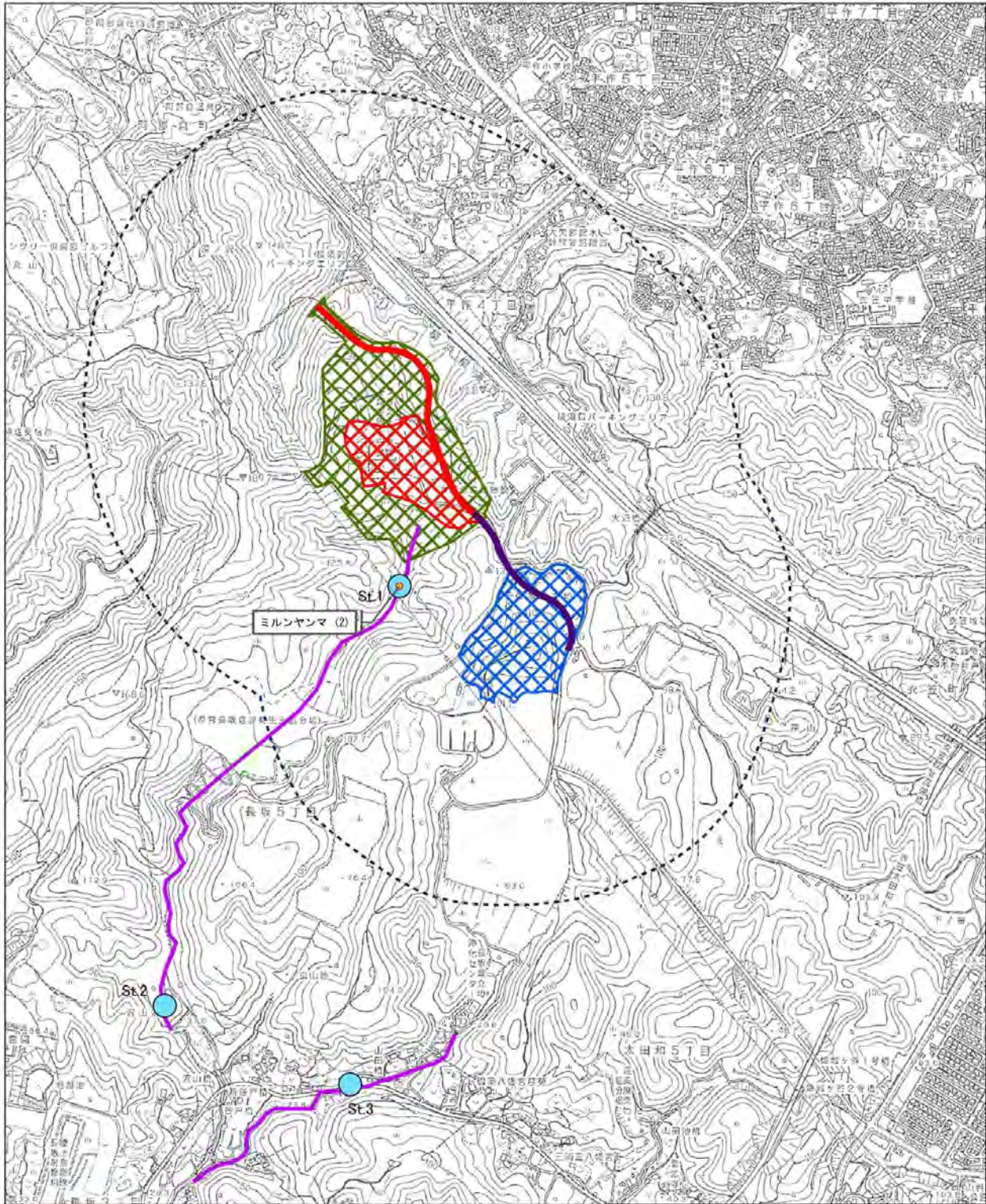
<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : 重要な種の確認地点 ※ () 内の数字は確認個体数を示す。 : 水生生物調査地点 <p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>	<div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div>
---	--	--

図 5-2-1-10-22 (1/3)
重要なベントスの確認地点 (夏季)



凡例

- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
- : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
- : 発生土処分場
- : 調査範囲
- : 新設搬入道路
- : 既設改修道路
- : 重要な種の確認地点
- ※ () 内の数字は確認個体数を示す。
- : 水生生物調査地点

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

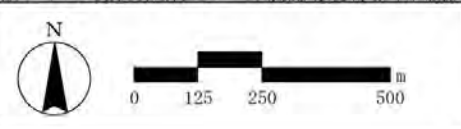
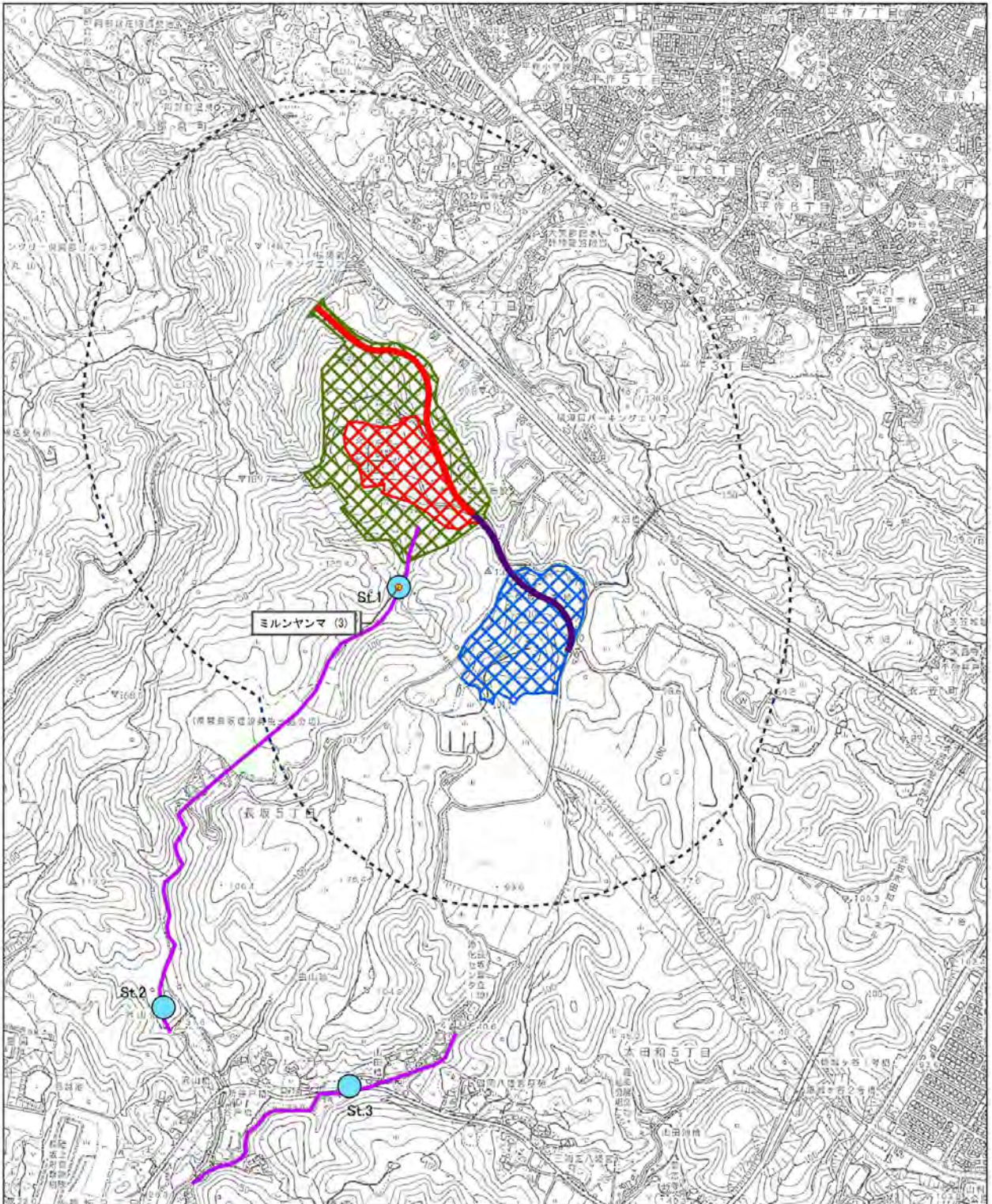










図 5-2-1-10-22 (2/3)
重要なベントスの確認地点 (早春季)



凡例		: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)		: 重要な種の確認地点
		: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))	※ () 内の数字は確認個体数を示す。	
		: 発生土処分場		: 水生生物調査地点
		: 調査範囲	注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、 搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される 法面等を含んでいる。	
		: 新設搬入道路		
		: 既設改修道路		


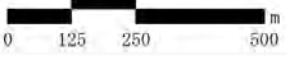



図 5-2-1-10-22 (3/3)
重要なベントスの確認地点 (春季)

ウ 生育及び生息環境等との関わり

ア) 調査事項

調査事項は、気象、水象、地象等の生育及び生息環境と水生生物との関わり及び水生生物相互の関わりとした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 水生生物相」と同様の範囲とした。

ウ) 調査方法

調査方法は、既存資料の収集・整理及び現地調査とした。

エ) 調査結果

実施区域を流れる二つの河川を対象とした。第一に、排水路から沢山池までで、概ね流れ幅1m、水深0.1～0.5m程度の小河川である。河床のほとんどの区間は砂礫よりなっていたが、沢山池に向かうにつれ砂泥に変わる。第二に、長坂埋立地浄化センター放流口下流から荻野川合流までで、概ね流れ幅2～3m、水深0.1～0.5m程度の小河川である。河床は砂礫・砂泥よりなっていた。二つの河川は最終的に荻野川へと向かう。

沢山池手前には高さ5m程度のコンクリートの落差工があり、荻野川からの生物の移動の妨げになっているものと考えられる。夏季調査時は、ほぼ干上がっていたことから水位変動が大きいものと思われる。

本調査における調査地点は、これら二つの小河川と沢山池にあり、調査地点間における環境の違いは大きいものと推察される。

エ 対象事業の計画の状況

ア) 調査事項

調査事項は、建設工事による土地の形状の変更行為の内容、建設工事に伴い発生するおそれがある濁水の対策とした。

イ) 調査範囲

実施区域とした。

ウ) 調査方法

工事計画及び事業計画等の把握により行った。

エ) 調査結果

対象事業の工事計画等の内容は、「別添4-2 2 建設工事等」(P. 111)に示すとおりである。

実施区域の敷地面積は、発生土処分場の建設(約7.0ha)、宅地の造成(約18ha、このうち廃棄物処理施設区域 約4.4ha、残置森林 約13.6ha)、関連事業の新設搬入道路(約700m)及び既設改修道路(約450m)である。

(4) 生態系

ア 環境類型の区分

ア) 調査事項

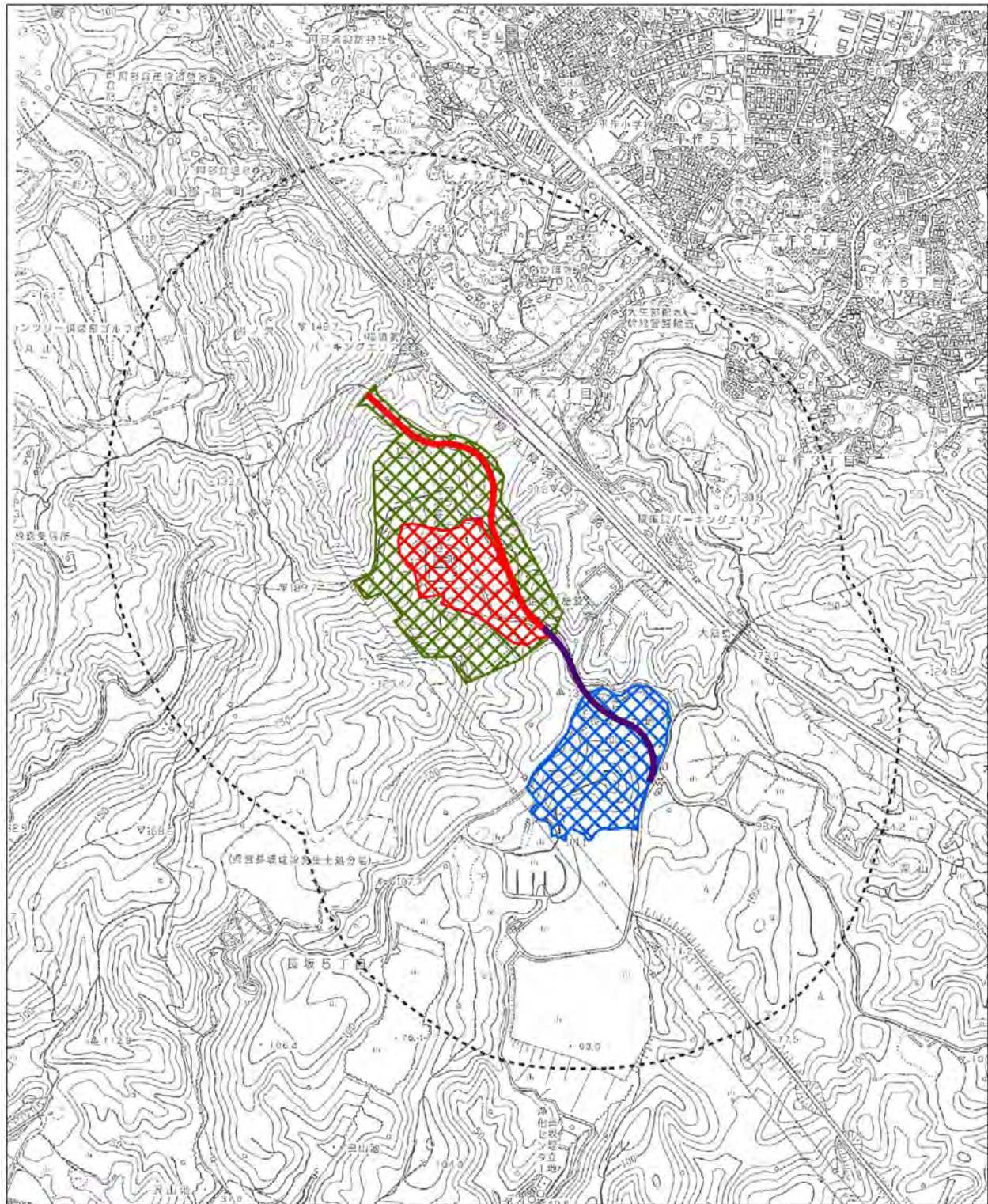
地象、水象、植物及び動物の調査結果、注目種・群集等の抽出の結果に基づく環境類型の区分とした。

イ) 調査範囲及び調査期間

実施区域内及びその境界から500mの範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-23に示すとおりである。

ウ) 調査方法

地象、水象、植物、動物及び水生生物の調査結果、注目種・群集等の抽出結果に基づき、調査地域を特徴づける生態系を環境類型ごとに区分した。



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<p>注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
--	--



図 5-2-1-10-23 調査範囲 (生態系)

エ) 調査結果

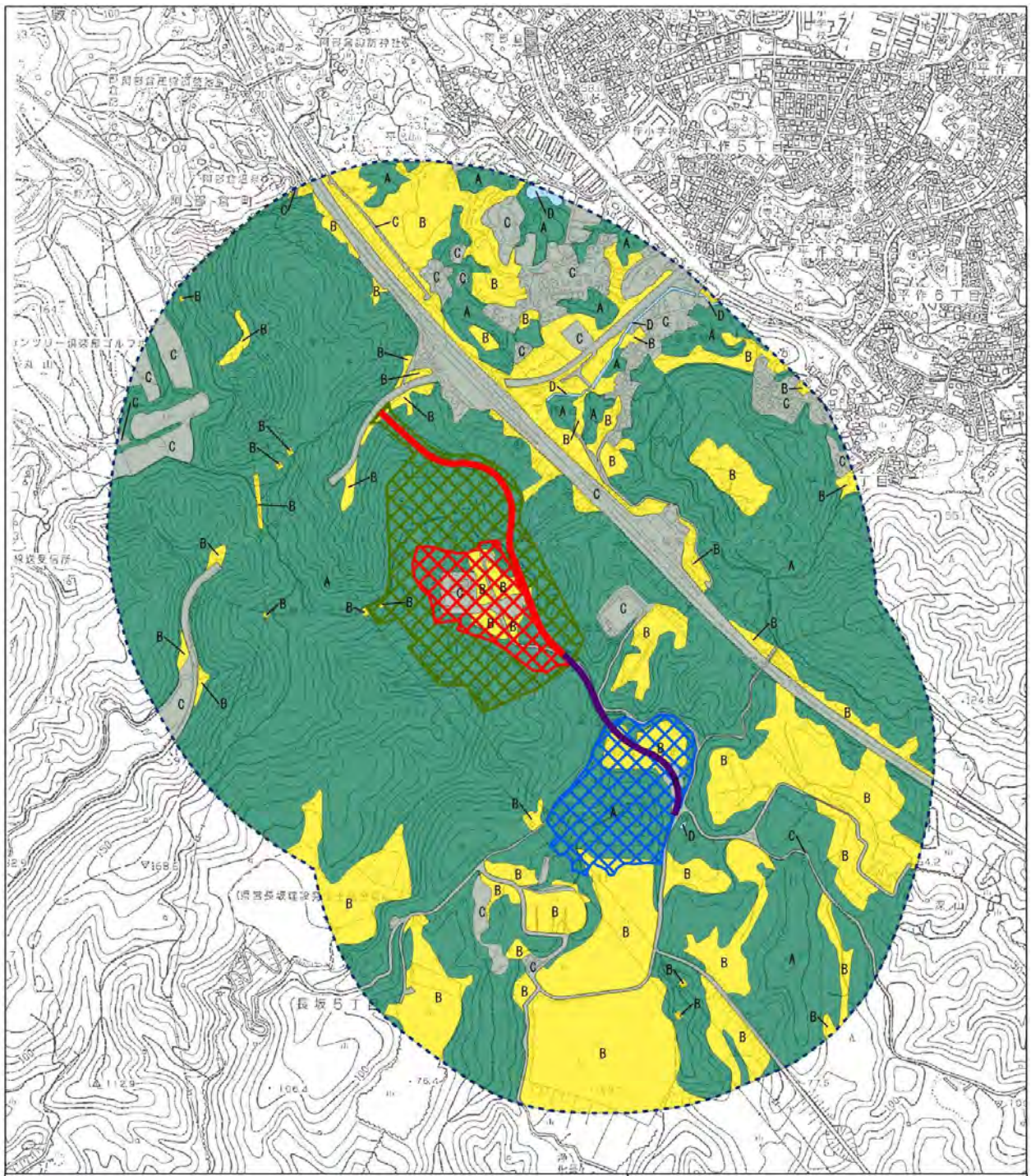
調査範囲の環境類型を、アカメガシワーカラスザンショウ群落及びオオシマザクラ植林を主体とした「森林生態系」、ススキ群団及びその他植林を主体とした「草地生態系」、市街地及び緑の多い住宅地を主体とした「市街地生態系」、開放水域の「水辺生態系」の4タイプに区分し、図5-2-1-10-24に示した。調査範囲における環境類型区分ごとの占有面積を表5-2-1-10-59に、各区分の特性を表5-2-1-10-60に示した。









調査範囲における各環境類型区分の占有面積比率は、森林生態系が66.6%、草地生態系が21.8%、市街地生態系が11.5%、水辺生態系が0.2%であった。

表 5-2-1-10-59 調査範囲における各環境類型区分の占有面積

環境類型区分	予測範囲		実施区域							
			面積		比率		宅地の造成		発生土処分場	
	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
森林生態系	170.30	66.6	18.68	80.6	2.09	47.9	11.58	98.6	5.01	70.9
草地生態系	55.77	21.8	2.93	12.6	1.07	24.5	0.14	1.2	1.72	24.3
市街地生態系	29.30	11.5	1.57	6.8	1.20	27.5	0.03	0.3	0.34	4.8
水辺生態系	0.45	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	255.83	100.0	23.18	100.0	4.36	100.0	11.75	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



- 凡例
- | | | | |
|---|--------------------------|---|----------|
|  | : 廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む) |  | : 森林生態系 |
|  | : 宅地の造成
(残置森林 (最大範囲)) |  | : 草地生態系 |
|  | : 発生土処分場 |  | : 市街地生態系 |
|  | : 調査範囲 |  | : 水辺生態系 |
|  | : 新設搬入道路 | | |
|  | : 既設改修道路 | | |

注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

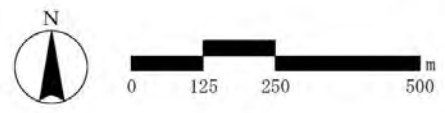


図 5-2-1-10-24 環境類型区分

表 5-2-1-10-60 各環境類型区分の特性

環境類型区分		森林生態系	草地生態系	市街地生態系	水辺生態系	
群落名		シイ・カシ二次林 ケヤキ群落 オニシバリーコナラ群集 アカメガシワーカラスザンショウ群落 スギ植林 オオシマザクラ植林 竹林	メダケ群落 アズマネザサ群落 ススキ群団 クズ群落 その他植林 畑雑草群落	水田雑草群落 ゴルフ場・芝地 緑の多い住宅地 市街地 造成地	開放水域	
主な分布	実施区域周辺	調査範囲の谷、斜面、尾根に広く分布	調査範囲北側の低地～丘陵地 調査範囲中央部の谷 調査範囲南側の丘陵地及び谷	調査範囲北側の低地～丘陵地 調査範囲西側の丘陵地及び谷	横須賀しょうぶ園に隣接の池 平作川	
	実施区域	廃棄物処理施設	造成地や法面の植林	造成跡の草地及び植栽地	現処理施設 造成地	—
		宅地の造成	山地斜面及び尾根	造成跡の草地の一部	造成地の一部	—
		発生土処分場	山地斜面 造成法面	造成跡の草地	造成地	—
環境類型区分の特性		<p>主に山地の樹林が含まれ、調査範囲のおよそ3分の2を占める。 褐色森林土を立地基盤とし、アカメガシワーカラスザンショウ群落とオオシマザクラ植林が大部分を占める。また、オニシバリーコナラ群集、スギ植林、竹林のほか、小面積ながら比較的自然度が高いシイ・カシ二次林とケヤキ群落が分布する。</p> <p>これらの森林環境に生育する植物を生産者として、低次消費者から高次消費者を含む多様な森林性の種が、特徴的な動物相を形成している。 タヌキ、タイワンリス、アカネズミ、ヒメネズミなどの哺乳類、フクロウ、ホトトギス、アオバトなどの鳥類、スズメバチ類、セミ類、コオロギ類などの昆虫類のほか、爬虫類のトカゲ、両生類のシュレーゲルアオガエルなどが生息している。</p>	<p>低地から丘陵地の耕作地や造成地、またはそれらが放置されて成立した草地や低木林が含まれ、調査範囲のおよそ2割を占める。 畑雑草群落や造成跡に成立したススキ群団、クズ群落、あるいはそれらの立地に成立したメダケ群落やアズマネザサ群落のほか、緑化のための植栽地など、人為的な影響により形成された生態系で、生産者は草本や低木である。 動物相としては、草地性・林縁性の鳥類、爬虫類、昆虫類が比較的多いが、森林に接しているため、森林性の種もみられる。</p>	<p>調査範囲北側の低地や西側の谷、丘陵地の平地を中心とした地域が含まれ、調査範囲のおよそ1割を占める。 水田雑草群落、ゴルフ場・芝地、緑の多い住宅地、市街地、造成地などの、人為的な影響を強く受けた生態系で、生産者は植栽木のほかは草本が主体であり、特に外来草本が多く生育する。 動物相も哺乳類や爬虫類、両生類の種数は少ないが、ハシブトガラス、ツバメ、スズメなどの鳥類、ハンミョウ、シオヤブ、バッタ類などの昆虫類など、人為的環境に適した種が多くみられる。</p>	<p>横須賀しょうぶ園に隣接する池と、平作川がこのユニットに含まれるが、調査範囲における割合は小さい。 本区分においては植生は発達しておらず、ヨシ、ミゾソバ、セリなどの湿性植物がまばらにみられる程度である。 動物相としては、水辺を好むカワセミやセグロセキレイなどの鳥類のほか、トンボ類やカゲロウ類、トビケラ類などの昆虫類、シマヨシノボリ、ドジョウなどの魚類、ベントスのカワニナやミズムシなどが生息している。</p>	

イ 注目種・群集等の状況

ア) 調査事項

複数の注目種・群集等の生態、他の動植物との関係又は生息環境若しくは生育環境の状況とした。

イ) 調査範囲及び調査期間

実施区域内及びその境界から500mの範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-23(P.487)に示すとおりである。

調査期間は、「別添5-2-1 10.1 (1)植物～(3)水生生物」に示す期間とした。

ウ) 調査方法

植物相、動物相及び水生生物相のなかで、効率かつ効果的に生態系を把握できる種、群落及び群集について生活史、食性、繁殖習性、行動習性、生育生息地の特徴等、食物連鎖上の関係及び共生の関係の視点に基づき整理した。

エ) 調査結果

現地調査で確認された調査範囲の動植物相をもとに、地域の生態系を解析する上で重要と考えられる注目種を、上位性、典型性、特殊性の観点から、表5-2-1-10-61に示す上位性6種、表5-2-1-10-62に示す典型性4種を抽出した。特殊性に該当する種はみられなかった。

表5-2-1-10-61 地域の生態系を代表する注目種（上位性）

	種名	項目	内容
上位性	タヌキ	確認状況	実施区域内及びその周辺において、糞や足跡が確認されたほか、実施区域内（宅地の造成）に設置した自動撮影装置で1個体が撮影された。
		選定の根拠	郊外の住宅地周辺から山地まで広く分布する。雑食性で鳥類、野ネズミ、昆虫類、果実などを採食する。人家周辺に出没してゴミを漁ったりもする。調査範囲の地上性動物の食物連鎖の最上位に位置する。
	イタチ	確認状況	実施区域内（新規搬入道路）に設置した自動撮影装置で1個体が撮影されたほか、実施区域の周辺で糞が確認された。
		選定の根拠	水辺環境を好み、水田・河川敷などを主な生息地とする。ネズミ・鳥・カエルなどを食べるほか、水にもぐつての捕食も行う。調査範囲の地上性動物の食物連鎖の最上位に位置する。
	オオタカ	確認状況	実施区域内（発生土処分場）及び実施区域の周辺の上空を飛翔する個体が確認された。
		選定の根拠	留鳥として山麓から丘陵地の森林に生息し、主に中・小型の鳥類をとらえる。スギ・マツ類などの針葉樹の高木に営巣することが多い。調査範囲の森林生態系で食物連鎖の最上位に位置する。
	ノスリ	確認状況	実施区域内（宅地の造成）と実施区域の周辺を飛翔する個体が確認された。
		選定の根拠	留鳥または漂鳥。森林で繁殖する。非繁殖期には、川原、農耕地のような草原的環境にも生息する。調査範囲では、冬鳥として渡来し、草地環境の食物連鎖の最上位に位置する。
	フクロウ	確認状況	夜間調査で、実施区域内（宅地の造成）及びその周辺の林内から鳴き声のほか、飛翔する1個体が確認された。
		選定の根拠	留鳥として平地から低山の大木のある林や社寺林などに生息する。夜行性で日中は薄暗い林などで休んでいる。夕方から活動を始め、樹林や農耕地などでネズミ類や鳥類、爬虫類、両生類などを捕食する。調査範囲における森林生態系の食物連鎖の最上位に位置する。
	アオダイショウ	確認状況	実施区域の周辺の林道上で幼体の死骸が確認された。
		選定の根拠	山地の林から平野部までさまざまな環境にすむ。人家やその周辺に多く、民家の天井裏に住み着くことも多い。公園や寺社など、条件に恵まれれば大都会にも生息する。幼体はカエルやトカゲ類を食べる傾向が強いが、成長すると鳥や哺乳類の割合が高くなる。調査範囲における市街地生態系の食物連鎖の上位に位置する。

表5-2-1-10-62 地域の生態系を代表する注目種（典型性）

	種名	項目	内容
典型性	ノウサギ	確認状況	実施区域内及びその周辺の草地や林内で、目撃または糞が確認された。
		選定の根拠	低地から亜高山帯までの森林や草原など、様々な環境に生息するが、低山から山地帯に多い。夜行性で植物食。単独で生活し、多くの植物の葉、芽、枝、樹皮を採食する。
	アオゲラ	確認状況	実施区域内及びその周辺の林内で確認された。
		選定の根拠	常緑広葉樹林、モミ林、スギ林、落葉広葉樹林などいろいろなタイプの樹林にすむ。主に昆虫やクモ、ムカデなどを食べるが、果実も食べる。
	ヤマアカガエル	確認状況	実施区域内及びその周辺の水辺で卵塊や幼生が確認されたほか、林内で幼体や成体が確認された。
		選定の根拠	森林内の林床に生息する。繁殖期（2～3月頃）になると水辺に集まり、水田・湿地・河川敷の水溜まりなど、日当たりがよく、浅い止水域が産卵場に利用される。卵塊はゼリー状で球をつぶしたような形をしており、約1,500個の卵が含まれる。
	ゲンジボタル	確認状況	荻野川や沢山池付近で成虫が確認されたほか、荻野川で幼虫が確認された。
		選定の根拠	主に山間部の溪流や水田地帯を流れる水質の良好な小川等に生息し、成虫は5～7月頃に出現する。夜間、水辺を発光しながら飛翔し、雌に求愛する。交尾後、雌は岸辺のコケや落葉に産卵し、幼虫は水中でカワニナ・ヒメタニシなどを捕食して成長する。

ウ 生態系の機能の状況

ア) 調査事項

環境類型の区分及び注目種・群集等以外の手法による生態系の把握とした。

イ) 調査範囲及び調査期間

実施区域内及びその境界から500mの範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-23(P.487)に示すとおりである。

調査期間は、「別添5-2-1 10.1 (1)植物～(3)水生生物」に示す期間とした。

ウ) 調査方法

「環境類型の区分」及び「注目種・群集等の状況」以外の生態系の把握に必要な情報を既存資料又は現地調査で把握した。

エ) 調査結果

「環境類型の区分」及び「注目種・群集等の状況」以外の生態系の把握に必要な情報として、食物連鎖に着目し、既存資料又は現地調査で把握した結果に基づき、各区分の生態系構成要素（食物連鎖の構造）を表5-2-1-10-63に示した。

表 5-2-1-10-63 環境類型区分の生態系構成要素（食物連鎖の構造）

環境類型区分		森林生態系	草地生態系	市街地生態系	水辺生態系
群落名		シイ・カシ二次林 ケヤキ群落 オニシバリーコナラ群集 アカメガシワ-カラスザン ショウ群落 スギ植林 オオシマザクラ植林 竹林	メダケ群落 アズマネザサ群落 ススキ群団 クズ群落 その他植林 畑雑草群落	水田雑草群落 ゴルフ場・芝地 緑の多い住宅地 市街地 造成地	開放水域
高次消費者	第三次消費者	【哺乳類】 タヌキ、(アナグマ) 【鳥類】 フクロウ、ハイタカ	【哺乳類】 (キツネ) 【鳥類】 ノスリ	【哺乳類】 ハクビシン 【鳥類】 オオタカ、ハヤブサ 【爬虫類】 アオダイショウ	【哺乳類】 イタチ、アライグマ 【鳥類】 カワウ、ミサゴ、アオサギ
	第二次消費者	【哺乳類】 タイワンリス、(ヒミズ) 【鳥類】 ホトトギス、オオルリ、 アオゲラ 【爬虫類】 トカゲ 【両生類】 ヤマアカガエル、 シュレーゲルアオガエル 【昆虫類】 スズメバチ類	【哺乳類】 アカネズミ 【鳥類】 キジ、モズ 【爬虫類】 カナヘビ 【両生類】 アマガエル 【昆虫類】 カマキリ類、 アシナガバチ類	【哺乳類】 (アブラコウモリ) 【鳥類】 ハシブトガラス、 ハシボソガラス、ツバメ 【昆虫類】 ハンミョウ、シオヤアブ	【鳥類】 カワセミ、セグロセキレイ 【爬虫類】 ヤマカガシ 【両生類】 (ウシガエル) 【昆虫類】 アサヒナカワトンボ、 ミルンヤンマ、 ゲンゴロウ類 【魚類】 シマヨシノボリ 【ベントス】 モクズガニ、 アメリカザリガニ、 ゲンジボタル
低次消費者	第一次消費者	【哺乳類】 (ヒメネズミ) 【鳥類】 アオバト、メジロ、イカル 【昆虫類】 セミ類、コオロギ類、 ハムシ類	【哺乳類】 ノウサギ 【鳥類】 カワラヒワ、ベニマシコ、 ホオジロ 【昆虫類】 バッタ類、カメムシ類	【哺乳類】 (ハツカネズミ) 【鳥類】 スズメ 【昆虫類】 バッタ類	【鳥類】 カルガモ 【昆虫類】 カゲロウ類、ユスリカ類、 トビケラ類 【魚類】 ドジョウ 【ベントス】 ミズムシ、カワニナ
生産者		スダジイ、タブノキ、 シラカシ、ケヤキ、コナラ、 カラスザンショウ、 アカメガシワ、ヤマグワ、 スギ、オオシマザクラ、 モウソウチク、アオキ、 シロダモ、イヌビロ、 ムラサキシキブ、 ヤブツバキ、キツタ、 ヤブラン	メダケ、アズマネザサ、 ススキ、ヨモギ、 セイタカアワダチソウ、 アレチハナガサ、クズ、 スギナ、クワクサ、 スベリヒユ、イヌビユ、 植栽木 〈アラカシ、ウラジロガシ、 シラカシ、モッコク等〉	タネツケバナ、 メマツヨイグサ、 アレチハナガサ、 アメリカイヌホオズキ、 オオバコ、メヒシバ、 オオアレチノギク、 セイヨウタンポポ、 植栽木 〈カイヅカイブキ、 トウネズミモチ等〉	ヨシ、ミゾソバ、セリ、 (付着藻類)
分解者		(土壌微生物等)		(水中の微生物等)	

エ 対象事業の計画の状況

ア) 調査事項

造成工事の範囲及び施工方法とした。

イ) 調査範囲

実施区域とした。

ウ) 調査方法

工事計画及び事業計画等の把握により行った。

エ) 調査結果

対象事業の工事計画等の内容は、「別添4-2 2 建設工事等」(P. 111)に示すとおりである。

実施区域の敷地面積は、発生土処分場の建設(約7.0ha)、宅地の造成(約18ha、このうち廃棄物処理施設区域 約4.4ha、残置森林 約13.6ha)、関連事業の新設搬入道路(約700m)及び既設改修道路(約450m)である。

なお、新設搬入道路の計画策定は、自然環境の影響を低減するため、一部トンネル化することにより、既存の樹林環境を多く確保し、可能な限り自然環境への影響を低減する。造成に伴う法面については、既存の樹林環境を確保するため傾斜を大きくとる。発生土処分場の跡地については、既設道路等の改修計画以外の場所は森林法に基づき自然林となるよう管理する。